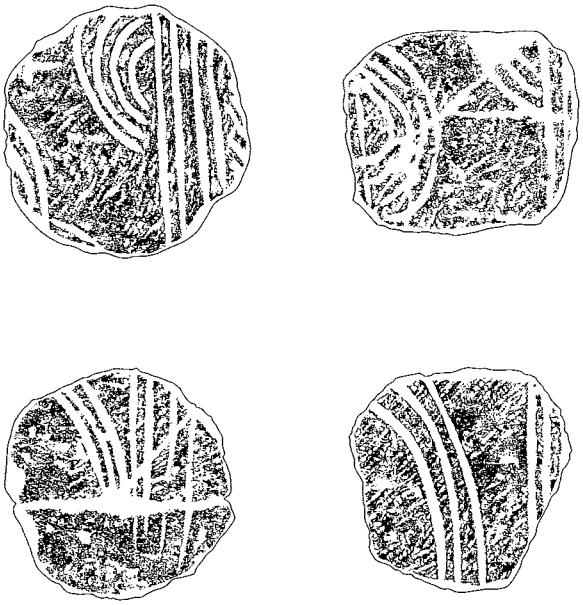
坂　本　堰　下　遺　跡

― 横川駅周辺地域整備事業(二点間輸送事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―



2004

松井田町教育委員会
坂本堰下遺跡調査会

坂 本 堰 下 遺 跡

― 横川駅周辺地域整備事業（二点間輸送事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

２００４

松井田町教育委員会
坂本堰下遺跡調査会

遺 跡 全 景

遺 跡 遠 景

序

群馬県の南西部、長野県との境に位置する碓氷郡松井田町は、奇峰妙義山・清流碓氷川などを有する緑豊かな町です。町の大部分を山地が占め、全国に知られる通行難所碓氷峠のある松井田町は、古来より交通の要衝として栄えてきました。即ち、古代律令体制下の官道である東山道、江戸時代の五街道の一つ中山道、そして明治以降においてはアプト式鉄道などにより様々な文化がもたらされてきました。それらが礎となり現在の松井田町が築かれているのです。

さて、ここに報告いたします「坂本堰下遺跡」は、松井田町による「横川駅周辺地域整備事業　二点間輸送事業」に伴うトロッコ峠の湯駅（仮称）建設に先立ち調査された遺跡です。遺跡地は碓氷川と霧積川に挟まれた台地上に位置しています。発掘調査の結果、本遺跡からは縄文時代の住居跡や配石遺構などが検出されました。同じ台地上に位置する坂本北裏遺跡（平成9年度調査）でも環状列石などの配石遺構が確認されています。真南に裏妙義の岩峰を望むこの台地上は、縄文時代の人々にとって特別な空間であったと考えることができます。また出土した遺物の中には、長野県産の黒曜石や同地方の影響を受けたと考えられる文様を持つ土器などもあり、「峠のまち」としての源を見ることもできます。本遺跡の調査範囲は決して広くはありません。しかし、このような調査を一つ一つ積み重ねてゆくことが、私たちの祖先が生きてきた道を探ることであり、私たちがこれから進むべき方向を考えることにつながると信じています。

最後になりましたが、発掘調査に従事された方々をはじめ、現地調査から本書刊行に至るまで多くのご理解・ご協力をいただきました皆様に心より感謝を申し上げて序といたします。

平成16年9月30日

坂本堰下遺跡調査会
会　長　小林　一郎

例　言

1. 本書は、群馬県碓氷郡松井田町大字坂本字堰下 1,211-1 他に所在する坂本堰下遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、松井田町による「横川駅周辺地域整備事業　二点間輸送事業」に伴うトロッコ峠の湯駅（仮称）建設に伴い、事前の記録保存を目的として実施されたものである。
3. 発掘調査は、坂本堰下遺跡の約 550 ㎡を対象として実施した。
4. 発掘調査期間は以下のとおりである。

   自　平成 16 年 1 月 19 日

   至　平成 16 年 2 月 28 日
5. 整理調査期間は以下のとおりである。

   自　平成 16 年 3 月 19 日

   至　平成 16 年 9 月 30 日
6. 発掘調査および整理調査は、坂本堰下遺跡調査会が実施し、同調査会の指導のもと、有限会社 毛野考古学研究所が担当した。実施にあたっては、和久 裕昭（同研究所 主任調査研究員）と山本千春（同研究所 調査研究員）が作業の進行を担当した。
7. 本文の執筆は、第1章を松井田町教育委員会事務局が、第2章を長井正欣（有限会社 毛野考古学研究所）が、その他を和久が担当した。また、本書の編集は和久が担当した。
8. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他報告書に関係する資料は、松井田町教育委員会が保管している。
9. 発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方々・機関から貴重なご助言、ご指導、ご協力を賜った。ご芳名を記し、あらためて感謝申し上げる（順不同・敬称略）。

   伊藤明宏　金子哲郎　北爪恭彦　鈴木徳雄　大工原豊　山口逸弘

   カネコハウス有限会社　J・T空撮　有限会社 和光建設
10. 坂本堰下遺跡の調査にあたって設けられた調査会組織の内容は、以下のとおりである。

「坂本堰下遺跡調査会」平成15年度

会　長	小林　一郎	松井田町教育長
副 会 長	松本　次男	松井田町教育委員会事務局　社会教育課長
理　事	清水　博	松井田町企画財政課長
	石井　道夫	松井田町教育委員会事務局
		社会教育課社会教育係課長補佐兼係長
監　事	中山　博一	松井田町企画財政課企画係長
事務局長	三浦　尚明	松井田町教育委員会事務局
		社会教育課文化財係長
事務局員	壁　伸明	松井田町教育委員会事務局
		社会教育課指導主事

「坂本堰下遺跡調査会」平成16年度

会　長	小林　一郎	松井田町教育長
副 会 長	伊藤　秀樹	松井田町教育委員会事務局　社会教育課長
理　事	内田　守	松井田町企画財政課長
	石井　道夫	松井田町教育委員会事務局
		社会教育課社会教育係課長補佐兼係長
監　事	中山　博一	松井田町企画財政課企画係長
事務局長	三浦　尚明	松井田町教育委員会事務局
		社会教育課文化財係長
事務局員	壁　伸明	松井田町教育委員会事務局
		社会教育課指導主事

11. 発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至る坂本堰下遺跡の発掘調査および整理調査の参加者は、以下のとおりである(順不同・敬称略)。

〔発掘調査〕	岩嶋　勝	片貝 誠二	片貝 好雄	櫻井 きん	佐藤なみ江	高橋　稔
	中島 佐吉	長谷 純則	矢島　巖	矢島 博文	吉澤 ミサ子	吉本 律子
〔整理調査〕	青木美恵子	石田 満理	磯　洋子	今泉 昌子	小野沢絹子	小佐野博子
	田口富美子	武士久美子	半澤 利江	真下 弘美		

凡　例

1. 本書所収の各種遺構図における方位針は、座標北を示す。
2. 各遺構断面図に付記した水準数値は、東京湾平均海面(T.P.)に基づく海抜をm単位にて示したものである。
3. 本書掲載の地形図については、各図の隅に出典を明記してある。
4. 今回の調査では、進行上の都合により、遺物の位置記録・表示用（4mグリッド）、遺構用（5mグリッド）と2通りのグリッドを併用している。前者については、本文において「旧○－○区」と表し、遺物の注記には「前○－○区」という表現を用いている。
5. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりとし、個別の図におけるスケールに縮尺を明示した。

   ［遺構図］　遺跡全体図 ･･･ 1：150　個別の遺構平面図 ･･･ 1：60　個別の遺構断面図 ･･･ 1：40

   ［遺物実測図］　土器 ･･･ 1：3
6. 土杭・ピット一覧表中、および本文中の遺構に関する事実記載においては、単位としてmまたはcmを用い、小数点以下第1位までの数値を四捨五入のうえ示している。
7. 遺物観察表中の単位については、法量にcm、重さにgを用いている。［ ］内の数値は最大残存値、（ ）内の数値は推定値をそれぞれ示す。
8. 遺構挿図中の土層説明、および遺物観察表において示した色調名は『新版標準土色帖』(2002年版　編著者：小山正忠・竹原秀雄、監修：農林水産省水産技術会議事務局、色票監修：財団法人日本色彩研究所）に倣っている。ただし、実際の色の識別は調査担当者の主観による。
9. 本書にて引用、ないし制作にあたって参照した文献については、その主なものを本文末にまとめて記載した。
10. 本書巻末に掲げた報告書抄録では、遺跡の位置表示として、2002（平成14）年4月1日施行の測量法改正で採用された世界測地系（新国家座標）に基づく緯度・経度、および改正以前の日本測地系（旧国家座標）に拠った緯度・経度の両者を併記している。

目　次

巻頭写真
序
例　言
凡　例
目　次

第1章　調査に至る経緯 …… 1
第2章　地理的・歴史的環境 …… 2
　第1節　地理的環境 …… 2
　第2節　歴史的環境 …… 2
第3章　調査の方法と経過 …… 5
　第1節　調査の方法 …… 5
　第2節　調査の経過 …… 5
第4章　調査の成果 …… 6
　第1節　基本層序 …… 6
　第2節　検出された遺構と遺物 …… 10
　(1)　概　　要 …… 10
　(2)　住 居 跡 …… 10
　(3)　配石遺構 …… 25
　(4)　土坑・ピット …… 34
　(5)　遺構外出土遺物 …… 39
第5章　ま と め …… 50

主要参考文献
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　坂本堰下遺跡の位置…… 1
第２図　周辺の遺跡…… 3
第３図　遺跡の微地形と基本層序(1) …… 6
第４図　坂本堰下遺跡全体図 …… 7
第５図　遺跡の微地形と基本層序(2) …… 9
第６図　第１号住居跡実測図(1) …… 11
第７図　第１号住居跡実測図(2) …… 12
第８図　第１号住居跡遺物分布図…… 13
第９図　第１号住居跡出土遺物…… 14
第10図　第２号住居跡実測図(1) …… 15
第11図　第２号住居跡実測図(2) …… 16
第12図　第２号住居跡実測図(3) …… 17
第13図　第２号住居跡遺物分布図…… 18
第14図　第２号住居跡出土遺物(1) …… 19
第15図　第２号住居跡出土遺物(2) …… 21
第16図　第２号住居跡出土遺物(3) …… 22
第17図　第１号および周辺の配石遺構…… 24
第18図　第１号配石遺構実測図…… 25
第19図　第１号配石遺構 遺物分布図 …… 26
第20図　第１号配石遺構出土遺物(1) …… 27
第21図　第１号配石遺構出土遺物(2) …… 28
第22図　第１号配石遺構出土遺物(3) …… 29
第23図　第１号配石遺構出土遺物(4) …… 30
第24図　第２号配石遺構実測図…… 32
第25図　第３号配石遺構実測図…… 32
第26図　第４号配石遺構実測図…… 33
第27図　第３号土坑実測図…… 34
第28図　第３号土坑出土遺物…… 34
第29図　第４号土坑実測図…… 35
第30図　第４号土坑出土遺物…… 36
第31図　第９号土坑実測図…… 36
第32図　第10号土坑実測図…… 37
第33図　第１号ピット実測図…… 37
第34図　第２号ピット実測図…… 38
第35図　第２号ピット出土遺物…… 38
第36図　第３号ピット実測図…… 38
第37図　遺構外出土遺物(1) …… 40
第38図　遺構外出土遺物(2) …… 42
第39図　遺構外出土遺物(3) …… 44
第40図　遺構外出土遺物(4) …… 46
第41図　遺構外出土遺物(5) …… 48

表目次

第１表　第１号住居跡 出土遺物観察表 …… 14
第２表　第２号住居跡 出土遺物観察表(1)…… 20
第３表　第２号住居跡 出土遺物観察表(2)…… 22
第４表　第１号配石遺構 出土遺物観察表(1)… 27
第５表　第１号配石遺構 出土遺物観察表(2)… 28
第６表　第１号配石遺構 出土遺物観察表(3)… 29
第７表　第１号配石遺構 出土遺物観察表(4)… 30
第８表　第３号土坑 出土遺物観察表 …… 34
第９表　第４号土坑 出土遺物観察表 …… 36
第10表　第２号ピット 出土遺物観察表 …… 38
第11表　土坑・ピット一覧表 …… 39
第12表　遺構外出土遺物観察表(1) …… 41
第13表　遺構外出土遺物観察表(2) …… 43
第14表　遺構外出土遺物観察表(3) …… 45
第15表　遺構外出土遺物観察表(4) …… 47
第16表　遺構外出土遺物観察表(5) …… 49
第17表　遺構外出土遺物 グリッド別集計表 … 49

写真図版目次

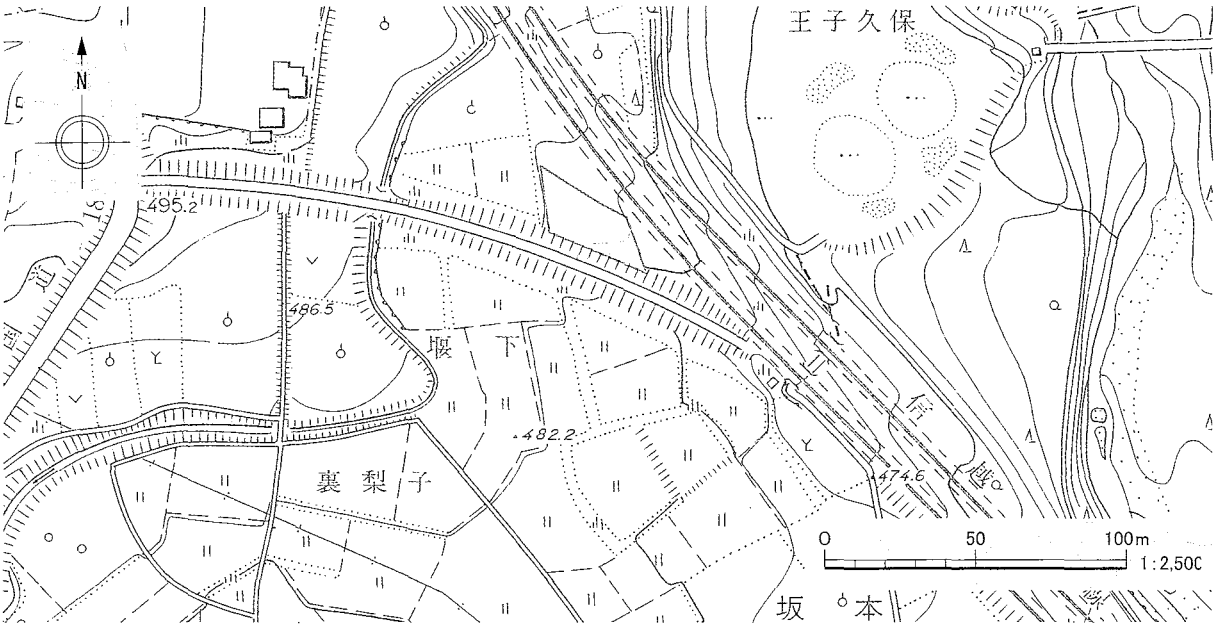
写真図版１　遺跡の位置および周辺の地形
写真図版２　遺跡遠景（東から）
　　遺跡遠景（西から）
写真図版３　遺跡全景
写真図版４　第1号住居跡
　　第1号住居跡　P-２
　　第1号住居跡　P-19
　　第1号住居跡　P-26
　　第1号住居跡　P-27
写真図版５　第2号住居跡　敷石検出状況
　　第2号住居跡　ピット
写真図版６　第2号住居跡　炉
　　第2号住居跡　P-14
　　第2号住居跡　P-16
　　第2号住居跡　凹石出土状況
　　配石遺構群
写真図版７　第1号配石遺構　サブトレンチ調査状況
　　第1号配石遺構　サブトレンチ内遺物出土状況
　　第2号配石遺構
　　第3号配石遺構　検出状況
　　第3号配石遺構　立石復元状況
写真図版８　第3号土坑　遺物出土状況
　　第4号土坑
　　第9号土坑
　　第10号土坑
　　第1号ピット
　　第2号ピット
　　第3号ピット
　　調査風景
写真図版９　第1号住居跡　出土遺物
　　第2号住居跡　出土遺物(1)－①
写真図版10　第2号住居跡　出土遺物(1)－②
　　第2号住居跡　出土遺物(2)
写真図版11　第2号住居跡　出土遺物(3)
　　第1号配石遺構　出土遺物(1)
写真図版12　第1号配石遺構　出土遺物(2)
　　第1号配石遺構　出土遺物(3)
写真図版13　第1号配石遺構　出土遺物(4)
　　第3号土坑　出土遺物
写真図版14　第4号土坑　出土遺物
　　第2号ピット　出土遺物
　　遺構外出土遺物(1)
写真図版15　遺構外出土遺物(2)
写真図版16　遺構外出土遺物(3)
写真図版17　遺構外出土遺物(4)
　　遺構外出土遺物(5)

第1章　調査に至る経緯

今回埋蔵文化財発掘調査の実施された地域は、長野県との境をなす碓氷峠の麓に位置している。松井田町の歴史は碓氷峠を抜きにして語ることはできない。碓氷峠の東麓は、律令体制期の官道である東山道の坂本駅家、近世における中山道碓氷関所跡・坂本宿などが所在する町の歴史の表舞台となり続けた地域である。明治以降においてもこの状況は変わらず、明治26年太平洋側と日本海側を結ぶ大動脈として日本の近代化に大きな役割を果たしたアプト式鉄道が横川・軽井沢間を結んだ。このアプト式の鉄路は、昭和38年粘着運転方式の新線に替わり、さらにその新線も平成9年長野新幹線開業に伴い廃止された。横川地域は峠越えの要衝として発展してきた地域だけに、信越本線横川・軽井沢間の廃止後のあり方が懸念されていた。

このような状況の中、松井田町を特徴づける当エリアの地域振興策の一つとして、横川・軽井沢間周辺整備基本計画が策定された。この中で、横川駅に隣接する「鉄道文化むら」の園内遊具施設として、同所から碓氷峠の森公園交流館「峠の湯」まで信越線の廃線路を利用しトロッコ列車を走らせる計画がもち上がった。これが四大拠点の三点を連携する二点間輸送事業である。この事業の着手にあたり、平成15年6月27日、松井田町長（企画財政課）より松井田町教育委員会（以下教育委員会）に、峠の湯駅（仮称）建設予定地域内における埋蔵文化財確認のための試掘調査依頼が提出された。これを受け同年7月3日から19日にかけて教育委員会が試掘調査を実施したところ、部分的に縄文時代の遺構・遺物が検出された。

この保護について開発主体である松井田町と教育委員会で協議を重ね、①工事内容を変更することにより遺跡の保護が可能な部分については、内容変更による保護を図る。②工事に伴う掘削により遺跡が破壊される範囲は、発掘調査により記録保存を図る。③調査は教育委員会内に事務局をおく坂本堰下遺跡調査会（以下調査会）で実施することの3点で合意した。この後、松井田町と教育委員会で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。また、両者で調査実務の民間機関への委託を申し合わせたうえで、調査会と毛野考古学研究所とで埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、平成16年1月19日発掘調査が開始された。



第1図　坂本堰下遺跡の位置　＊松井田町役場 1992 1:2,500 松井田町行政区画図 No.4 をもとに作成。

第2章　地理的･歴史的環境

第1節　地理的環境

松井田町は群馬県の南西部に位置し、北方は倉渕村、東方は安中市、南方は妙義町および下仁田町、西方は長野県北佐久郡軽井沢町と接している。北西部・西部および南西部を山地で囲まれ、長野県との県境には北から旧碓氷峠、碓氷峠、矢ヶ崎峠、入山峠、和美峠などの峠がある。

本遺跡(1)はJR信越本線横川駅の北西約3.3km、坂本丘陵の北西端部に位置する。坂本丘陵は北西から南東にのびる細長い丘陵で、北東側を霧積川が、南西側を碓氷川がそれぞれ深い谷をつくって南東流している。霧積川は原付近で碓氷川に合流する。坂本丘陵の背後には、愛宕山(530m)・刎石(はねいし)山(710m)・子持山(1107m)が北西方向に向かって稜線をなし、かつては旧碓氷峠に至る中山道として利用されていた。さらに、遺跡南方には丁須の頭など裏妙義の偉容が眼前に迫っている。刎石山は本遺跡から直線距離にして北西1.5km弱ほどの位置にあり、山頂部には500mほどの平坦面が形成されている。その下位からは板状もしくは柱状節理の安山岩が産出され、刎石（羽根石）という名称の由来になっているようである。なお、板状節理の安山岩は敷石住居跡の主要石材として多用されるものである。

また、本遺跡の西北西19kmには度重なる噴火をくり返してきた浅間山(2568m)がある。遺跡地からは背後にある愛宕山などによって眺望することはできないものの、調査地点では1108（天仁元）年の大噴火による浅間B軽石の厚い堆積が確認されており、当地への被害の甚大さを物語っている。

ところで、本遺跡は信越本線の旧線と新線にはさまれた地点にある。信越本線高崎－横川間が開通したのは1885(明治18)年、横川－軽井沢間がアプト式で開通したのは1893(明治26)年のことである。1963(昭和38）年には新線が入線され、旧線が廃止となっている。その後、1997（平成9）年に長野新幹線の開業に合わせて横川－軽井沢間が廃止となり、残された線路のみが往時をしのばせている。また、旧線は整備され遊歩道として活用されている。

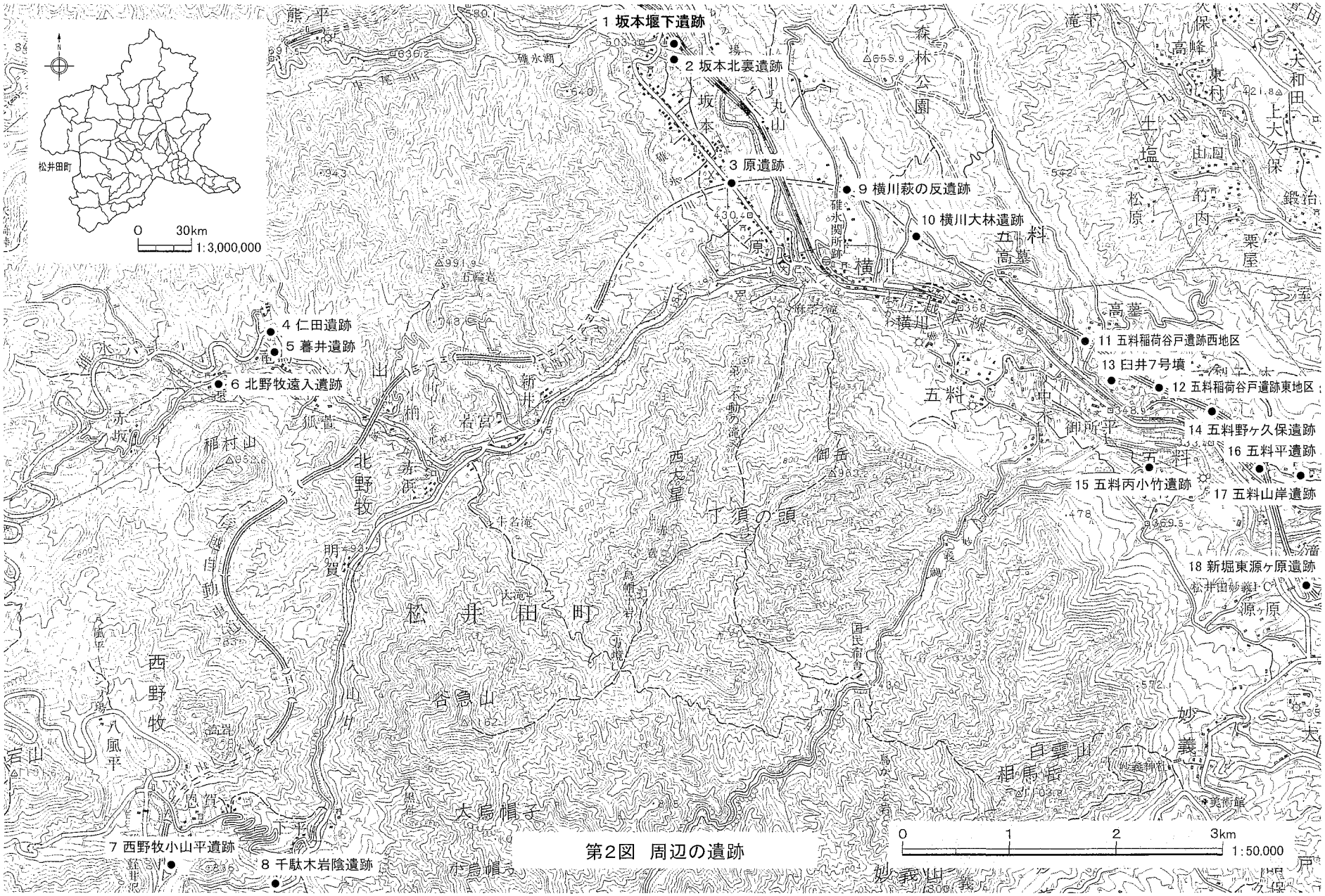
第2節　歴史的環境

本遺跡の所在する坂本は、律令期には東山道駅家が置かれ、近世には中山道の宿場として栄えた地である。上信越自動車道建設に伴って発掘調査された原遺跡(3)では、布掘り工法を用いた大形の掘立柱建物跡が検出され、東山道駅家の一部である可能性が指摘されている。

旧石器時代では細石刃核が碓氷川右岸に位置する行田大道北遺跡から出土している程度であるが、縄文時代以降では中近世に至るまで数多くの遺跡が周知されている。以下、本遺跡周辺の遺跡について縄文時代を中心に概括する。

本遺跡近隣では南東方向200mほどの地点において坂本北裏遺跡(2)が調査されている。縄文時代中期後半～後期前半とみられる環状列石4基や敷石住居跡1軒などが検出されており、本遺跡との関連がうかがえる。

入山には、仁田遺跡(4)・暮井遺跡(5)・北野牧遠入遺跡(6)がある。仁田遺跡では縄文時代中期末～後期前葉にかけての敷石住居跡4軒、暮井遺跡では後期初頭の敷石住居跡1軒や環状列石などが調査されている。なお、両遺跡とも平安時代の住居跡も調査されている。北野牧遠入遺跡からは後期加曾利B式土器が検出されている。



第2図　周辺の遺跡

＊ 国土地理院 1:50,000 地形図のうち、次の4枚を合成して作成。1998 NJ -54-36-2「榛名山」、1991 NJ -54-36-6「軽井沢」、1998 NJ -54-36-7「御代田」、1995 NJ -54-36-3「富岡」。

西野牧・恩賀には、縄文時代中期後半の石棒製作遺跡として全国的に注目された西野牧小山平遺跡(7)と群馬県指定史跡の千駄木岩陰遺跡(8)がある。西野牧小山平遺跡の石棒は最長1mを測る大形品で、原石・未製品・破損品・完成品が総計125点出土している。このほか、破片・剥片、石棒製作工具と想定される敲石、加曾利EⅢ式土器などが伴う状況で出土している。千駄木岩陰遺跡は妙義山から崩落した巨大な転石2石を利用した岩陰遺跡で、縄文時代前期～晩期、弥生時代、古墳時代前・中期の遺物が出土している。前述のような山間遺跡のほか、碓氷川の段丘上にも縄文時代の遺跡が分布している。

碓氷川左岸には、横川大林遺跡(10)や五料野ヶ久保遺跡(14)がある。横川大林遺跡は現在の横川サービスエリアの地点で、縄文時代早期後葉の絡条体圧痕文系土器を伴う土坑群・集石・焼土跡のほか、早期前半の住居跡5軒、前・中期住居跡4軒などが調査されている。さらに、黒曜石を主体とする石鏃製作関係の資料が大量に出土している。五料野ヶ久保遺跡では、縄文時代後期の配石遺構・配石墓28基が検出され、堀之内式・加曾利B式・高井東式土器が出土している。また、前期住居跡7軒、中期住居跡3軒、後期住居跡2軒、敷石遺構2基、集石土坑、埋設土器などのほか、奈良・平安時代の住居跡2軒も調査されている。　碓氷川右岸には、五料丙小竹遺跡(15)や新堀東源ヶ原遺跡(18)などがある。五料丙小竹遺跡では、縄文時代中期の配石遺構1基のほか、平安時代の住居跡1軒が調査されている。新堀東源ヶ原遺跡は、縄文時代中期を中心とする集落遺跡で住居跡182軒、土坑1,030基などの遺構が調査されている。住居跡のうち3軒は早期押型文期のものである。また、前期初頭の花積下層式期の滑石製飾玉の製作状況も確認されている。さらに、弥生時代前～後期の遺物も出土しており、古墳時代終末期の古墳2基や平安時代の住居跡2軒などの遺構も検出されている。

このほか、地形図には明示できなかったが、新堀東源ヶ原遺跡遺跡の東方に行田梅木平遺跡および行田大道北遺跡が続いて位置している。行田梅木平遺跡では、縄文時代中期末～後期前葉にかけて形成されたとみられる配石墓群が3群検出されている。配石墓群は上部の列石と下部の配石墓（墓穴）から構成され、列石は弧状に配されている。同遺跡でも敷石住居跡が検出されているほか、縄文時代前期や弥生時代・平安時代の遺構・遺物も見られる。行田大道北遺跡は縄文時代前期を主体とする集落遺跡で、クッキー状炭化物や琥珀玉などの県内では稀少な遺物が出土している。また、後期初頭とみられる敷石住居跡も調査されている。なお、松井田町内での敷石住居跡は前述の遺跡のほか、国衙森浦朝日遺跡や二軒在家二本杉遺跡などでの調査例がある。

縄文時代以外の遺跡では、本節冒頭でふれた原遺跡や横川萩の反遺跡(9)・五料稲荷谷戸遺跡西地区(11)・同東地区(12)、臼井7号墳(13)・五料平遺跡(16)・五料山岸遺跡(17)がある。横川萩の反遺跡では、焼失したとみられる平安時代の住居跡が調査されている。五料稲荷谷戸遺跡では、奈良・平安時代の住居跡23軒、掘立柱建物跡4棟、大形溝状遺構1条などが調査されている。大形溝状遺構は道跡の可能性が指摘されている。臼井7号墳は東西10m・南北8m・高さ3mの終末期の円墳である。五料平遺跡は奈良・平安時代の集落遺跡で、住居跡7軒、土坑77基、溝4条、集石5基などの遺構が調査されている。遺物は、上野型短頸壺・円面硯などの須恵器が多量に出土しているほか、緑釉椀・刀子・鉄鏃・鉄滓・紡錘車などが見られる。五料山岸遺跡では、奈良時代の土坑1基、平安時代の住居跡1軒、須恵器片集中部1か所が調査されている。須恵器片集中部は廃棄場所と想定されている。

第3章　調査の方法と経過

第1節　調査の方法

試掘調査の成果などにかんがみ、遺構確認面を基本層序中の暗褐色土層上面と定め、その直上までは重機を用いて掘削した。その後、遺構の確認と調査は人力にて行った。現地実測の基準として方眼基準杭と基準点を設置し、各種遺構図は手実測により縮尺 1/20 を原則として作成した。遺構の写真撮影には、35mm のモノクロ、リバーサルの各フィルム、およびデジタルカメラを使用した。

調査にあたっては、上記の杭をもとにグリッドを設定し、遺構に伴っていないと判断された遺物については、このグリッドを採取位置の表示に用いた。また、住居跡付近の遺物についてはドット上げによる採取を行った。

遺跡の略号はSSとし、出土遺物の注記などにこれを用いた。遺物の取り扱いについては、接合にセメダインC、復元にエポキシ系樹脂、写真撮影に 35mm と6×7判のモノクロフィルム、およびデジタルカメラをそれぞれ使用した。

第2節　調査の経過

発掘調査は、2004（平成 16）年1月19日から同年2月28日にかけて実施された。調査日数は、のべ 30 日である。降霜と降雪に作業はしばしば難航したが、調査補助員の尽力により、全体としてはおおむね順調な経過であった。整理調査は同年3月19日から9月30日にかけて実施し、9月30日付で報告書を刊行した。以下、発掘調査の推移について概要を記す。

1月18日　調査開始に先んじ、仮設事務所・トイレ搬入。

1月19日　重機搬入。調査補助員を対象とし、関係者あいさつののち本遺跡調査のガイダンス。

1月20日　重機による表土掘削開始。暗褐色土層上面の露出を作業目標とする。ただし、大形礫が露出した箇所周辺の黒褐色土は残した。

1月28日　ジョレンを用いた人力掘削開始。人力掘削の後半段階より本格的な遺構検出作業。人為的な礫の配列に加え、調査区南西部にて敷石が施された箇所を見いだす。また、調査区西側においてピットが集中する箇所を確認。第1号住居跡として精査を進める。

2月 9日　土坑・ピットの覆土半裁開始。以後随時、同覆土セクションの写真撮影、図化を行う。

2月12日　土坑・ピットの覆土完掘開始。

2月16日　配石遺構周辺の精査。

2月17日　遺跡全景の撮影、および写真測量用の撮影。

2月19日　配石遺構群のうち、エレベーション図を実測した範囲より、部材である礫の抜去、礫の下の調査を開始。調査区南西部にてピットが集中する箇所を新たに確認、至近範囲が柄鏡形（敷石）住居跡である可能性を認め、第2号住居跡と付称のうえ精査を進める。

2月26日　第2号住居跡、炉に対応する位置にある土坑を完掘、最下部より埋設土器とみられる深鉢の胴部破片と微量の焼土粒を検出。住居跡であることがほぼ確定する。またこの日、撤収の準備を開始。

2月27日　第2号住居跡のピット完掘状況の記録を主目的とする空中撮影。遺跡近景の撮影、および写真測量用の撮影。

2月28日　住居跡のエレベーション図作成を中心とする図化作業。仮設事務所など回送ののち撤収。

第4章　調査の成果

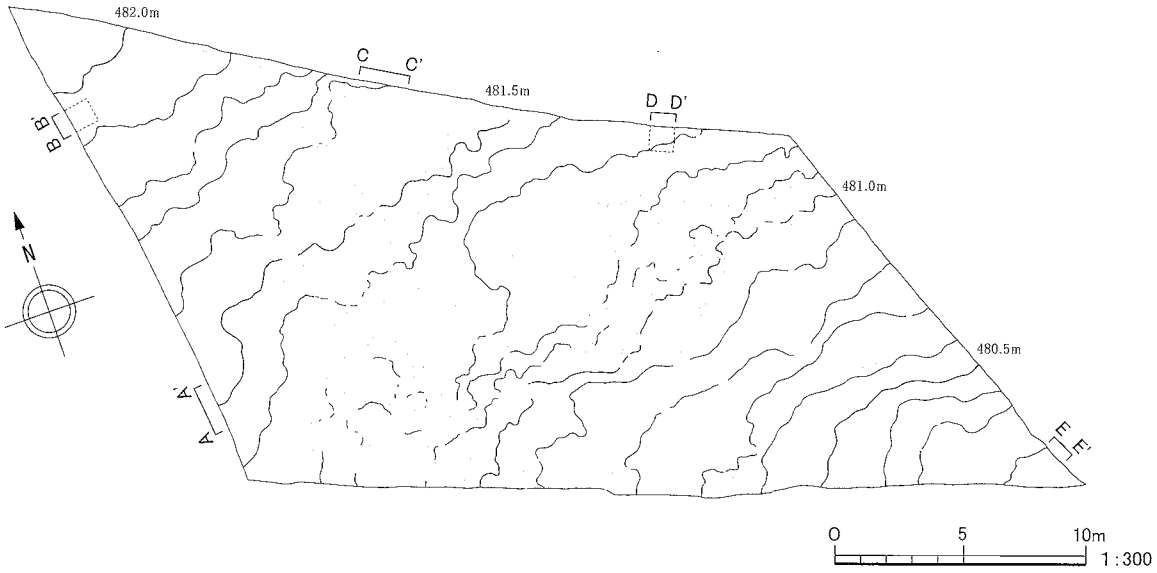
第1節　基本層序

今回の調査では、遺構覆土の由来を確認し、現在および往時における微地形の一端を復元することを主な目的とし、調査区縁辺の5か所にわたって壁面セクションの記録を行った。このうち第3図中のB-B'とD-D'の2か所については、およそ1m四方を遺構確認面より1m強掘り下げる形で、深層調査を行っている。

本遺跡は霧積川と碓氷川にはさまれた尾根状の丘陵上に位置する。縄文時代から現在までを通じ、調査区内の地形は概して北西から南東に向けてゆるやかに下ってゆく。ただし、調査区北西隅では、この傾向に反して第Ⅵ層および第Ⅶ層の下部がやや低いところに位置し、かつ層厚が50cm内外と他所の約2倍に及んでいる。また、下位の色調がやや明るく、含有するパミスが増加する点から、当該箇所におけるこれらの層はそれぞれ2層に細分される。以上のことから、縄文時代の当該箇所では、小さな谷に類する地形が形成されていた可能性がある。なお、第3図の等高線は、遺構確認面での起伏を表したものである。

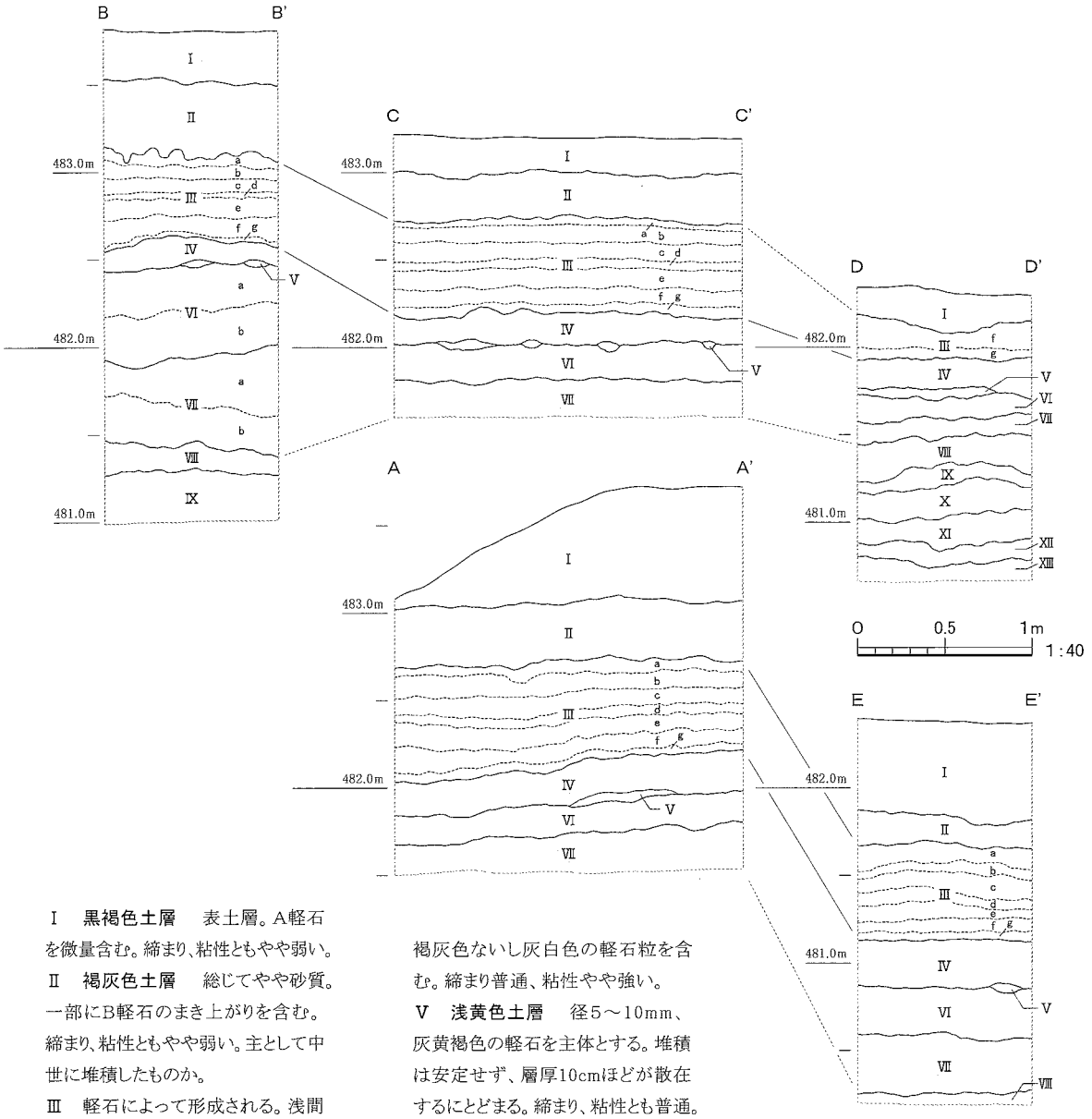
本遺跡の土層堆積状況のうち、第Ⅲ層とした浅間B軽石層(As-B)の堆積が良好である点は特筆されよう。B軽石は調査範囲の全面に認められ、最大で70cm、後世の削平を受けたとみられる箇所でも10cm、平均にしておよそ50cmの層厚をもつ。近辺の山に阻まれ、本遺跡は直接浅間山を望む位置にないものの、浅間山噴火当時(1108年)の風向きなど、堆積に好適な条件がそろった結果と考えられる。また同層は、色調や含有物の粒径をもとに、7層に細分しうる。このうち最上のa層と最下のg層は砂質で、他は総じて発泡の度合いの高い軽石を主体とする。これらの層が示す差異は、浅間山の噴火活動の推移、すなわち時間を追って溶岩の質が変化していく過程を反映したものとみられる。一方、B軽石に比して浅間C軽石層(As-C)の堆積はごく低調で、第Ⅴ層がそれに該当する可能性をもつものの、断定できない。

第Ⅶ層の最下部および第Ⅷ層は、中期末～後期前葉と中期前葉～中葉の遺物をそれぞれ微量包含する。これは試掘調査の所見より予測されていたことで、本調査にあたっては第Ⅶ層下部より遺構検出作業を開始し、第Ⅷ層上面にて遺構の最終的な把握が行われた。



第3図　遺跡の微地形と基本層序(1)

第4図　坂本堰下遺跡全体図



Ⅰ　黒褐色土層　表土層。A軽石を微量含む。締まり、粘性ともやや弱い。

Ⅱ　褐灰色土層　総じてやや砂質。一部にB軽石のまき上がりを含む。締まり、粘性ともやや弱い。主として中世に堆積したものか。

Ⅲ　軽石によって形成される。浅間B相当層。締まり、粘性ともなし。短期間（12世紀初頭）にて堆積した層であるが、本遺跡では以下の特徴をもつ7層に細分できる。

- a　褐灰色土層　砂質。層厚10cm前後、含有物の粒径は1mmほど。
- b　灰黄褐色土層　粒径5～40mmの軽石が主体。
- c　褐灰色土層　粒径5～30mmの軽石が主体。
- d　褐灰色土層　Ⅲ層の中では最も暗い色調。粒径5～20mmの軽石が主体。
- e　灰褐色土層　粒径5～40mmの軽石が主体。
- f　灰黄褐色土層　粒径5～30mmの軽石が主体。
- g　褐灰色土層　砂質。層厚10cm前後、含有物の粒径は1mmほど。

Ⅳ　黒褐色土層　径5～10mm、褐灰色ないし灰白色の軽石粒を含む。締まり普通、粘性やや強い。

Ⅴ　浅黄色土層　径5～10mm、灰黄褐色の軽石を主体とする。堆積は安定せず、層厚10cmほどが散在するにとどまる。締まり、粘性とも普通。浅間C相当層（4世紀半ば）か。

Ⅵ　黒褐色土層　径2～5mmで赤橙色の軽石粒、および径2～10mmの黄褐色パミスを少量含む。締まり、粘性とも普通。

Ⅶ　黒褐色土層　Ⅵ層に比べ色調が明るく、黄褐色パミスの含有量が減る。締まり、粘性ともやや強い。最下部において縄文時代中期末～後期前葉の遺物を微量包含する。

Ⅷ　暗褐色土層　径2～10mmの黄褐色パミスを微量含む。締まり、粘性とも強い。縄文時代中期前葉～中葉の遺物を微量包含する。

Ⅸ　暗黄褐色土層　径2～10mmの黄褐色パミスを比較的多く含む。締まり、粘性ともきわめて強い。

Ⅹ　暗黄褐色土層　径5～20mmの黄褐色パミス、ロームブロックないしローム粒を多く含む。締まり、粘性ともきわめて強い。

Ⅺ　暗黄褐色土層　ローム層。径5～20mmの黄褐色パミスおよび橙色パミスを多く含む。締まり、粘性ともきわめて強い。

Ⅻ　灰黄褐色土層　Ⅺ層に比べパミスの含有量が減り、少量となる。締まり、粘性ともきわめて強い。

XIII　黒褐色土層　パミスの含有量がさらに減る。締まり、粘性ともきわめて強い。

第5図　遺跡の微地形と基本層序（2）

第2節　検出された遺構と遺物

(1) 概　要

調査の結果、遺構として敷石(柄鏡形)住居跡2軒、配石遺構4基、土坑 12 基(うち1基は埋設土器を伴う)、ピット 17 基、および遺物では縄文土器約 2,600 点、石器 19 点、土製品9点、石製品1点の検出をみた。構築ないし廃絶時期の想定が可能な遺構の大多数は、縄文時代後期初頭～前葉に属する。一方、遺構外出土もあわせた遺物の内容は、縄文時代前期後葉から後期前葉までの時期幅をもっており、上記以前の時期にも当地がなんらかの形で生活の場として用いられていた可能性を示唆している。

遺構・遺物の分布状況をみると、住居跡を含めた配石(敷石)を伴う遺構群がおおむね1組の弧をなして展開するほか、その近辺で遺物の分布が密になる。その反面、北に向けて凸となる弧状の遺構群の内側(南側)では、遺物の分布が希薄となる。土坑・ピットについては、やはり上記遺構群の近くに多く位置するようにも見えるが、有意な傾向としてとらえうるかどうか、判然としない。

(2) 住 居 跡

第1号住居跡

位　置　：F・G-2・3区、南の第2号住居跡と接するように位置する。遺構確認面の標高は 481.4 ～ 481.5 m、主軸方位は判然としないが、N-20°-W 前後と推測される。

残存状態：基本層序の第Ⅶ層（黒褐色土層）レベルでは平面プランは確認できず、また掘り方レベルでの精査を試みたが、壁面の立ち上がりを把握することはできなかった。遺物の分布状況から遺構のおおまかな規模と範囲を類推し、付随するピットを複数検出したことから、住居跡と認定した。

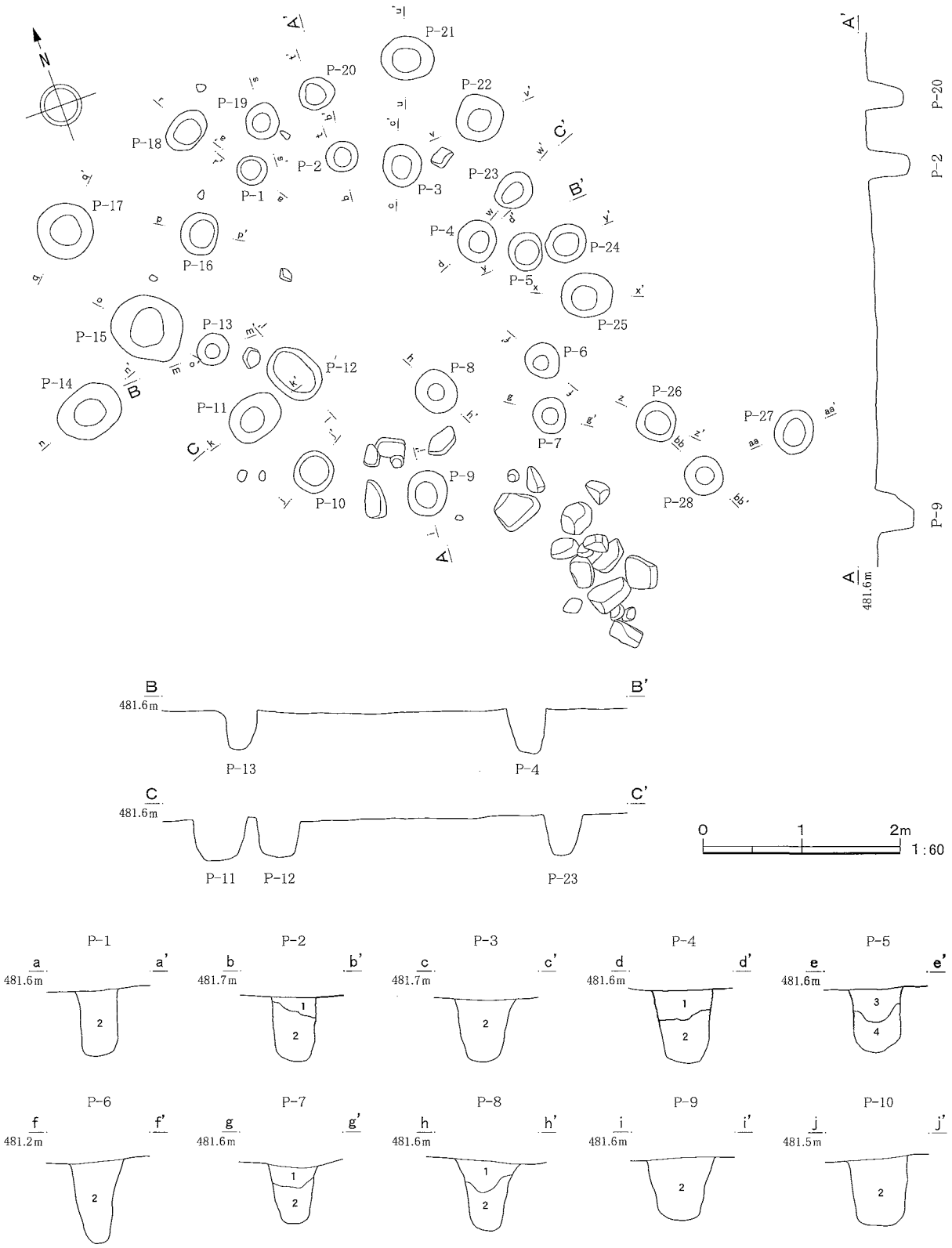
形　態　：上記の残存状態により、平面および断面形の詳細は不明であるが、後述するピットの配置状況から、平面柄鏡形を呈するものと推測される。

規　模　：ピットの集中箇所を基準とし、主体部と張出部をあわせて長軸約 8.5 m、短軸約 6.6 mと推測される。

付帯施設：おおむね環状に分布するピット 28 基前後が、柱穴に相当すると考えられる。直径 40.0cm、深さ 50.0cm を上回る、しっかりとしたつくりのものが大半を占める。また、壁柱穴の内側にもう1群が、環状または方形をなして配置されているようにも見える。穴の角度が住居の上部中央へ向けて顕著に傾く例は見受けられない。なお、埋甕など、他種の付帯施設は確認されなかった。

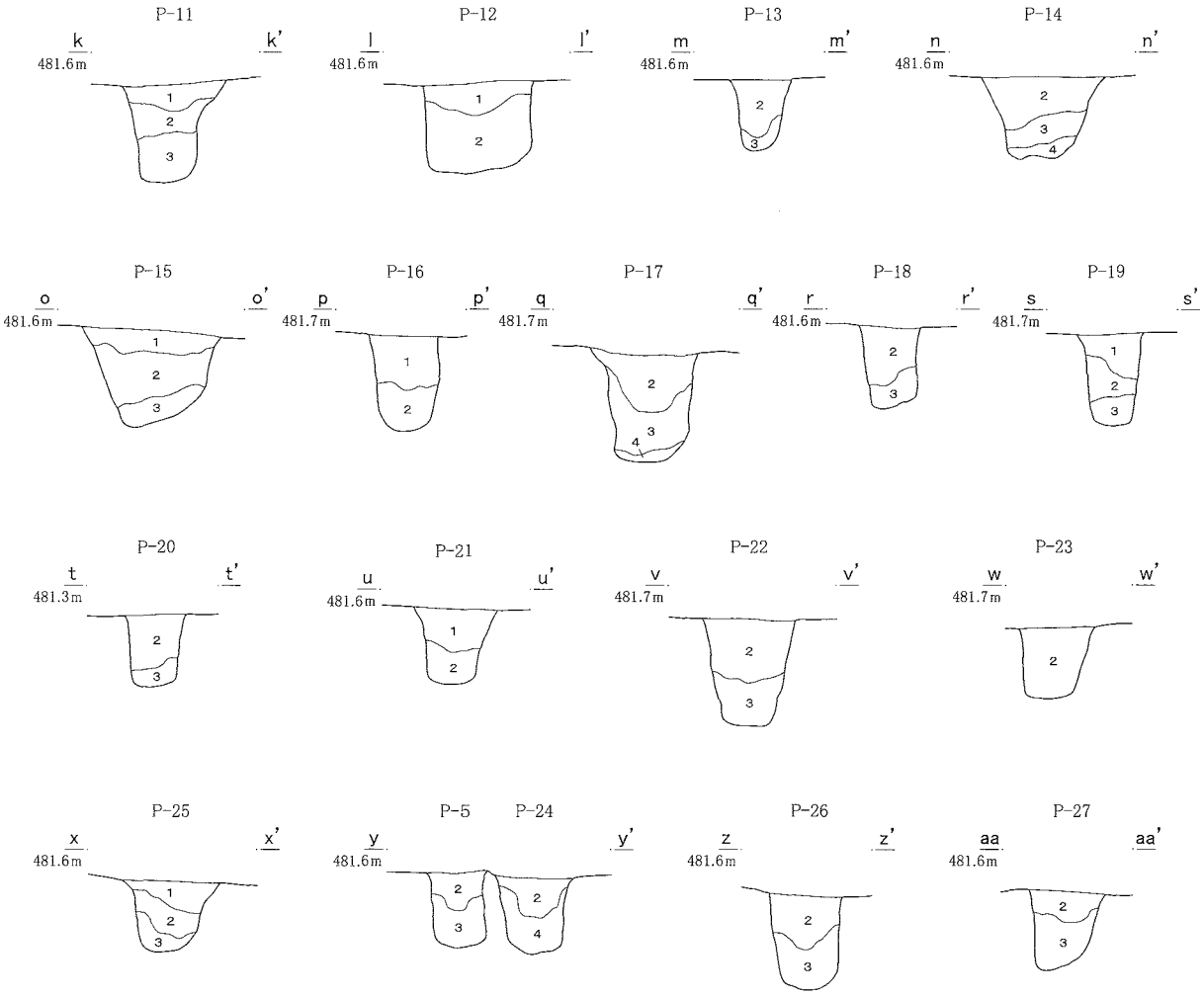
その他の所見：明確な敷石は検出されていない。とくに、円形にピットがめぐる範囲の内側、すなわちおおむね主体部に相当すると見られる箇所では、比較的高いレベルでも礫は皆無に等しかった。ただし、本遺構南部において残っていた礫 10 数点は、連結部および張出部の敷石に相当する可能性がある。

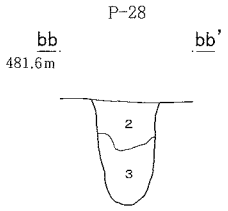
また、ピットのうち、かなり高い割合で内部から礫の検出される例が見受けられた。これをもって、本来は主体部縁辺にあった敷石や周礫が、なんらかの原因により転落した結果とみるのも不可能ではない。しかし、用途に適さない形状の礫が多い点、ピットの壁面に突き刺さったような状態で検出される例が多い点、さらに地山である第Ⅷ層中に自然の転石が少なからず含有されている点から、これらの礫のほとんどは遺構構築物に属さないものと解釈したい。



1 暗褐色土層
粒径3～5mmの灰白色粒、2mm前後の赤橙色粒をそれぞれ微量含む。締まり、粘性とも強い。
2 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、3mm前後の灰白色粒、1mm前後の赤橙色粒をそれぞれごく微量含む。締まり、粘性とも強い。
3 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、2mm前後の灰白色粒をごく微量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。
4 暗黄褐色土層
粒径5～10mmの黄褐色粒を少量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。

第6図　第1号住居跡実測図（1）





1 暗褐色土層
粒径3～5mmの灰白色粒、2mm前後の赤橙色粒をそれぞれ微量含む。締まり、粘性とも強い。
2 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、3mm前後の灰白色粒、1mm前後の赤橙色粒をそれぞれごく微量含む。締まり、粘性とも強い。
3 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、2mm前後の灰白色粒をごく微量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。
4 暗黄褐色土層
粒径5～10mmの黄褐色粒を少量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。

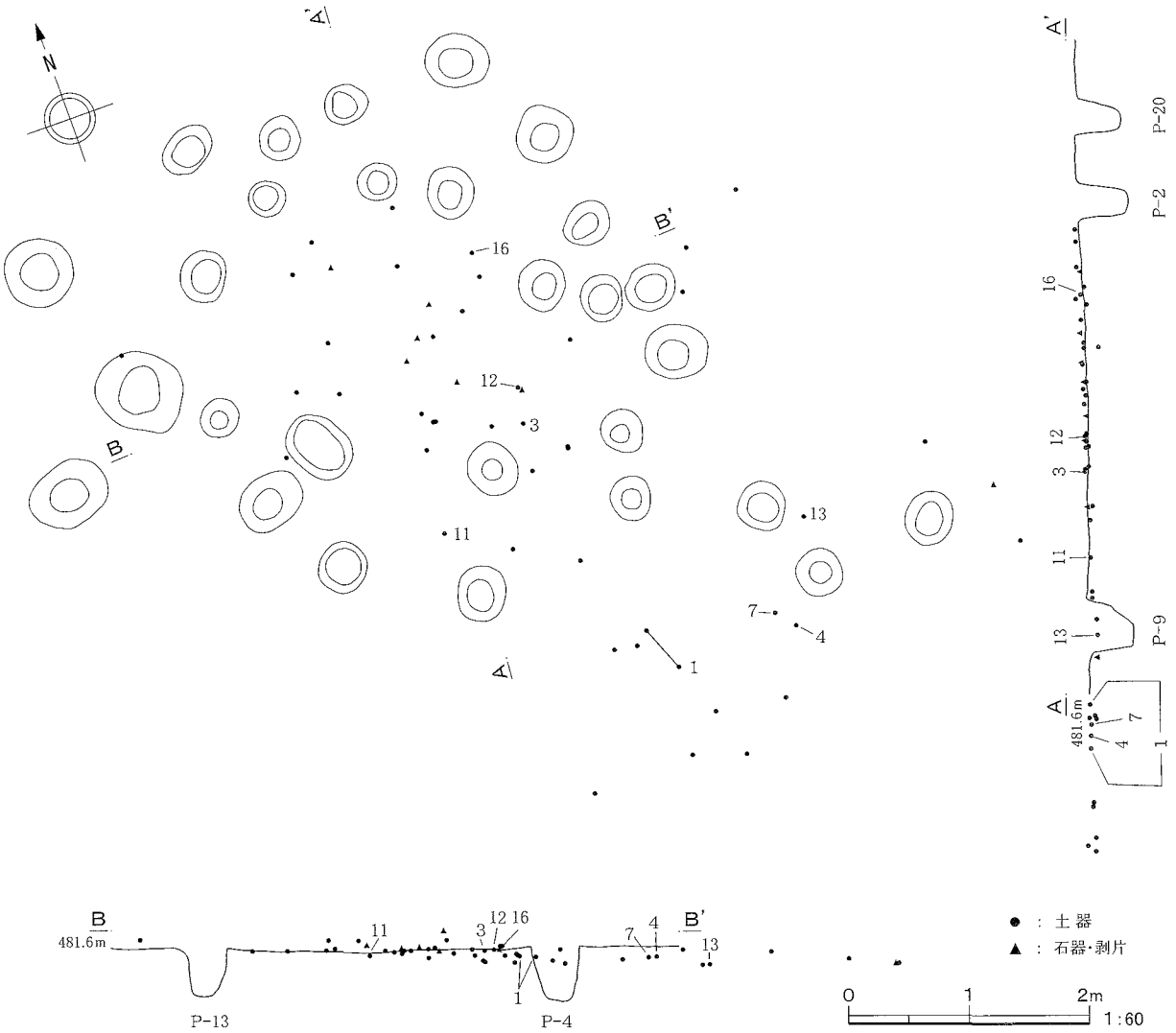
0　1　2m
1:40

第7図　第1号住居跡実測図(2)

出土遺物：　土器破片 101 点、剥片3点が出土した。遺物は主体部と想定される範囲に集中するほか、上述した張出部に相当する可能性がある位置にも散在している。見つかった時点での調査の進捗状況から判断して、遺物のほとんどが、覆土ではなく掘り方レベルでの出土と考えられる。土器破片の総重量は 1,556.7g、破片1点あたり 15.4g あまりの計算となるように、そのほとんどが小片であった。なお、剥片の石質の内訳は、黒曜石2点、チャート1点となっている。

第9図に、出土した土器破片の実測図および拓影図を掲げた。遺物の主な製作時期は後期初頭から前葉まで、土器型式にしてほぼ3型式分の幅（称名寺1式～堀之内1式）を示す。ただし、加曾利ＥⅣ式と堀之内2式の例もわずかに含んでいる。

1・2の口縁部破片、および9・10 の胴部破片は称名寺1式。円孔をもつ把手の内側に、1では円形刺突



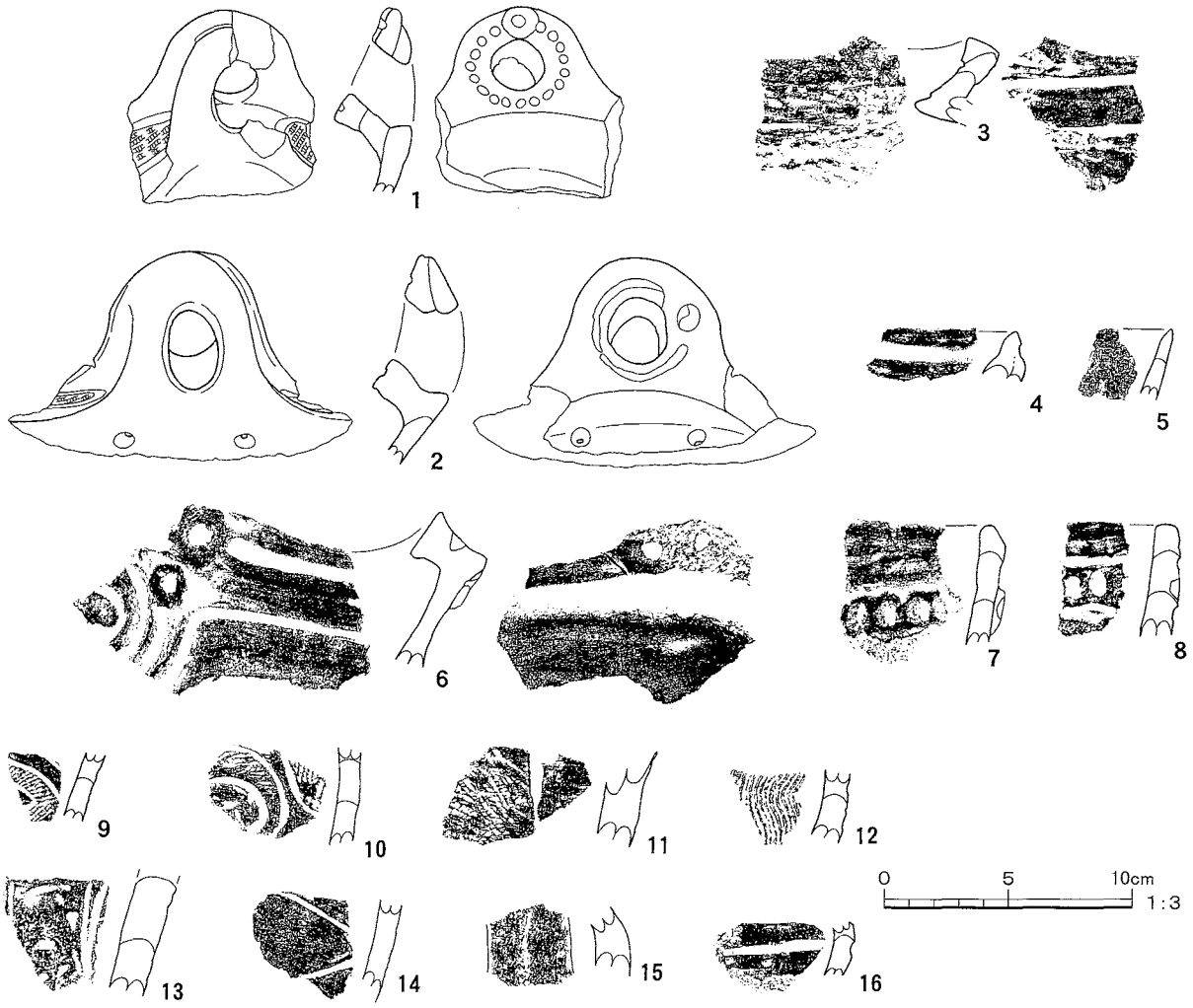
第8図　第1号住居跡遺物分布図

文、2では沈線がそれぞれC字状にめぐり、これに1個の環状貼付文ないし凹点が組み合わせられる。称名寺2式において発達する窩紋連繋沈紋（鈴木 1991）の先行的な形態と見なしうる。7･8の口縁部破片は、称名寺式期の粗製土器か。口縁部付近の鎖状隆帯、およびそれに類する意匠を沈線および刺突にて表現する例は、前橋市荒砥二之堰遺跡（石坂 1985）などに類例がある。11も同時期の粗製土器とみたが、あるいは加曾利EⅣ式に含めるべきかもしれない。12の縦位に蛇行する条線は、中期後葉から後期前葉までの深鉢（ないし鉢）胴部にしばしば用いられる加飾で、破片のみで細別時期を判断するのが難しい。

4～6の口縁部破片および13の胴部破片は、堀之内1式と考えられる。4、6では、口縁部付近に見られる1条の横位沈線が分類上の手がかりとなる。14の胴部破片は、堀之内2式の深鉢。幾何学文の一部が認められる。文様は、いわゆるアサガオ形の深鉢によく用いられるものであるが、くびれをもつ深鉢の胴部中位となる可能性もある。

15･16は、深鉢以外の器形とみられる個体。15は、加曾利EⅣ式～称名寺式の間に見られる鉢の把手。16は、浅鉢ないし鉢の胴部破片。器面の色調は後期中葉の加曾利B1式にも似るが、堀之内2式か。

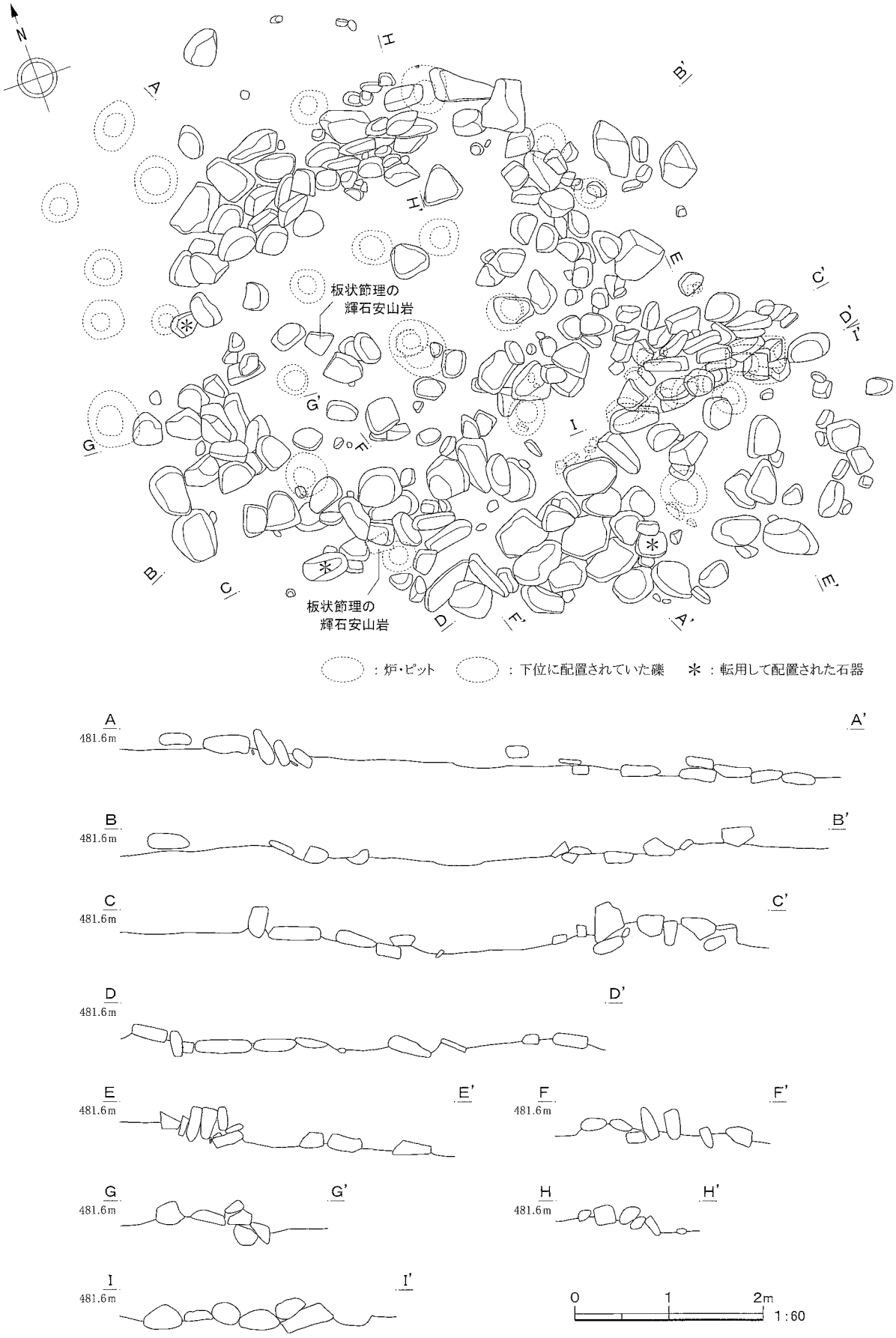
時　期　：　断片的に把握しうる住居跡の特徴、掘り方レベルより出土した遺物の内容から、縄文時代後期前葉に構築および廃絶されたものと推測される。



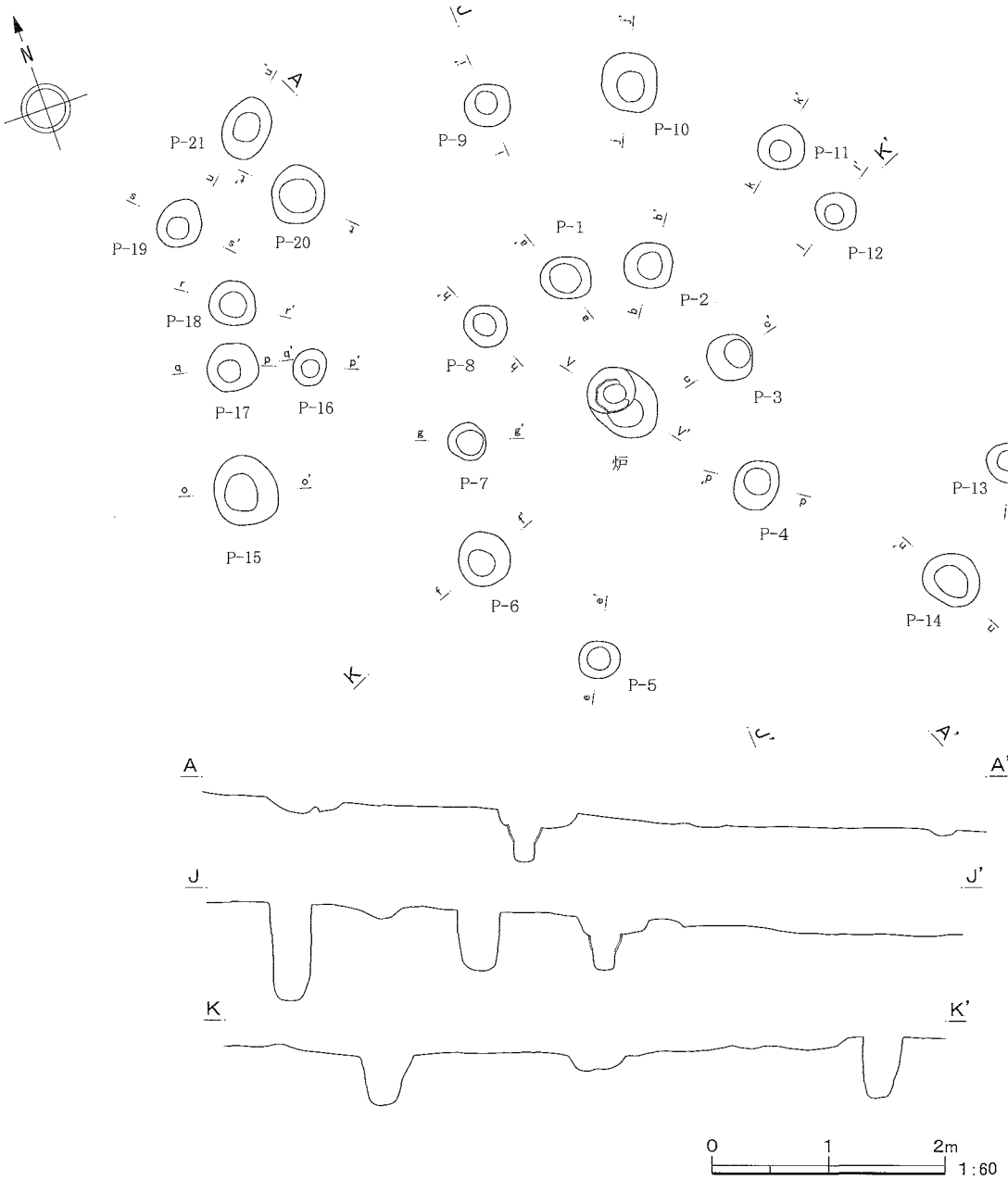
第9図　第1号住居跡出土遺物

No.	器種	計測値(cm)／残存	器形・文様などの特徴／備考	色調（外）	色調（内）	胎　土	注　記
1	深鉢	／把手部	環状把手2個を頂部で接合。口縁部は縄文施文後、沈線区画。内面、孔の周囲に円形刺突文、頂部に環状貼付文。	橙色	黒色	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒	P17
2	深鉢	／把手部	環状把手2個を頂部で接合。口縁部は縄文施文後、沈線区画。内面、孔の周囲に沈線、向かって右側に刺突文。／把手部下に焼成後穿孔2。	にぶい黄褐色	黒褐色	石英・黒色粒・白色粒・赤褐色粒	124
3	深鉢	／口縁部片	口唇部は内側に突出し突起部に向かう。内面に横位沈線2条。	にぶい黄褐色	褐色	石英・角閃石・白色粒	107
4	深鉢	／口縁部片	外面、口縁部に沈線。／内外面ミガキ。	暗灰黄色	暗灰黄色	石英・黒色粒・白色粒	3
5	深鉢	／口縁部片	破片内は無文。／把手片もしくは注口部片の可能性あり。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・白色粒・赤褐色粒	P23
6	深鉢	／口縁部片	口縁部は内側に屈曲。環状貼付文・連繋沈線および沈線文。	にぶい黄褐色	明黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	P17
7	深鉢	／口縁部片	鎖状隆帯。	褐色	灰黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	8
8	深鉢	／口縁部片	横位沈線区画内に深い刺突文。	黒色	灰黄褐色	石英・黒色粒・白色粒・チャート	P17 周辺
9	深鉢	／胴部片	沈線区画内に縄文。	黒褐色	にぶい黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	P11
10	深鉢	／胴部片	沈線区画内に縄文。	にぶい黄褐色	黒褐色	白色粒・角閃石	一括
11	深鉢	／胴部片	縄文後、太めの沈線、縄文磨り消し。	にぶい黄褐色	黒色	石英・角閃石・白色粒・砂礫	123
12	深鉢	／胴部片	波状条線文。／内面は丁寧なミガキ。	にぶい褐色	黒褐色	石英・黒色粒・白色粒・チャート	108
13	深鉢	／胴部片	沈線区画内に列点刺突文。	にぶい褐色	にぶい黄橙色	角閃石・白色粒	138
14	深鉢	／胴部片	沈線区画後、縄文磨り消し。	にぶい赤褐色	黒色	石英・黒色粒・白色粒	P13
15	鉢	／把手部片	橋状把手。縦位沈線か。	黒褐色	黒褐色	石英・黒色粒・白色粒	一括
16	浅鉢か	／胴部片	横位沈線。／内外面ミガキ。	黒褐色	黒色	黒色粒・白色粒	110

第1表　第1号住居跡 出土遺物観察表



第10図　第2号住居跡実測図（1）



第11図　第2号住居跡実測図(2)

第2号住居跡

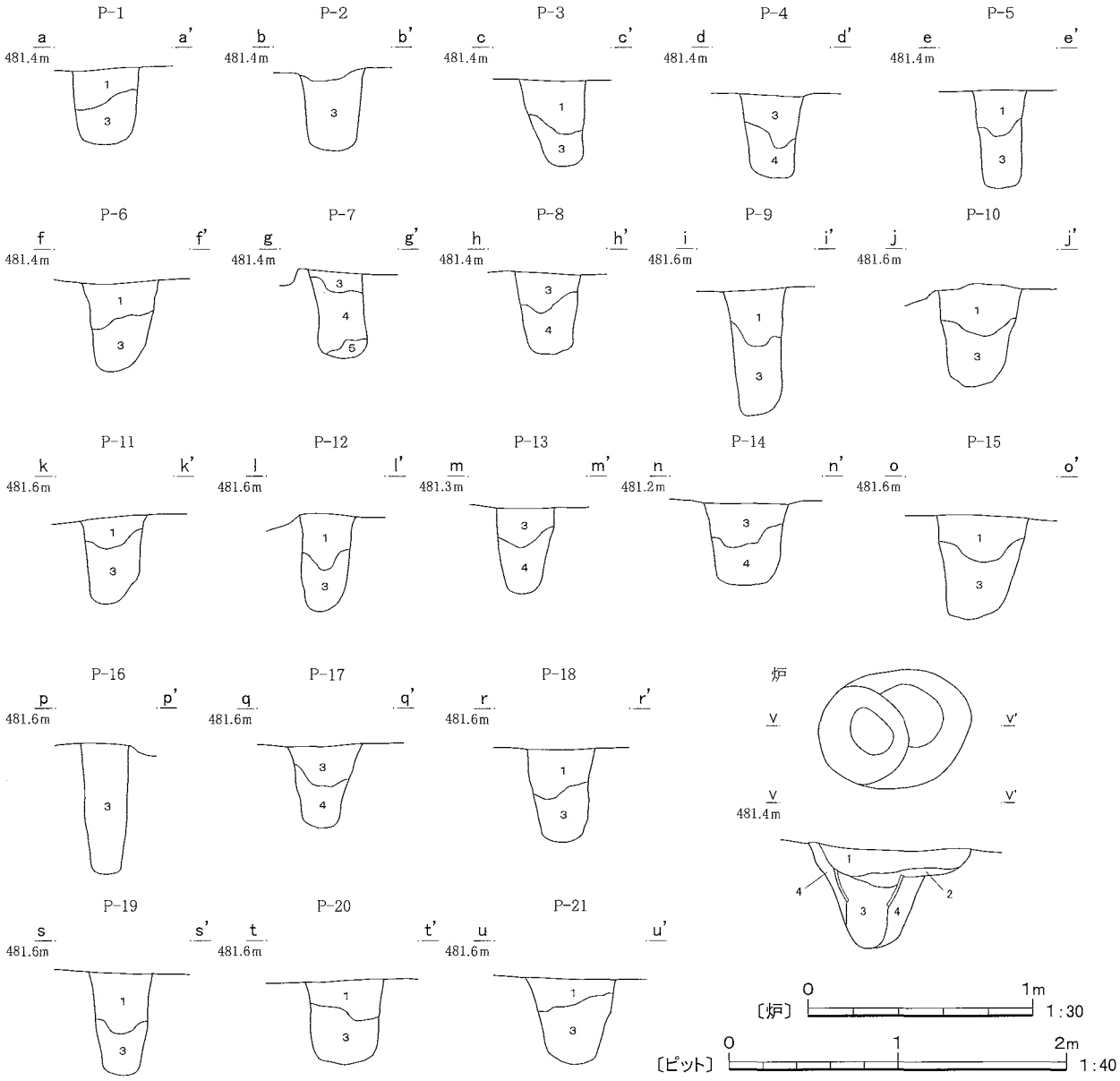
位　置　：　F・G-1・2区、北の第1号住居跡、および東の第1号配石遺構と接するように位置する。遺構確認面の標高は481.0～481.4ｍ、主軸方位は第1号住居跡と同様、N-20°-W前後である。

残存状態：　基本層序の第Ⅶ層（黒褐色土層）上面を掘削し始めた当初から、すでに敷石らしき礫が当該箇所にて多数露出しており、その時点で調査担当者は配石遺構の一部と認識していた。しかし、ほどなくして現れたのは、平面柄鏡形に配置された礫であった。精査を進めたところ、柱穴に相当するピットと土器埋設炉が検出され、敷石(柄鏡形)住居跡であることがほぼ確定した。

形　態　：　礫とピットの配置状況から、平面柄鏡形の敷石(柄鏡形)住居跡と見なされる。主体部の縁辺を固める礫の配置状況は、円形と方形の中間のような形状を呈する。また、主体部のうち連結部付近では、左右にまっすぐのびる配礫があり、弧状の第1号配石遺構と連結するような形勢をとる。

規　模　：　礫が配置された範囲、ピットの集中範囲とも、長軸約7.5ｍ、短軸約6.0ｍを測る。

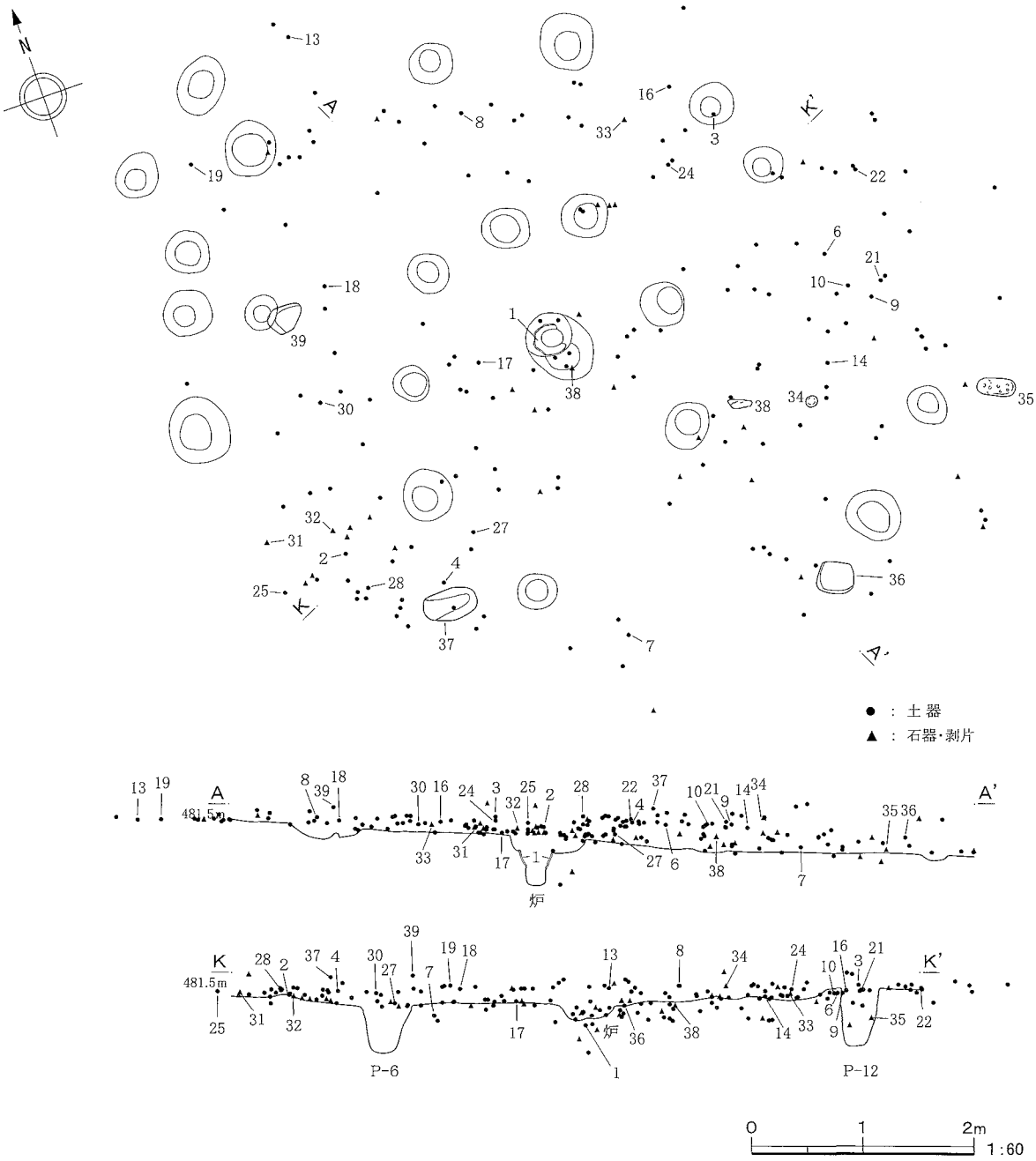
付帯施設：　主体部の中央にて土器埋設炉が検出された。掘り込み上部の平面形は南北に長い楕円形を



1 暗褐色土層
粒径3～5mmの灰白色粒、2mm前後の赤橙色粒をそれぞれ微量含む。締まり、粘性とも強い。
2 暗褐色土層
粒径3～5mmの灰白色粒、2mm前後の赤橙色粒、および2mm前後の焼土粒をそれぞれ微量含む。締まり、粘性ともやや強い。
3 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、3mm前後の灰白色粒、1mm前後の赤橙色粒をそれぞれごく微量含む。締まり、粘性とも強い。
4 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、2mm前後の灰白色粒をごく微量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。
5 暗黄褐色土層
粒径5～10mmの黄褐色粒を少量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。

第12図　第2号住居跡実測図(3)

呈し、長径67.0cm、短径52.0cm、深さ15.0cmを測る。掘り込み下部は土器を据えるための掘り方となっており、炉の北部に偏る。東西にやや長く、長径44.0cm、短径38.0cm、深さ30.0cmとなる。土器は深鉢の胴部中位で、細かく割れた状態ながら原位置をとどめており、全周の4分の3ほどが残っていた。炉の覆土は4つの層に細分され、このうち2層では微量の焼土粒が認められた。3・4層を分かつ線の形状から、埋設当初は出土部位より下まで残存していた可能性がある。反面、口縁部付近が本来残っていたかどうかは不明である。



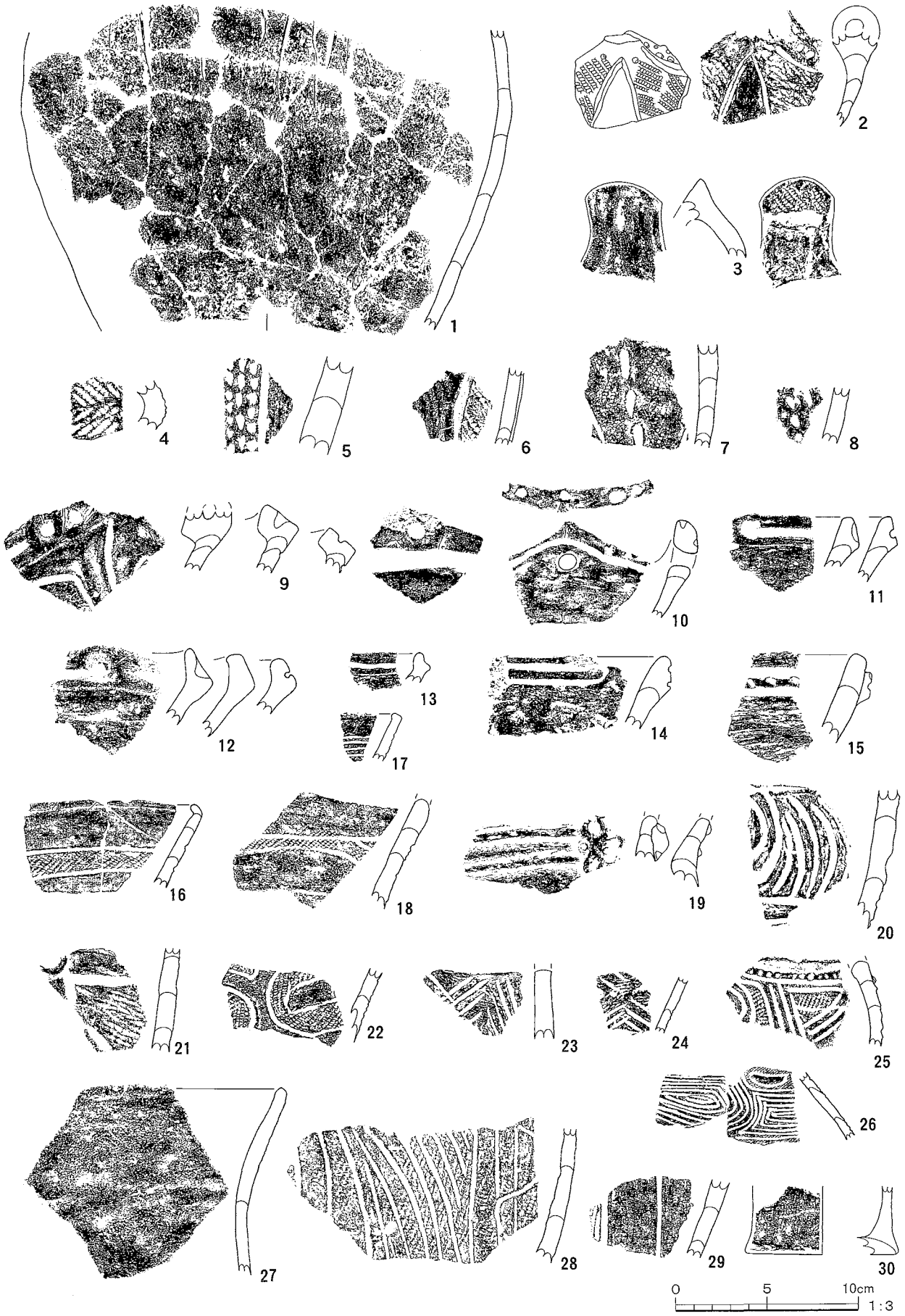
第13図　第2号住居跡遺物分布図

また、おおむね環状に分布するピット21基前後が、柱穴に相当すると考えられる。直径40.0cm、深さ50.0cmを上回る、しっかりとしたつくりのものが大半を占める。壁柱穴の内側にもう1つ、環状のピット群が配置されているように見え、そのようすは第1号住居跡に比べより顕著である。

なお、埋甕など他種の付帯施設は確認されなかった。

その他の所見：　遺跡の微地形とあいまって、住居は南向きの出入り口から北の奥に向かい、さらに東から西に向けてもゆるやかな上り坂となっていたものと考えられる。

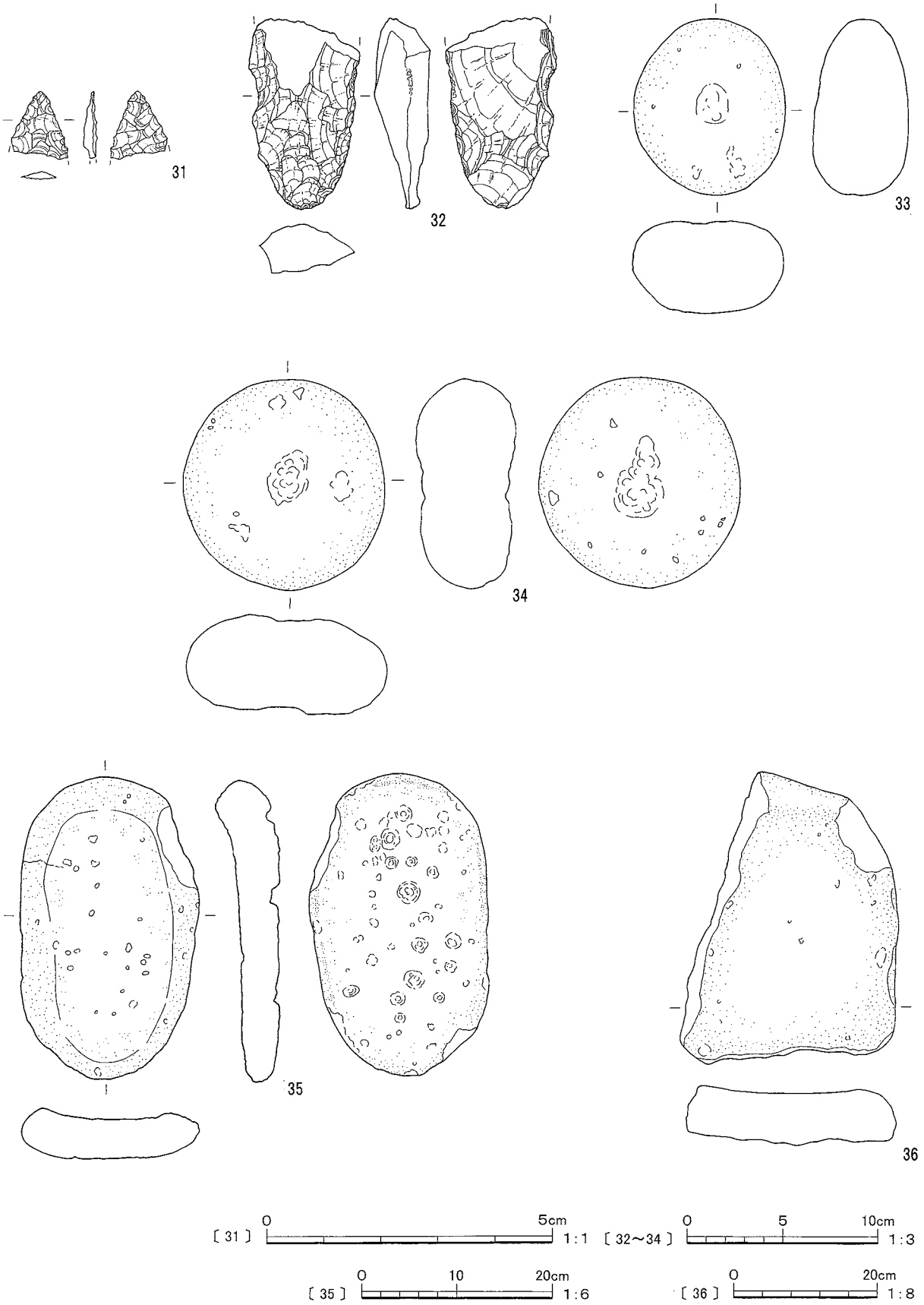
礫の配置状況には、①通例のように礫を平らに敷き詰めるものと、②立てかける、もしくは積み上げて礫を並べるものとの2者が認められる。①の状況は、南部の張出部で確認されるにすぎない。一方②は、本住居跡の主体部縁辺にて著しい。先述した連結部付近と奥にみられる礫の配置からは、念入りに行われた跡がうかがえる。とくに、前者では礫を3段前後積み上げられ、最も下の礫は丁寧に並べて埋め込まれていた。



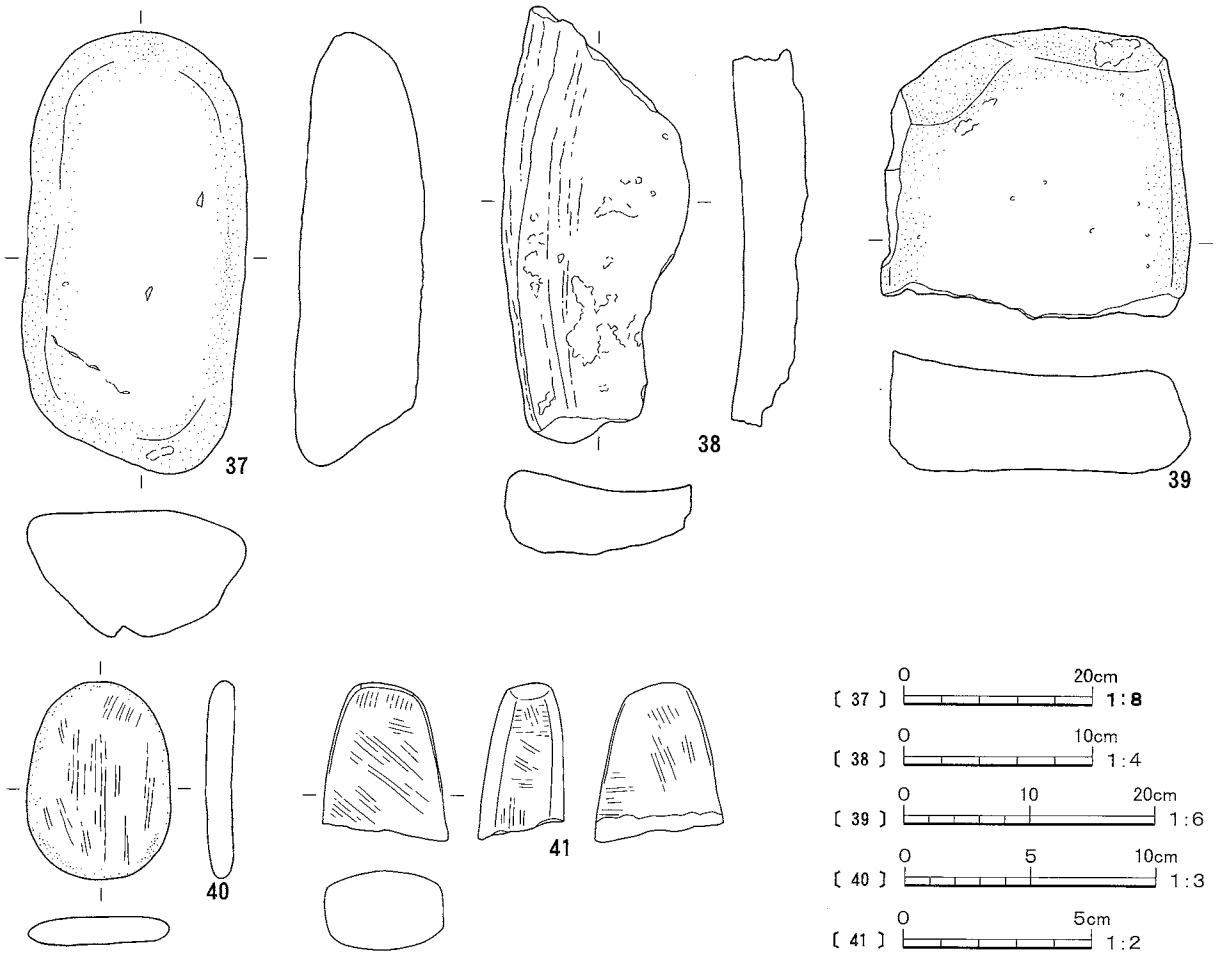
第14図　第2号住居跡出土遺物(1)

No.	器種	計測値(cm)／残存	器形・文様などの特徴／備考	色調（外）	色調（内）	胎　土	注 記
1	深鉢	／胴部片	無文。／内外面ミガキあるが、器面著しく荒れる。胴部推定径 27.0cm。	褐色	褐色	石英・黒色粒・白色粒	炉埋
2	鉢	／口縁部片	把手部を欠損。把手部下は縄文後、「八」状に沈線区画、縄文磨り消し。口縁部に円形刺突文。	にぶい橙色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・白色粒	91
3	鉢	／把手部片	口縁部につけられた橋状把手。頂部に縄文。	にぶい橙色	にぶい褐色	石英・黒色粒・白色粒・チャート	115
4	深鉢	／把手部片	橋状把手部片。外面に縄文。	明褐色	明褐色	石英・黒色粒・白色粒	128
5	深鉢	／胴部片	沈線区画内に刺突文を密に施文。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・白色粒	一括
6	深鉢	／胴部片	縦位弧状の隆線文。縄文後、隆線に沿って沈線。	にぶい黄橙色	黒褐色	角閃石・白色粒	136
7	深鉢	／胴部片	LR 縄文後、沈線区画し、さらに刺突状の短沈線。	黒褐色	灰黄褐色	石英・黒色粒	175
8	深鉢	／胴部片	列点刺突文。	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	83
9	深鉢	／口縁部片	突起の頂部欠損。口縁部は内側に屈曲する。口縁部に深い刺突文と沈線。外面は沈線文。内面口縁部に刺突文。	灰黄褐色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・白色粒・チャート	103
10	深鉢	／口縁部片	波状口縁。口唇部に円形刺突文。口縁部に沿って沈線。波頂部下に円形孔。	黒褐色	灰黄褐色	角閃石・白色粒	104
11	深鉢	／口縁部片	口縁部に円形刺突文と連繋沈線。	灰黄褐色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・白色粒	一括
12	深鉢	／口縁部片	内傾するゆるやかな波状口縁。円形刺突文と連繋沈線。	褐灰色	灰黄褐色	黒色粒・白色粒	一括
13	深鉢	／口縁部片	口縁部は内傾する。口縁部に沈線1条めぐる。	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	石英・白色粒・黒色粒	76
14	深鉢	／口縁部片	口縁部に長楕円形状に沈線。	褐灰色	灰黄褐色	黒色粒・白色粒・チャート	112
15	深鉢	／口縁部片	横位沈線のある隆帯上位に斜位の刺突文。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒・赤褐色粒	P11
16	深鉢	／口縁部片	口縁部は短く内傾する。口縁部下の横位沈線区画内に縄文。	灰黄褐色	にぶい黄褐色	白色粒・チャート	114
17	深鉢	／口縁部片	口唇部は内側に突出する。口縁部下に横位沈線4条。	にぶい黄橙色	黒褐色	黒色粒・白色粒	153
18	深鉢	／胴部片	沈線区画後、縄文充填。	黒褐色	にぶい黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	87
19	深鉢	／胴部片	2条の隆帯上に上下左右に円形刺突のある貼付文。	にぶい黄褐色	褐色	石英・黒色粒・白色粒・赤褐色粒	85
20	深鉢	／胴部片	横位沈線間に重弧状沈線。	浅黄橙色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・赤褐色粒	一括
21	深鉢	／胴部片	沈線区画内に縄文。	褐色	にぶい黄褐色	石英・チャート	102
22	深鉢	／胴部片	沈線区画内に縄文充填。	にぶい黄褐色	にぶい褐色	片岩・黒色粒・チャート	28
23	深鉢	／胴部片	連続Ｖ字状の沈線。	にぶい赤褐色	灰褐色	角閃石・白色粒	一括
24	深鉢	／胴部片	沈線区画後、縄文施文。／外面に煤付着。	黒褐色	黒褐色	黒色粒・白色粒	95
25	深鉢	／胴部片	押圧のある隆帯下に沈線幾何学文、充填縄文。	褐色	灰褐色	石英・角閃石・白色粒	59
26	注口土器	／胴部片	縄文後、重楕円形状および重長方形状などの沈線。／外面丁寧なミガキ。	黒褐色	暗灰黄色	白色粒・黒色粒	一括
27	深鉢	／口縁部片	口縁部はゆるやかに外反し、端部わずかに内弯。無文。	橙色	明赤褐色	石英・黒色粒・白色粒	155
28	深鉢	／胴部片	縄文後、重弧状・縦位・蛇行沈線。／外面に煤付着。	黒褐色	褐色	石英・黒色粒・白色粒	51
29	深鉢	／胴部片	縦位沈線。	褐灰色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	一括
30	深鉢	底径：(8.4)／胴下位～底部片	底部から外反して立ち上がる。無文。	明赤褐色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒・赤褐色粒	64

第2表　第2号住居跡 出土遺物観察表（1）



第15図　第2号住居跡出土遺物(2)



第16図　第2号住居跡出土遺物(3)

No.	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石　材	注 記	備　　考
31	石鏃	[2.4]	[1.95]	0.5	[0.2]	黒曜石	171	基部欠損。
32	スクレイパー	[9.9]	[5.75]	2.9	[161.5]	黒色安山岩	90	上部欠損。
33	磨石・凹石	9.2	7.9	5.0	531.6	輝石安山岩	94	凹石→磨石。
34	磨石・凹石	11.0	10.55	5.2	708.5	輝石安山岩	20	表裏面にくぼみ。裏面は磨石に使用。
35	石皿・多孔石	31.9	18.9	6.8	4000	輝石安山岩	212	裏面に多孔。
36	石皿	[40.6]	[30.6]	[14.3]	20800	輝石安山岩	205	大形品。
37	石皿	46.8	24.0	13.8	23600	輝石安山岩	206	大形品。
38	石皿	[23.1]	[10.0]	4.0	[1433.05]	緑泥片岩	211	
39	石皿	[23.55]	[24.9]	9.65	[9980]	輝石安山岩	207	大形品。
40	研磨具	7.8	5.65	1.1	74.0	輝石安山岩	P5	全体的に平滑。
41	磨製石斧	[4.2]	[3.4]	[2.3]	54.7	緑色岩類	P4	基部のみ残存。

第3表　第2号住居跡 出土遺物観察表(2)

なお、遺構構築物として用いられている礫の中には、石皿を転用したものが5点（うち片面で多孔石を兼ねたもの1点）、板状節理を特徴とする輝石安山岩の礫が2点含まれていた。後者の板状節理を特徴とする輝石安山岩は、本遺跡より北西 1.5km 弱に位置する刎石山付近にて産出されるもので、本遺跡において自然礫として確認された例は皆無である。この2点の礫は、標高差にして 200 m前後、しかも今日なお急峻な碓氷の地まで、特定の石材を求めて人の往還が行われていたことを示唆しており、興味深い。

また、第1号住居跡のピット内部から礫の検出される例が多い旨前述したが、本遺構でも同様の傾向が認

められた。それに対する解釈も同様で、これらの礫のほとんどは遺構構築物に該当しないものであろう。

出土遺物：土器破片 461 点、石器 11 点、剥片 10 点が出土した。遺物は主体部と想定される範囲、および連結部と第1号配石遺構を結ぶ線上に集中する。検出時点での調査の進捗状況から判断して、遺物の大半が床面ないし掘り方レベルでの出土と考えられる。

土器破片の総重量は 6,989.5g、破片1点平均 15.2g 弱となり、そのほとんどが小片であった。主な製作時期は後期初頭から前葉まで、土器型式にしてほぼ4型式分の幅（称名寺1式～堀之内2式）を示し、なかでも堀之内1･2式の割合が高い。ただし、中期末の加曾利ＥⅣ式の例もわずかに含む。

第 14 図1は、炉に埋設されていた深鉢の胴部破片である。遺構の帰属時期を知るうえで重要な位置から出土した遺物であるが、遺存範囲において無文で、残念ながら細別時期を断定することができない。とはいえ、胎土の特徴、本遺構にて出土した他の土器を参照する限り、堀之内式に属することは確かである。

2～8は、中期後葉～後期初頭の土器である。2は、加曾利ＥⅣ式終末の口縁部破片。文様帯の最上部で列点が横位に並べられており、いわゆる関沢類型（鈴木 1991 前掲）との近似が認められる。第1号住居跡出土遺物のうち、第9図1･2より先行する特徴をもつ。3は、鉢の口縁部につけられる把手。2個で1対をなすものである。2･3に類似する鉢は、通常加曾利ＥⅣ式とみるべきものであるが、少数ながら称名寺1式期にも製作されたと考えうる例もあり、注意を要する（加藤建設株式会社 2001）。5は曾利式か。6は加曾利ＥⅣ式の胴部破片。7は称名寺1式の胴部。縄文施文部に列点が施される例や縄文の磨り消しが行われない例は、称名寺1式でも新しい段階において散見され、装飾の工程が簡略化、あるいは意匠が変容していく趨勢の一部と見なされる。一方、8の胴部破片では列点が施されるのみで、後出の称名寺2式と見なされる。

9～15、20･21 は、後期前葉の堀之内1式土器。9～15 は口縁部、20･21 は胴部破片である。口縁部については、単位部分に円形の凹点が配され、それらを結ぶように横位沈線1条が周回する個体を通例とするが、14 では繁縟化した跡がうかがえ、横位2条を要所で上下に連結し、枠状区画が表されている。15 は過渡的様相を示す例であり、断面形は堀之内1式の特徴をよく残すものの、粘土の貼り足しによって肥厚させた部分の稜にはキザミが施されており、2式において多用される鎖状隆帯のはしりともみえる。

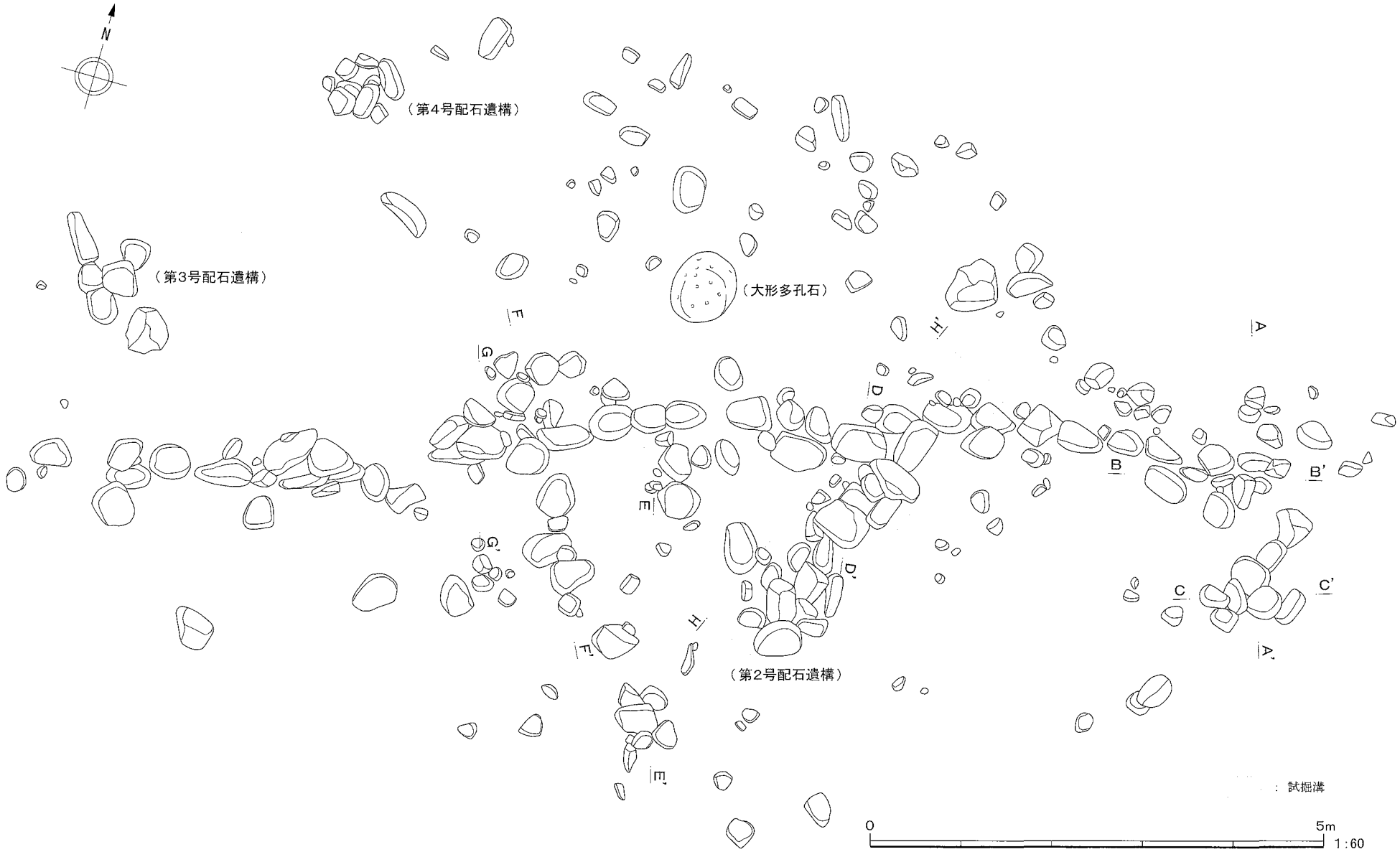
16～18、22～25 は、堀之内2式の精製深鉢。16～18 は口縁部ないしその付近、22～25 は胴部破片である。アサガオ形の深鉢が大半を占めるが、25 についてはくびれ部分の上が無文で大きく開き、下はわずかにふくらむ、いわゆる小仙塚（しょうせんづか）類型の一種と考えられる。

26 は、注口土器の胴部上半の破片で、堀之内2式に属する。27 ～ 29 は文様が退嬰化した深鉢。27 は粗製土器、その他も半粗製的な要素を帯びている。いずれも堀之内式であるが、1･2式の弁別は難しい。30 は堀之内2式土器の底部破片で、アサガオ形の深鉢とみられる。

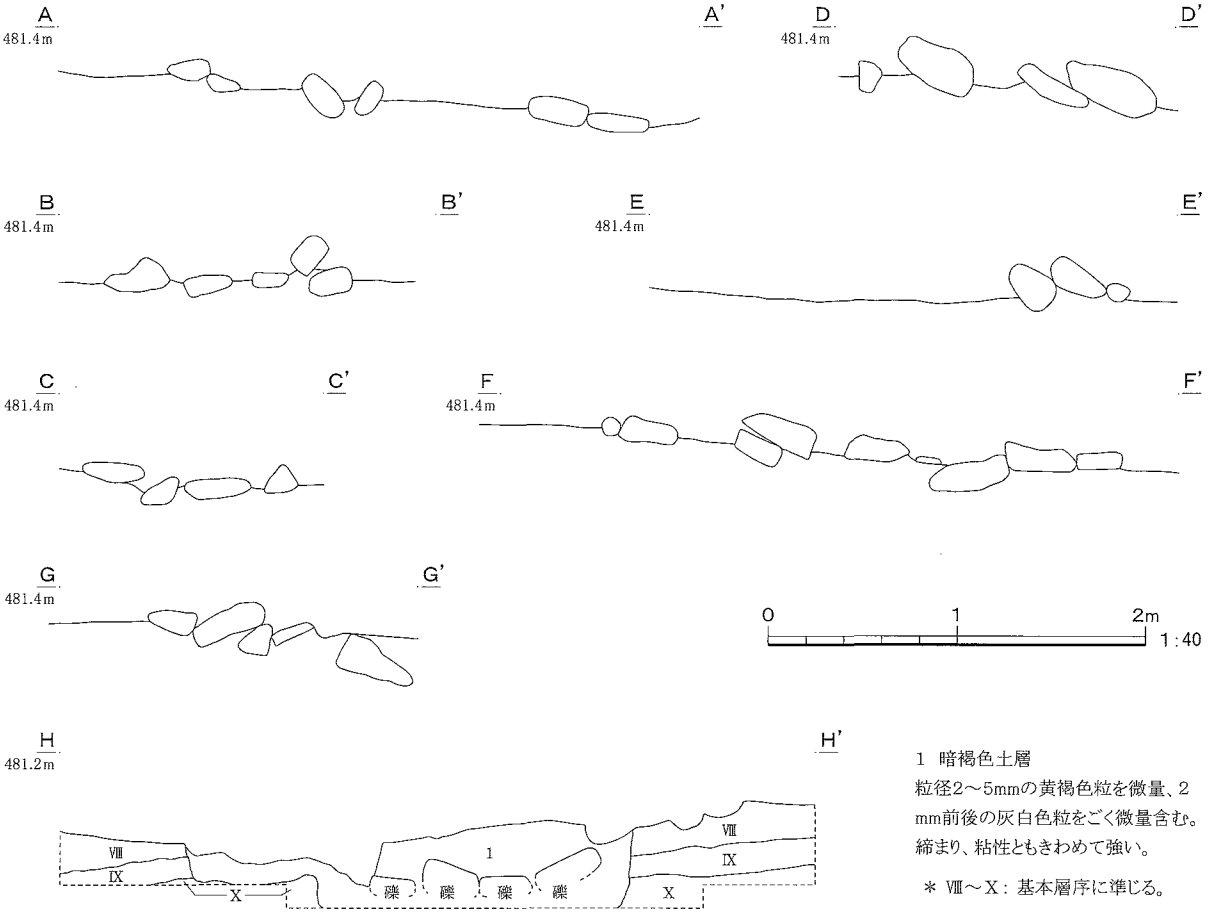
石器の内訳は、凹石2点、石皿5点と、石鏃、スクレイパー、研磨具、磨製石斧の各1点である。凹石は磨石、第 15 図 35 の石皿は多孔石をそれぞれ兼ねている。38 の石皿は、近辺では産出しない緑泥片岩を用いている。40 では片面にひろく磨痕が認められ、なんらかの研磨に用いられたものと考えられるが、研磨の対象は不明である。41 は、縄文時代後期以降の関東地方以東に多い定角式磨製石斧の基部とみられる。

なお、剥片の石質の内訳は、黒曜石4点、チャート6点である。また、前項にて石皿5点の部材転用例についてふれたが、うち2点は連結部付近、1点は連結部と第1号配石遺構を結ぶ線上、1点は張出部に位置している。連結部付近で見つかったものとしては、さらに凹石1点、板状節理の輝石安山岩1点も加わる。

時　期：住居跡の特徴、出土遺物の内容から、縄文時代後期前葉に構築および廃絶されたものと推測される。第1号住居跡と比較すると、遺物の内容が若干新しく、住居の形態も後出的な様相を呈している。



第17図　第1号および周辺の配石遺構



第18図　第1号配石遺構実測図

(3) 配石遺構

4基の配石遺構が確認された。このうち第2号・第3号は、中央に立石が置かれる小規模な配石遺構である。第1号は、調査区の南西部から北東部にかけて礫が弧状に分布するもので、より小単位に細別される可能性をもつが、本項ではひとまとまりの遺構として扱うこととする。

第1号配石遺構

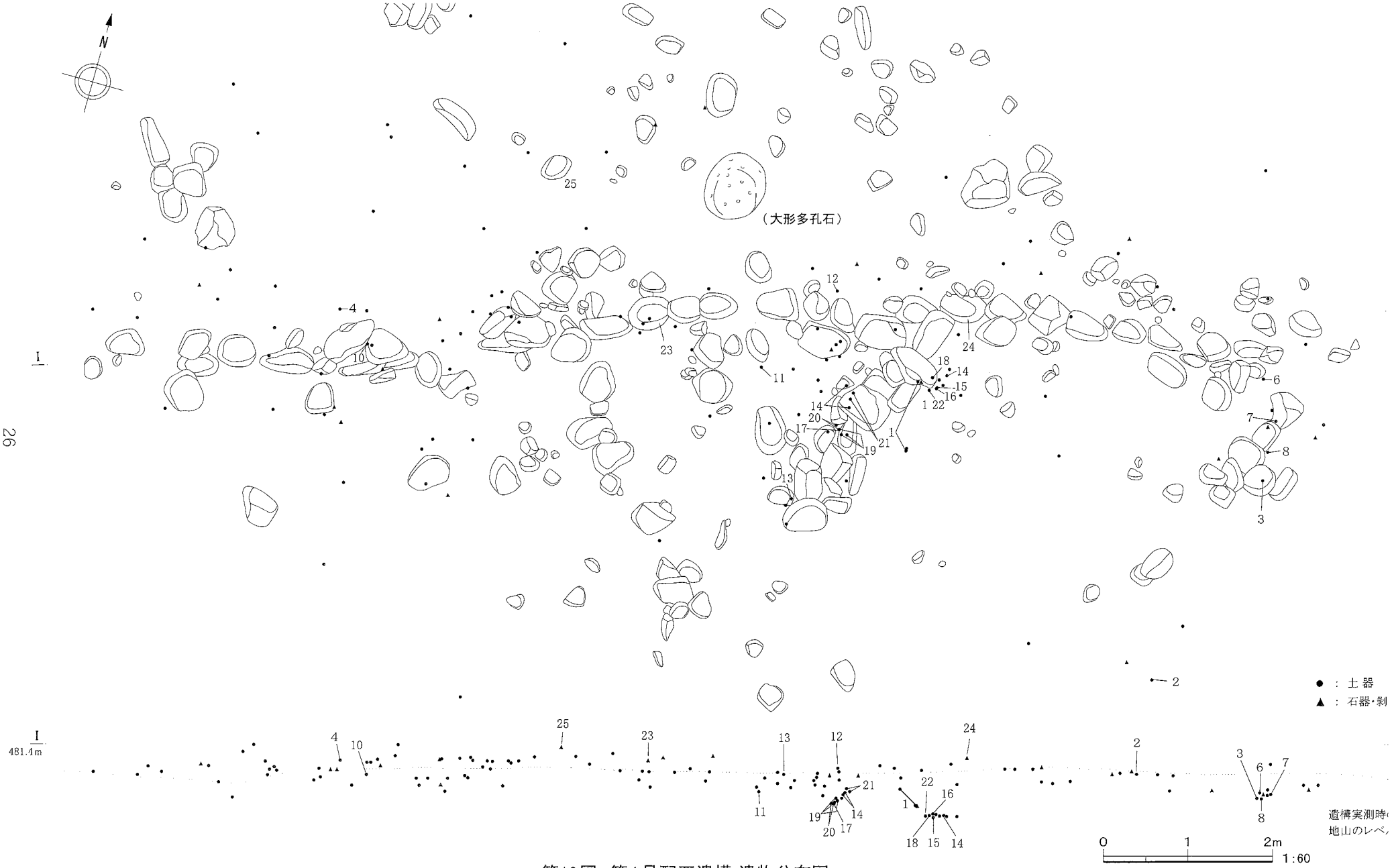
位　置　：E-1区からC-3区にかけて位置する。南西部で柄鏡形(敷石)住居跡の第2号住居跡と接する。遺構確認面の標高は481.0～481.1m、礫の配列が示す方位は、およそN-76°-Eである。

残存状態：礫の配置状況は、概して良好に保たれているとみられる。

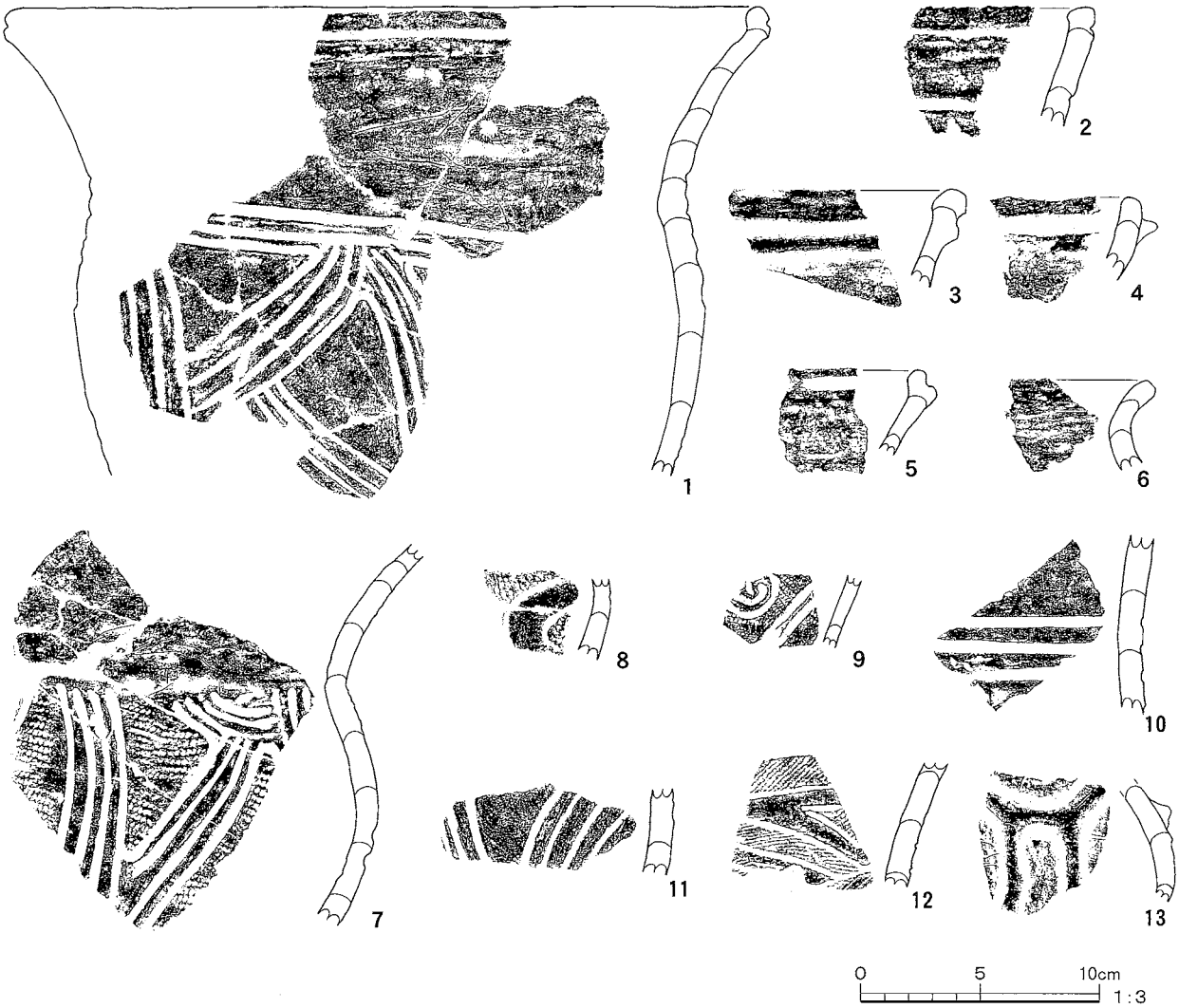
形　態　：平面観は、北に凸の弧状を呈する。微視的には、弧状のラインと交わるように、3～4mほど礫を並べた箇所が数か所認められる。このうち中央南側の2か所は、第2号配石遺構と組になって半円形に近い形状をなしている。

規　模　：検出範囲において東西幅約15m、礫の分布が散漫な箇所も合わせると、南北幅約6mを測る。遺構の両端とも調査区外に位置しており、全体の規模は不明である。

付帯施設：礫の配置状況を記録した後、土坑(土壙)をはじめとする付帯施設の有無を確かめるため、礫をすべて除去して精査を行ったが、該当する痕跡は見つからなかった。また、現地調査終了直前に、弧状に展開していた配石と直行する方向に試掘溝(サブトレンチ)を2か所設定して掘削を行い、土層断面の観察による検討を



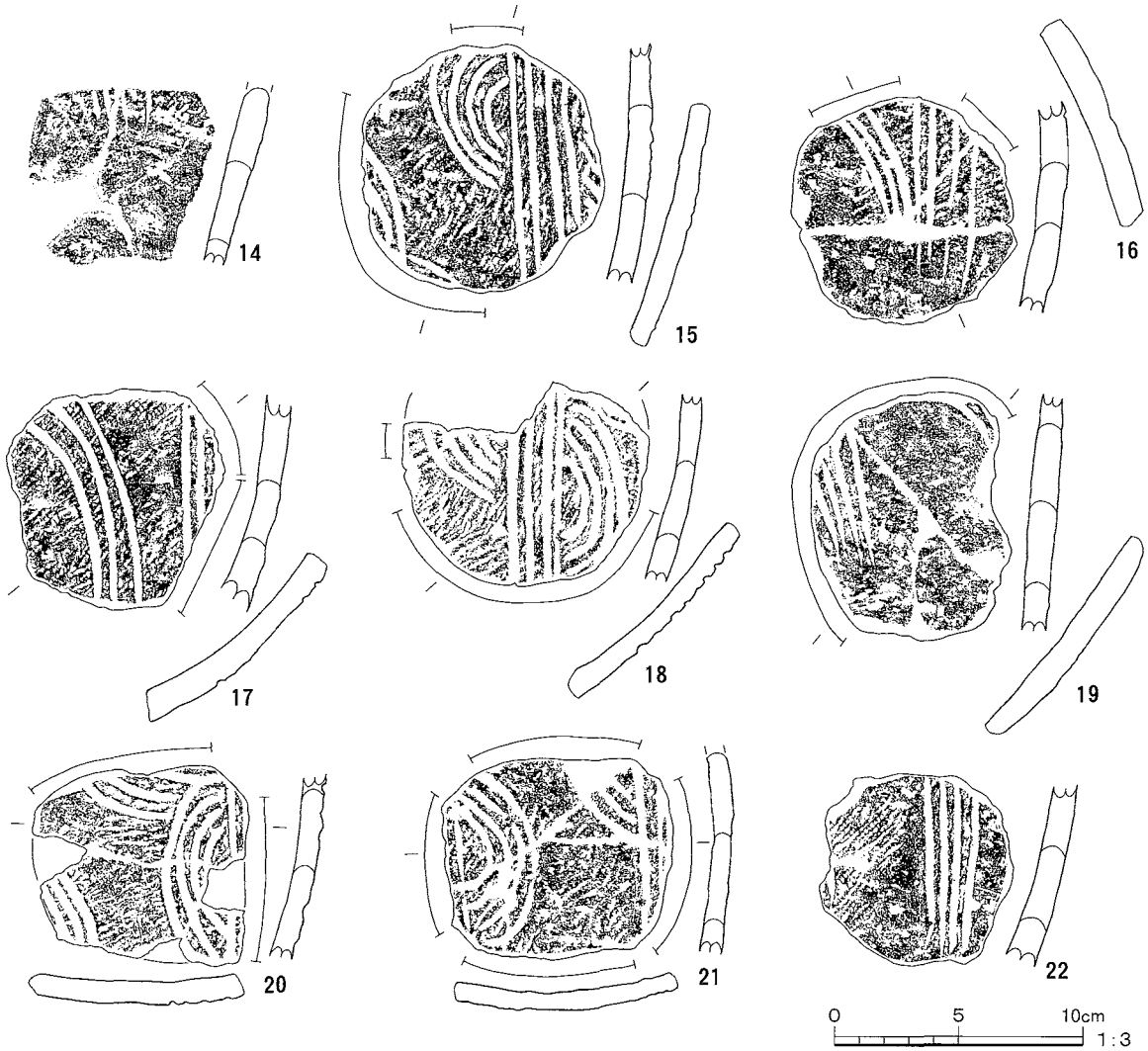
第19図　第1号配石遺構 遺物分布図



第20図　第1号配石遺構出土遺物(1)

No.	器種	計測値(cm)／残存	器形・文様などの特徴／備考	色調(外)	色調(内)	胎　土	注　記
1	深鉢	口径：(31.9)／口縁～胴部上位片	口縁端部は内傾ぎみに立ち上がる。口縁部沈線下はくびれ部まで無文。胴部は横位・弧状などの沈線文。	にぶい赤褐色	暗褐色	石英・黒色粒・白色粒	130・139・サブトレ1
2	深鉢	／口縁部片	粗雑な横位沈線2条。下位沈線下に刺突。	浅黄色	灰黄色	黒色粒・白色粒・チャート	97
3	深鉢	／口縁部片	横位沈線と隆帯。	にぶい黄橙色	浅黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	153
4	深鉢	／口縁部片	鍔状の隆帯。	にぶい黄橙色	灰黄褐色	黒色粒・白色粒	35
5	深鉢	／口縁部片	口縁部は内傾する。口縁部に円形刺突と横位沈線。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・白色粒	一括
6	深鉢	／口縁部片	口縁部は外反する。無文。／内外面に赤色塗彩の痕跡あり。	にぶい褐色	にぶい褐色	石英・角閃石・白色粒	165
7	深鉢	／胴部片	くびれ部までは無文。胴部は縄文後、4条単位の沈線を施文し、縄文を磨り消す。／外面に煤付着。	明赤褐色	橙色	石英・黒色粒・白色粒・赤褐色粒	161
8	深鉢	／胴部片	沈線区画後、縄文。	にぶい褐色	灰黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	156
9	深鉢	／胴部片	渦巻状等の沈線後、縄文。	黒褐色	灰褐色	黒色粒・白色粒	154
10	深鉢	／胴部片	横位沈線3条。／内外面ミガキ。	にぶい黄橙色	浅黄橙色	黒色粒・白色粒	111
11	深鉢	／胴部片	重弧状の沈線。	明赤褐色	黒褐色	石英・角閃石・白色粒	133
12	深鉢	／胴部片	沈線区画後、縄文充填。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・白色粒	7
13	注口土器	／胴部片	隆線文。／内外面に赤色塗彩の痕跡。	橙色	橙色	石英・角閃石・白色粒	83

第4表　第1号配石遺構 出土遺物観察表(1)



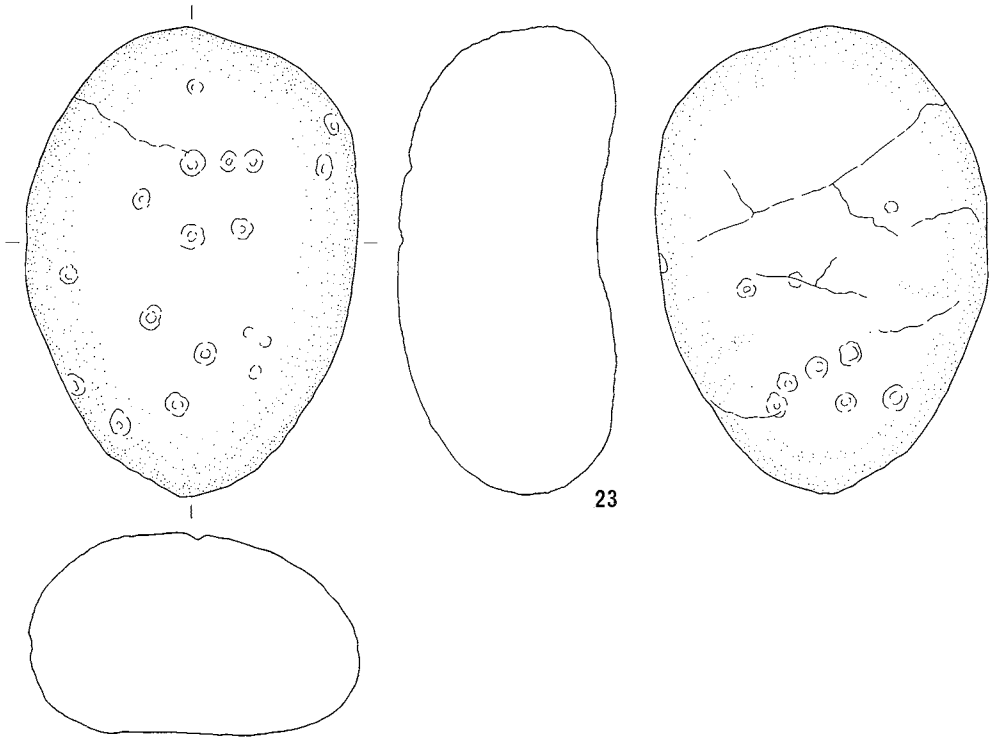
第21図　第1号配石遺構出土遺物(2)

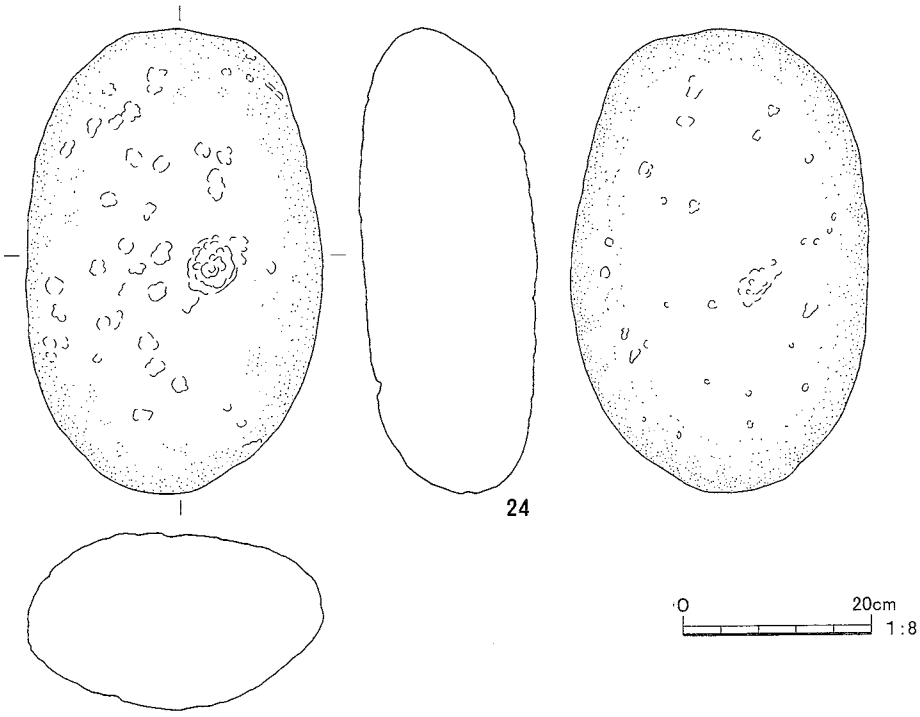
No.	器種	計測値(cm)／残存	器形・文様などの特徴／備考	色調(外)	色調(内)	胎　土	注　記
14	深鉢	／胴部片	縄文・沈線文。	橙色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・白色粒	137・144・サブトレ7
15	土製品	9.9 × 9.8	縄文・沈線の施文された深鉢胴部片再利用の円板状土製品。	橙色	明黄褐色	石英・角閃石・白色粒	サブトレ4
16	土製品	9.2 × 8.9	縄文・沈線の施文された深鉢胴部片再利用の円板状土製品。	橙色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・白色粒	サブトレ3
17	土製品	8.9 × 8.8	縄文・沈線の施文された深鉢胴部片再利用の土製品。形状は丸みのある台形。	橙色	灰黄褐色	石英・角閃石・白色粒	151
18	土製品	[8.0] × 9.9	縄文・沈線の施文された深鉢胴部片再利用の円板状土製品。	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	石英・角閃石・白色粒	サブトレ8
19	土製品	9.9 × [7.9]	沈線の施文された深鉢胴部片再利用の円板状土製品。	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	石英・角閃石・白色粒	148・149・151
20	土製品	8.0 × 8.7	縄文・沈線の施文された深鉢胴部片再利用の土製品。形状は丸みのある台形。	にぶい黄橙色	橙色	石英・角閃石・白色粒	150・151
21	土製品	8.1 × 9.2	縄文・沈線の施文された深鉢胴部片再利用の土製品。形状は丸みのある長方形。	明黄褐色	橙色	石英・角閃石・白色粒	142・143
22	土製品	7.6 × 7.8	縄文・沈線の施文された深鉢胴部片再利用の円板状土製品。	橙色	にぶい黄褐色	石英・角閃石・白色粒	サブトレ2

第5表　第1号配石遺構 出土遺物観察表(2)

試みたが、結果は同様であった。

その他の所見：　上記の試掘溝のうち、図17・18に示したトレンチ(H-H')では、自然堆積である地山とは異なる色調の土の上に礫が置かれている状況を捕捉することができた。また、このトレンチの南西部では、土製円板を大きくしたような、縁辺に調整の施された土器破片8点が、折り重なったような状態で検出された。

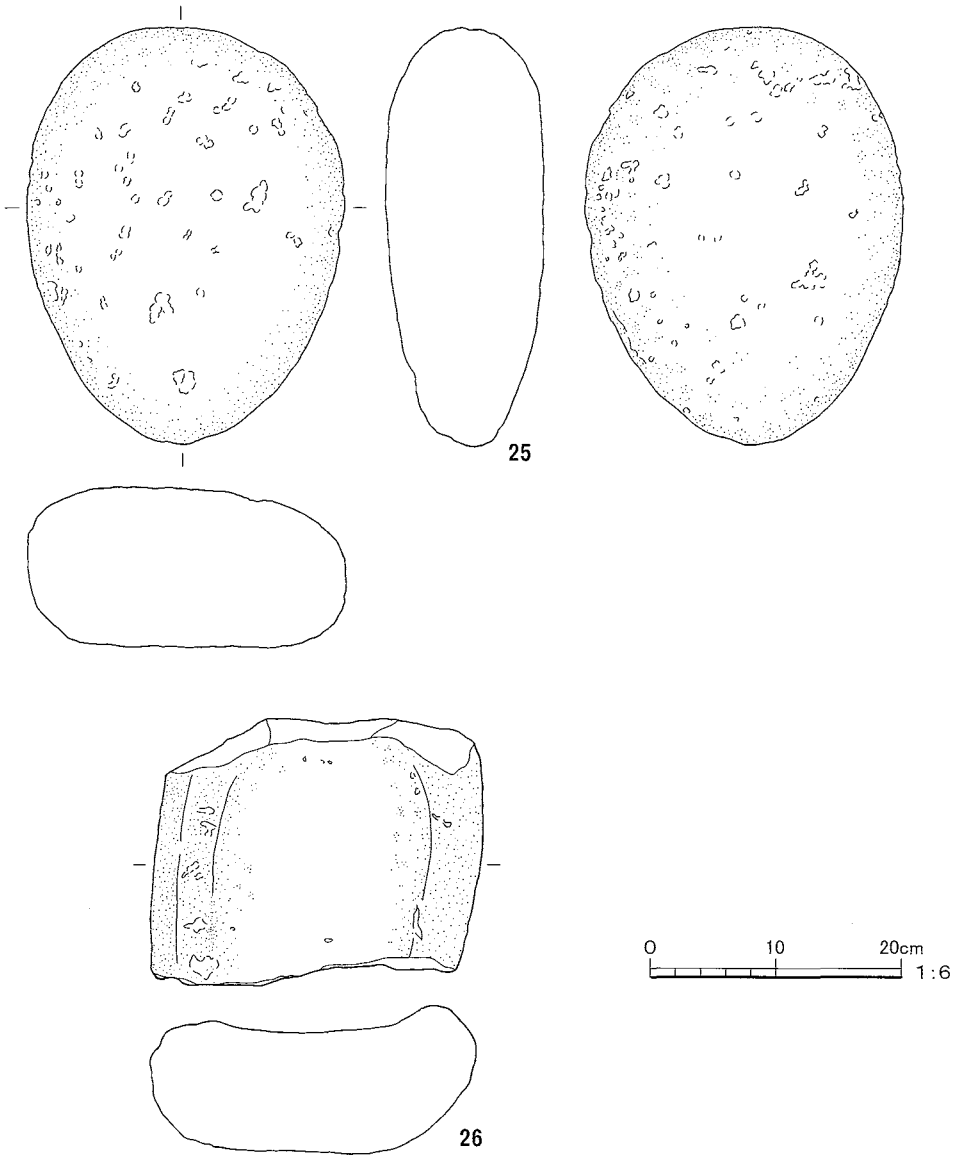




第22図　第1号配石遺構出土遺物(3)

No.	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石　材	注 記	備　　考
23	多孔石	49.6	35.4	23.2	57,100	輝石安山岩	176	大形品。表裏面やや疎らに多孔。
24	多孔石	49.2	31.6	19.0	40,460	輝石安山岩	175	大形品。孔はやや浅い。

第6表　第1号配石遺構 出土遺物観察表(3)



第23図　第1号配石遺構出土遺物(4)

No.	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石　材	注 記	備　　考
25	多孔石	33.5	25.5	12.7	15,260	輝石安山岩	177	大形品。あるいは台石か。
26	石皿	[21.5]	26.7	11.1	[10,370]	輝石安山岩	179	大形品。

第7表　第1号配石遺構 出土遺物観察表(4)

以上のことから、本遺構の少なくとも一部には掘り方が存在していた可能性が考えられる。なお、もう1か所のトレンチについては、掘削範囲がすべて地山であることが確認されている。

出土遺物：土器破片 187 点、土製品8点、石器4点、剥片5点が出土した。土器破片と土製品の総重量は 4,498.2g、破片1点平均 23.1g 弱となる。

今回の調査における住居跡出土遺物についても多分に当てはまることであるが、本遺構周辺で見つかった遺物が、遺構本来の利用状況、あるいは機能を果たしていた時期を直接反映したものであるかどうかは不明瞭といわざるを得ず、実際のところ狭義の伴出遺物とは見なしがたい。とはいえ、それらの時期的傾向が、

少なくとも遺構が施設としての機能を停止する前後のおおまかな時期を示すとみることに大過はないと考えられる。こうした認識に基づき、本文では、遺構とのレベルがほぼ等しく、平面分布上至近に位置する遺物を広義の伴出遺物として扱うこととする。

出土土器の主な製作時期は後期前葉、土器型式における堀之内1式ないし2式に収斂する。ただし、後期初頭の称名寺式もわずかに認められる。

第20図1～7、9・10は、堀之内1式土器。1～7が口縁部ないしその付近を残す破片、9・10は胴部破片である。1・7では、弧状の縦位沈線を並べた垂下文が1組4条と多条化の傾向を示し、かつ垂下文どうしが同じ条数の斜位集合沈線によって連結されており、1式後半～終末段階の特徴を具備している。地文に縄文が用いられる点、渦巻状文が退嬰化したモチーフがくびれ部分に配される点で、7の方がより古い特徴を残す。他の口縁部破片も、おおむね同段階のものと思われる。9もほぼ同時期であるが、2式において盛行するアサガオ形の器形をもつとみられ、斜位の区画内に配された渦巻文とあわせ、新相を帯びる。

11・12は堀之内2式の深鉢胴部。11は小仙塚類型のうち地文の縄文が施されないもので、垂下文がさらに多条化する。器形や文様の概況は1・7に通じるものの、沈線が浅くなり、縁の盛り上がりがナデ消されているところなど、細部の特徴は異なる段階であることを示している。12は、堀之内2式のアサガオ形深鉢の典型ともいえる個体である。13の胴部破片は、称名寺式の注口土器である。縄文は用いられず、この種の土器特有の隆帯が貼付されている。

第21図では、先述の試掘溝において、折り重なるなどして密集した状態で検出された土器破片を掲載した。いずれも同一個体で、14を除くすべての縁辺に磨ったような調整が施され、丸みを帯びた形状に仕上げられている。しいていえば土製円板に近似するものの、大きさや出土状況を見る限り、通例の土製円板とは同一視できない。性質用途などは不明であるが、注意を喚起すべき資料である。

一方、石器の内訳は、多孔石3点、石皿1点、剥片5点となっている。多孔石・石皿はいずれも大形品で、多孔石の検出頻度が目をひく。これら図示した例のほか、長径80cm強、短径70cm弱、厚さ70cm以上の巨大な多孔石が検出されたが、調査時の諸条件により、遺物としての採集を断念した。日常の生業に用いられたものとは考えにくく、自然の転石の露出部分を加工したものとみられる。多孔石を他種の石器と同様に生活用具としてみた場合、他の場所にて使用していたものを配石遺構の部材として転用したと解釈するのが自然である。しかし、こと本遺構の多孔石に関しては、あらかじめ所定の位置に据えることを重要な目的として製作され、転用という要素が希薄であった可能性も考慮すべきように思われる。なお、出土した剥片の石質は、いずれも黒曜石であった。

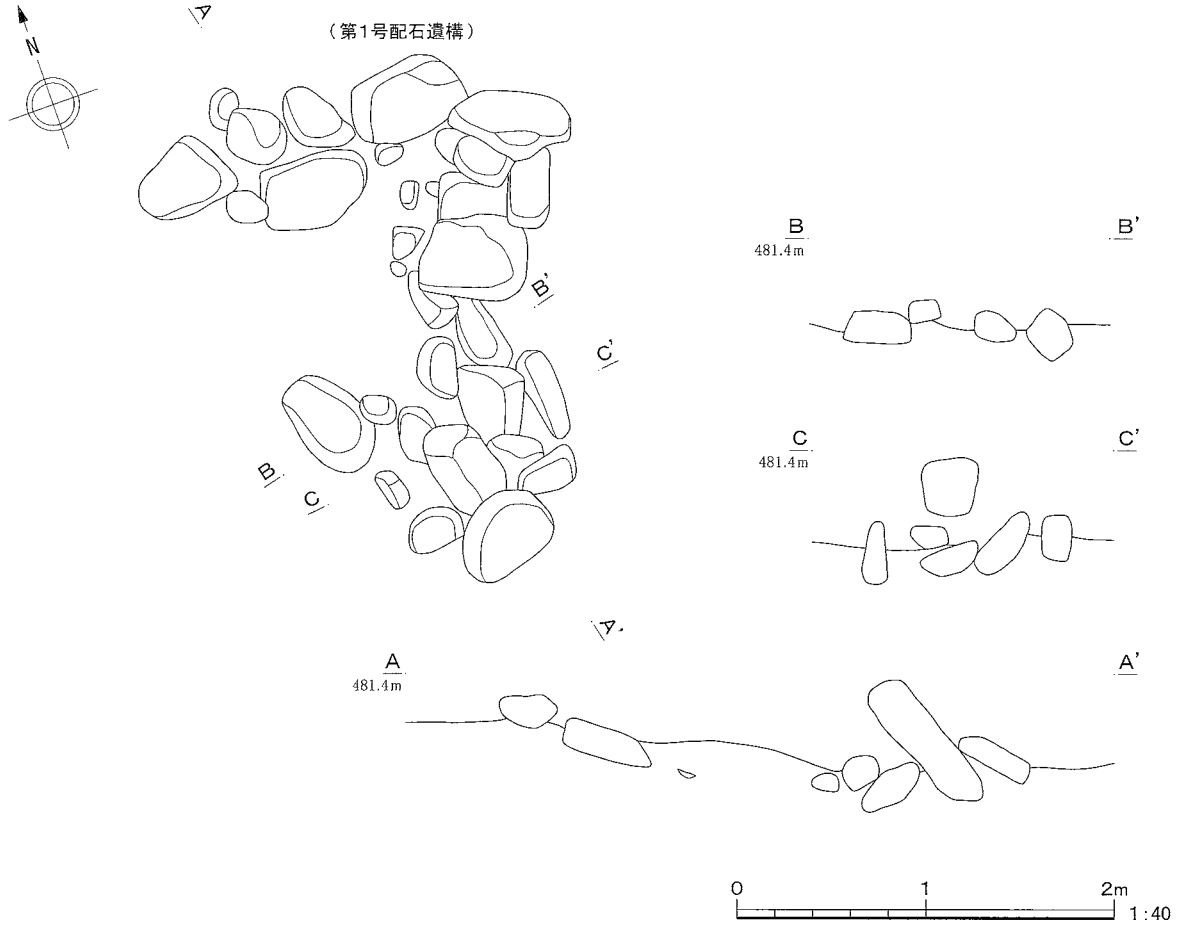
時　期　：　近辺より出土した遺物の内容、および近在の遺跡にみられる類例との比較から、縄文時代後期前葉に構築された遺構である可能性が高い。

第2号配石遺構

位　置　：　D-2区に位置する。遺構確認面の標高は480.9～481.0mを測る。北側の第1号配石遺構と近接し、その一部であるようにも見えるが、後述する立石の存在を重んじ、本項では単独の遺構として扱う。

残存状態：　礫の配置状況は、概して良好に保たれているとみられる。

形　態　：　平面観は、おおむね円形を呈する。範囲をせまくとらえるのであれば13、4個、第1号配石遺構付近のものも含めると、20個強の礫が用いられている。中央やや南側には、立石とおぼしき長さ80cm、幅20cmほどの礫が配置されているが、現状においては直立せず、北に40°ほど傾いている。



第24図　第2号配石遺構実測図

規　模　：　直径 1.6m、最も下位にて検出された礫の下面からの高さは 94cm を測る。

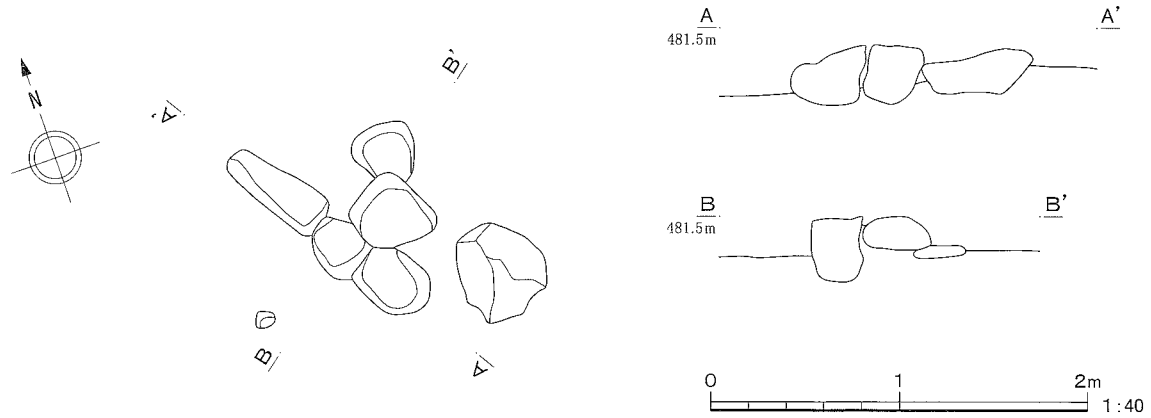
付帯施設：　礫の配置状況を記録した後、土坑（土壙）をはじめとする付帯施設の有無を確かめるため、礫をすべて除去して精査を行ったが、該当する痕跡は見い出せなかった。

出土遺物：　本遺構に直接関連することが明確な遺物は出土していない。

時　期　：　周辺より出土した遺物の内容、および位置や構造において第1号配石遺構との関連が深い点から、縄文時代後期前葉に構築された遺構と推測される。

第3号配石遺構

位　置　：　主として E-2区に位置する。遺構確認面の標高は 481.2 ～ 481.3 mを測る。南側の第1号配



第25図　第3号配石遺構実測図

石遺構と近接し、北東の第4号配石遺構とは3m 弱を隔てる。

残存状態： 礫の配置状況は、概して良好に保たれているとみられる。

形　態　： 6個前後の礫が、平面不整円形に配置されている。

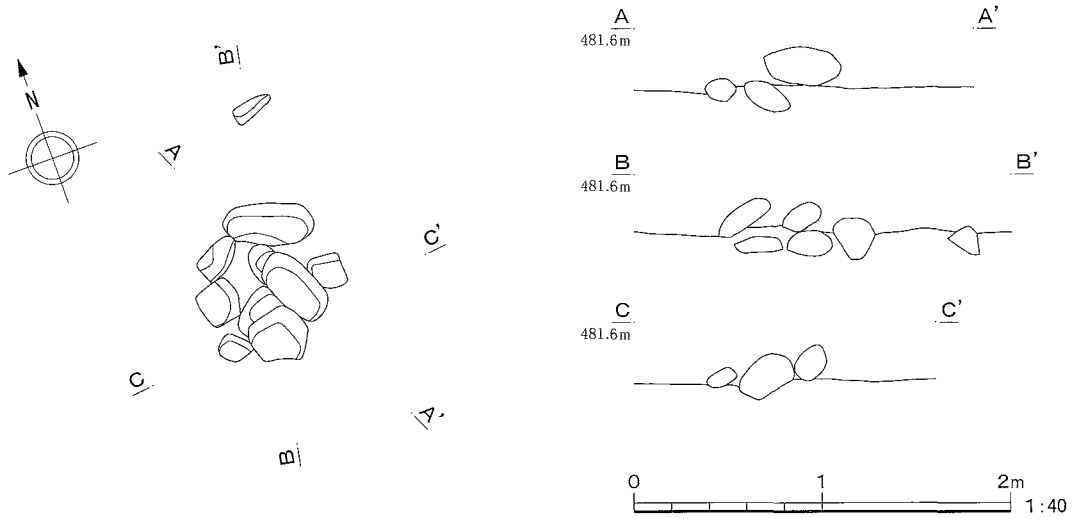
規　模　： 礫が分布する範囲は、現状で長径 1.9m、短径 95cm を測る。

付帯施設： 礫の配置状況を記録した後、土坑（土壙）をはじめとする付帯施設の有無を確かめるため、礫をすべて除去して精査を行ったが、該当する痕跡は見い出せなかった。

その他の所見： 北西－南東の方向に3個の礫が並ぶように位置している。このうち、中央の礫と南東にある礫とが同一個体のように見えたため、礫の除去作業時に接合を試みた。その結果、2つの礫は本来中央の位置に据えられた、長さ約 70cm の立石であることが判明した。

出土遺物： 本遺構に直接関連することが明確な遺物は出土していない。

時　期　： 積極的な判断材料に乏しいが、周辺より出土した遺物の内容、および第1号配石遺構と近接する点から、縄文時代後期前葉に構築された遺構と推測される。



第26図　第4号配石遺構実測図

第4号配石遺構

位　置　： E－2区に位置する。遺構確認面の標高は 481.3 mを測る。南の第1号配石遺構、および南西の第3号配石遺構とは、ともに3m 前後を隔てる。

残存状態： 礫の配置状況は、概して良好に保たれているとみられる。

形　態　： 10 個前後の礫が、平面観にしておおむね円形に配置されている。

規　模　： 礫が分布する範囲は、現状で長径 1.2m、短径 90cm を測る。

付帯施設： 礫の配置状況を記録した後、土坑（土壙）をはじめとする付帯施設の有無を確かめるため、礫をすべて除去して精査を行ったが、該当する痕跡は見い出せなかった。

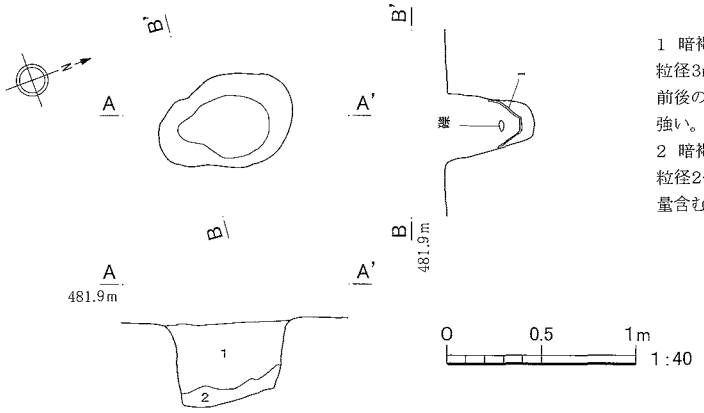
出土遺物： 本遺構との直接関連することが明確な遺物は出土していない。

時　期　： 積極的な判断材料に乏しいが、周辺より出土した遺物の内容、および第1号配石遺構と近接する点から、縄文時代後期前葉に構築された遺構と推測される。。

(4) 土坑・ピット

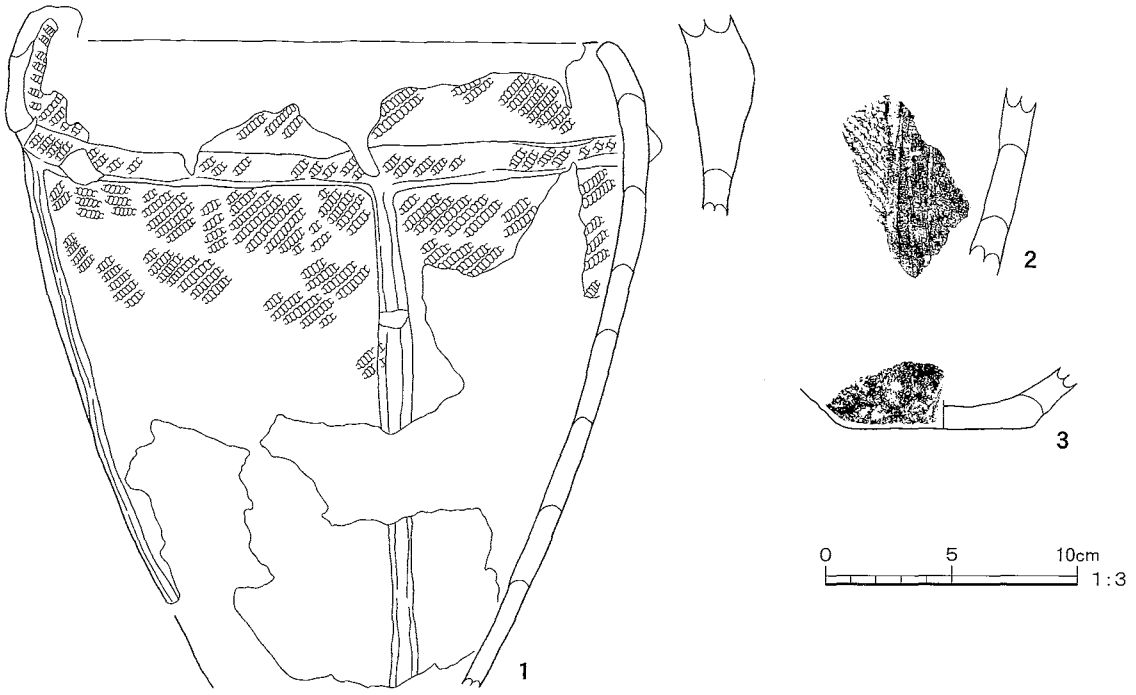
土坑 12 基とピット 17 基が検出された。分布に目立った傾向は見られず、前項にて扱った各配石遺構との関連についても明らかでない。このうち第3号土坑は埋設土器を伴うもので、屋外埋甕と見なしうる。

なお、以下に所見文と図を掲げるものとして、都合 29 基の中から記載事項の比較的多い7基を選んである。その他の 22 基については個別の図示および記述を行わず、第 11 表に計測値などの摘要をまとめた。



1 暗褐色土層
粒径3mm前後の黄褐色粒を少量、3mm前後の灰白色粒、1mm前後の赤橙色粒をそれぞれ微量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。
2 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、2mm前後の灰白色粒をごく微量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。

第27図 第3号土坑実測図



第28図 第3号土坑出土遺物

No.	器種	計測値(cm)／残存	器形・文様などの特徴／備考	色調(外)	色調(内)	胎　土	注　記
1	深鉢	口径：(24.1)／2/3	把手部および底部欠損。隆帯から胴部に4条の懸垂文。口縁部から胴部上半部にかけてLR縄文。／外面上半部に煤付着。	暗褐色	暗褐色	黒色粒・白色粒・チャート	3・5・埋一括・4土5
2	深鉢	／胴部片	微隆起線による懸垂文、LR縄文を縦位施文。	黒褐色	灰黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	9
3	深鉢	底径：(7.7)／底部	無文。	橙色	灰黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	1・5・10

第8表 第3号土坑 出土遺物観察表

第3号土坑

位　置　：　G－3区に位置する。遺構確認面の標高は、481.6 mを測る。

残存状態：　後述する埋設土器については破損が著しいが、土坑全体は良好である。

形　態　：　平面楕円形、断面逆台形を呈する。

規　模　：　長径 60.0cm、短径 50.0cm、深さ 70.0cm を測る。

覆　土　：　2つの層に細分される。本遺跡における他の遺構の覆土に比べて明らかに硬質であり、また2層の色調は地山（第Ⅷ層）と酷似していた。この点のみをもって人為の痕跡とは即断できないが、土坑の掘り込みがきわめて短期間のうちに、同じレベルの地山と同質の土によって埋まった経緯を想定することは可能と思われる。

出土遺物：　本遺構の中～下位で、深鉢の胴部下半以下の大形破片（第 28 図1）が検出された。このほか同一個体の小破片が覆土全体に散在しており、整理調査時では底部を除くほぼ全形が復元された。本来は、底部を打ち欠いた状態で埋置されていたものと考えられる。

出土した遺物は土器破片に限られ、破片数にして 27 点を数える。帰属時期は、縄文時代中期後葉から後期初頭の範囲に収まる。第 28 図3の底部破片は1とは別個体と判断され、2とあわせて他所から覆土に混入したものであろう。いずれも、加曾利ＥⅢ～ＥⅣ式に属するとみられる。

なお、1は帰属時期について幅をもたせうる事例のひとつである。口縁部付近に横位1条、縦位区画として胴部に4条の隆帯が貼付され、横位の隆帯上、および胴部上半に、単節縄文 LR が施されている。隆帯の用い方は中期末の加曾利ＥⅣ式にも通じるが、隆帯がいわゆる微隆起線文の特徴から離れ、粗大で断面に鋭さを欠く。これに加え、縄文が横位回転押捺によって施されており、縦位の回転施文により胴部下半～底部付近まで縄文が及ぶことを通例とする加曾利ＥⅣ式の手法が順守されていない。以上の点を考慮し、本個体を後期初頭の称名寺式に属するものとしてとらえておきたい。

時　期　：　埋設土器に関する所見から、縄文時代後期初頭に構築された遺構と推測される。

第4号土坑

位　置　：　G－3区に位置し、北にて第3号土坑と近接する。遺構確認面の標高は、481.6 mを測る。

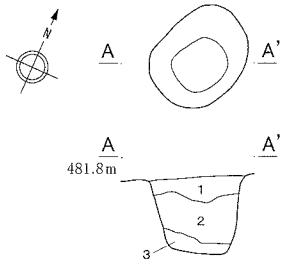
残存状態：　おおむね良好とみられる。

形　態　：　平面隅丸長方形ないし不整楕円形、断面は逆台形を呈する。

規　模　：　長径 54.0cm、短径 44.0cm、深さ 42.5cm を測る。

覆　土　：　3つの層に細分される。人為を示唆する顕著な事象は認められない。

出土遺物：　覆土より、土器の小破片 16 点と礫2点が出土した。遺物の分布状況は散漫で、明確な傾向をもたない。



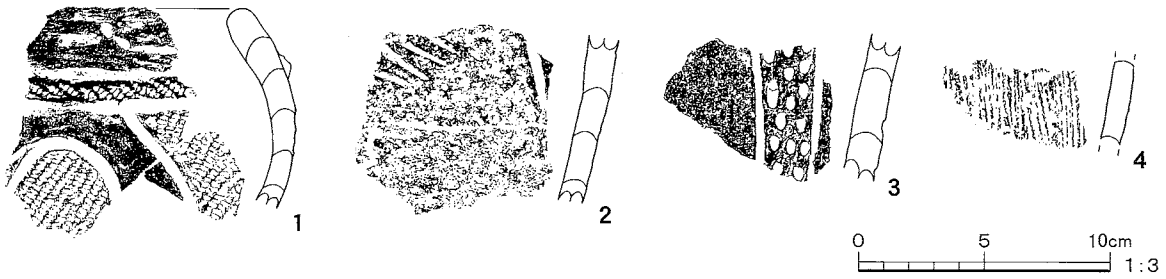
1　暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、2mm前後の灰白色粒、1mm前後の赤橙色粒をそれぞれごく微量含む。締まり、粘性とも強い。

2　暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒、2mm前後の灰白色粒をそれぞれごく微量含む。締まり、粘性とも強い。

3　暗黄褐色土層
粒径5～10mmの黄褐色粒を少量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。

0　0.5　1m　1:40

第29図　第4号土坑実測図



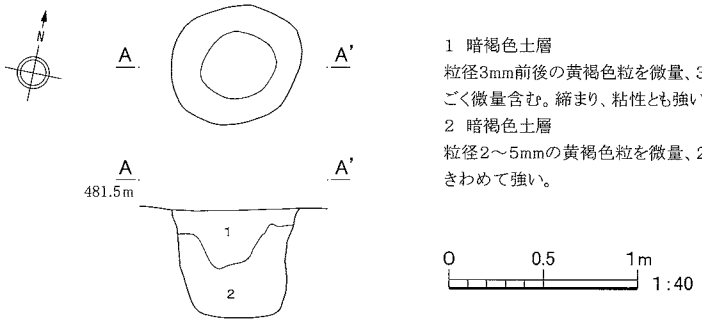
第30図　第4号土坑出土遺物

No.	器種	計測値(cm)／残存	器形・文様などの特徴／備考	色調（外）	色調（内）	胎　土	注　記
1	深鉢	／口縁部片	隆帯上および沈線区画内に縄文。	黒褐色	暗灰黄色	黒色粒・白色粒	9
2	深鉢	／胴部片	沈線懸垂文と斜位の沈線。／器面荒れる。	黒褐色	灰黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	7・一括
3	深鉢	／胴部片	沈線区画内に列点刺突文。	灰黄褐色	にぶい黄橙色	黒色粒・白色粒	3
4	深鉢	／胴部片	縦位条線文。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	黒色粒・白色粒	4

第9表　第4号土坑 出土遺物観察表

出土した遺物の帰属時期は、縄文時代中期後葉から後期初頭の範囲に収まる。第30図3は、第3号土坑の埋設土器と同様、中期末か後期初頭か判断の難しい個体である。他は、おおむね曾利式に属するものとみられる。

時　期　：　出土遺物が小破片に限られるため断定はできないが、縄文時代中期後葉～後期初頭の間に構築された遺構と推測される。



第31図　第9号土坑実測図

第9号土坑

位　置　：　F－2区に位置し、南西にて第2号住居跡と近接する。遺構確認面の標高は、481.3 mを測る。

残存状態：　おおむね良好とみられる。

形　態　：　平面楕円形、断面は箱形を呈する。

規　模　：　長径72.0cm、短径60.0cm、深さ56.5cmを測る。

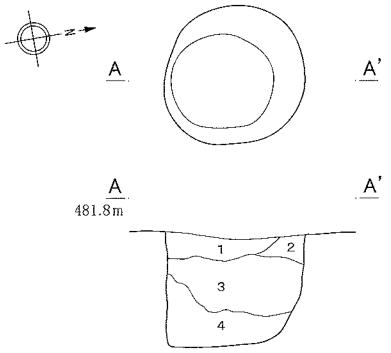
覆　土　：　2つの層に細分される。人為を示唆する顕著な事象は認められない。

出土遺物：　なし。

時　期　：　判断材料に乏しいが、色調をはじめとする覆土の特徴などから、縄文時代の遺構と推測される。

第10号土坑

位　置　：　D－2区。北に2～3mを隔てて第1号配石遺構、北東約2mの位置に第2号配石遺構がある。遺構確認面の標高は、480.9 mを測る。



1 黒褐色土層
粒径3～5mmの灰白色粒、2mm前後の赤橙色粒をそれぞれ微量含む。締まり、粘性とも強い。
2 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、3mm前後の灰白色粒、1mm前後の赤橙色粒をそれぞれごく微量含む。締まり、粘性とも強い。
3 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、2mm前後の灰白色粒をごく微量含む。締まり、粘性とも強い。
4 暗黄褐色土層
粒径5～10mmの黄褐色粒を少量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。

0 0.5 1m 1:40

第32図 第10号土坑実測図

残存状態： おおむね良好とみられる。

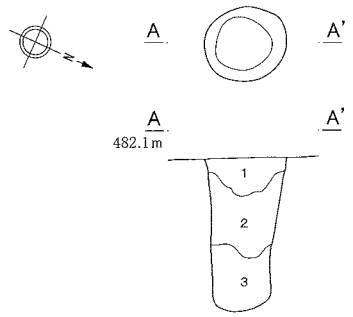
形 態 ： 平面円形、断面は箱形を呈する。

規 模 ： 長径 75.0cm、短径 73.0cm、深さ 61.0cm を測る。

覆 土 ： 4つの層に細分される。人為を示唆する顕著な事象は認められない。

出土遺物： なし。

時 期 ： 判断材料に乏しいが、色調をはじめとする覆土の特徴などから、縄文時代の遺構と推測される。



1 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、2mm前後の灰白色粒、1mm前後の赤橙色粒をそれぞれごく微量含む。締まり、粘性とも強い。
2 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、3mm前後の灰白色粒をごく微量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。
3 暗黄褐色土層
粒径5～10mmの黄褐色粒を少量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。

0 0.5 1m 1:40

第33図 第1号ピット実測図

第1号ピット

位 置 ： I-4区。南東およそ6m を隔てて、第2号および第3号ピットが位置する。遺構確認面の標高は、482.0 mを測る。

残存状態： おおむね良好とみられる。

形 態 ： 平面円形、断面はU字形を呈する。

規 模 ： 長径 44.0cm、短径 40.0cm、深さ 80.0cm を測る。本遺跡の中で最も深い遺構である。

覆 土 ： 3つの層に細分される。人為を示唆する顕著な事象は認められない。

出土遺物： なし。

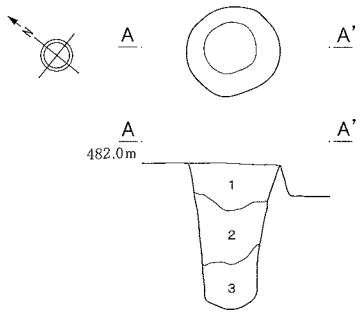
時 期 ： 判断材料に乏しいが、色調をはじめとする覆土の特徴などから、縄文時代の遺構と推測される。

第2号ピット

位 置 ： H-4区。北西およそ6m に第1号ピット、南西およそ4m に第3号ピットがそれぞれ位置する。遺構確認面の標高は、481.9 mを測る。

残存状態： おおむね良好とみられる。

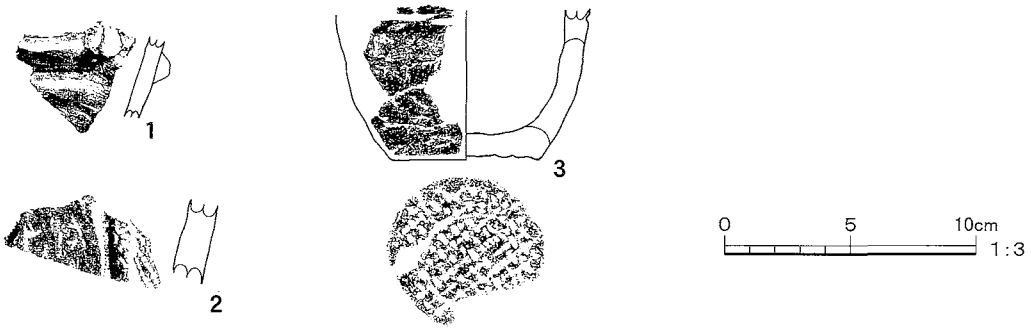
形 態 ： 平面円形、断面はU字形を呈する。



1 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒を微量、3mm前後の灰白色粒、1mm前後の赤橙色粒をそれぞれごく微量含む。締まり、粘性とも強い。
2 暗褐色土層
粒径3～5mmの黄褐色粒を微量、2mm前後の灰白色粒をごく微量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。
3 暗黄褐色土層
粒径5～10mmの黄褐色粒を少量含む。締まり、粘性ともきわめて強い。

0 0.5 1m 1:40

第34 図　第2号ピット実測図



第35図　第2号ピット出土遺物

No.	器種	計測値(cm)／残存	器形・文様などの特徴／備考	色調(外)	色調(内)	胎　土	注 記
1	深鉢	／胴部片	隆帯。／内外面ミガキ。	灰黄褐色	黒褐色	白色粒・赤褐色粒	一括
2	深鉢	／胴部片	隆線による懸垂文、縄文。	にぶい黄橙色	浅黄色	石英・角閃石・白色粒	一括
3	深鉢	底径：(5.9)／胴部下位～底部	残存部上位に沈線のあるほかは無文。底面に網代痕。	にぶい赤褐色	黒褐色	石英・黒色粒・白色粒	一括

第10表　第2号ピット 出土遺物観察表

規　模　：　長径 50.0cm、短径 46.0cm、深さ 77.0cm を測る。

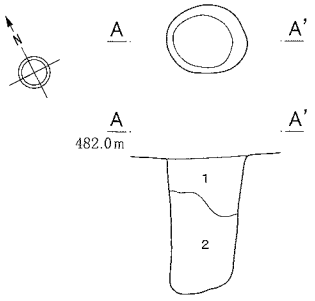
覆　土　：　3つの層に細分される。人為を示唆する顕著な事象は認められない。

出土遺物：覆土の中位～下位にて、土器破片4点が出土している。第 35 図では、その全点を示している。1は中期中葉、2は加曾利ＥⅢないしＥⅣ式に属する。3は中期前葉の所産とみられる小形の深鉢である。

時　期　：　出土遺物が少なく、小破片が過半であるため断定はできないが、色調をはじめとする覆土の特徴などを加味し、縄文時代の遺構と推測される。

第3号ピット

位　置　：Ｉ-4区。北におよそ6m を隔てて第1号ピット、北東およそ4m に第2号ピットがそれぞれ位置する。



1 暗褐色土層
粒径3～5mmの灰白色粒、2mm前後の赤橙色粒をそれぞれ微量含む。締まり、粘性とも強い。
2 暗褐色土層
粒径2～5mmの黄褐色粒、3mm前後の灰白色粒、および1mm前後の赤橙色粒をそれぞれごく微量含む。締まり、粘性とも強い。

0 0.5 1m 1:40

第36 図　第3号ピット実測図

遺構確認面の標高は、481.9 mを測る。

残存状態： おおむね良好とみられる。

形　態　： 平面円形、断面はＵ字形を呈する。

規　模　： 長径45.0cm、短径37.0cm、深さ72.5cmを測る。

覆　土　： 2つの層に細分される。人為を示唆する顕著な事象は認められない。

出土遺物： なし。

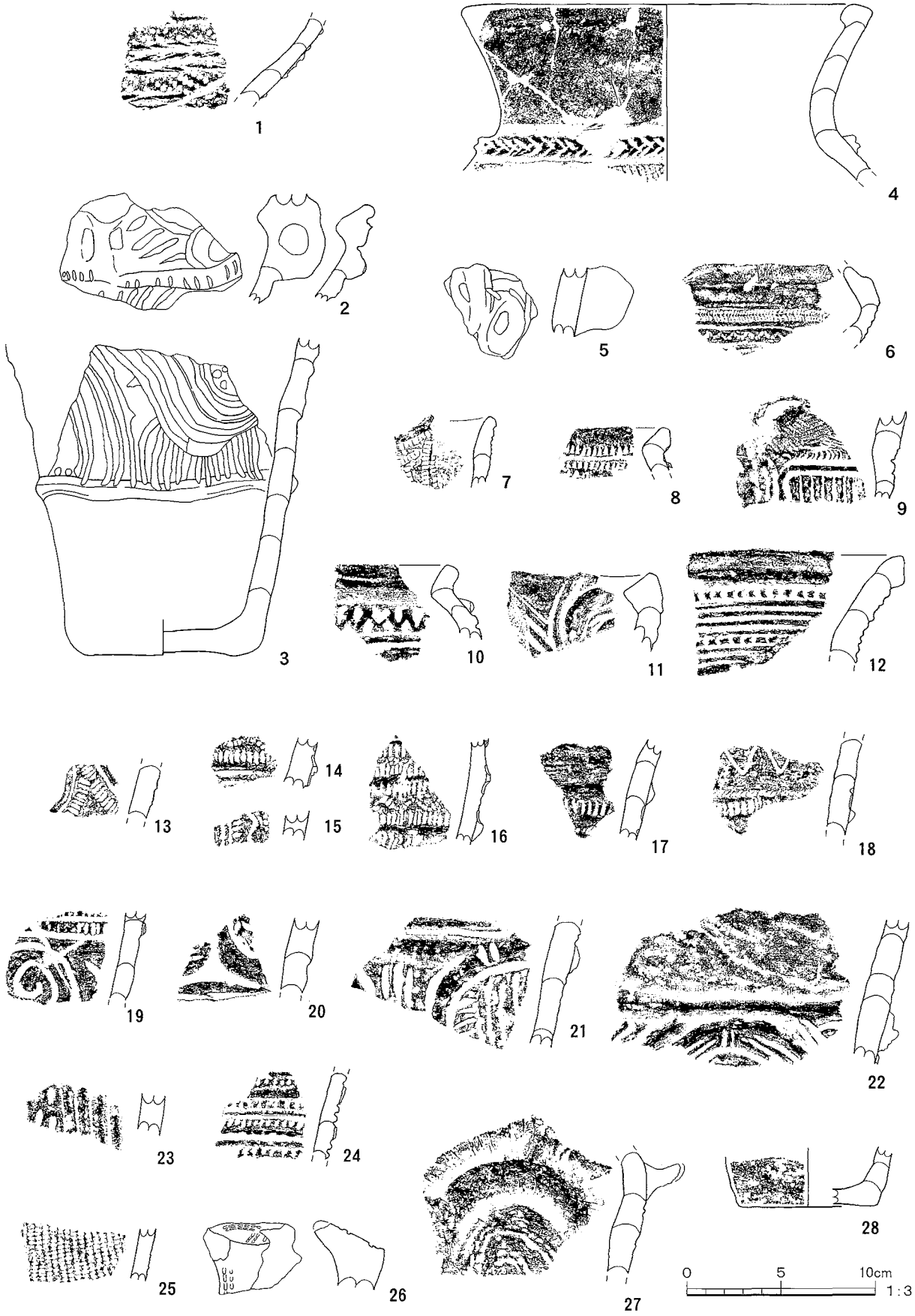
時　期　： 判断材料に乏しいが、色調をはじめとする覆土の特徴などから、縄文時代の遺構と推測される。

遺構名	グリッド	形状		規模 (cm)			備考
		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	
第1号土坑	G－4	楕円形か	逆台形か	[66.0]	58.0	52.0	北側一部調査区外、出土遺物なし。
第2号土坑	G－4	楕円形	逆台形	75.0	56.0	48.5	土器破片1点出土。
第5号土坑	F－4	楕円形	箱形	48.0	39.0	－	出土遺物なし。
第6号土坑	F－3	楕円形	不整形	76.0	59.0	52.0	土器破片1点出土。
第7号土坑	F－3	隅丸長方形	箱形	57.0	42.0	36.0	土器破片1点、礫1点出土。
第8号土坑	F－3	隅丸方形	箱形	55.0	53.0	32.5	土器破片1点、礫2点出土。
第11号土坑	C－2	不整形	不整形	87.0	59.0	17.0	出土遺物なし。
第12号土坑	B－2	楕円形	不整形	71.0	57.0	41.5	出土遺物なし。
第4号ピット	H－3	楕円形	箱形	55.0	32.0	43.0	出土遺物なし。
第5号ピット	G－3	隅丸長方形	U字形	60.0	49.0	55.0	土器破片9点、礫2点出土。
第6号ピット	G－3	隅丸方形	U字形	43.0	38.0	49.0	出土遺物なし。
第7号ピット	G－4	隅丸方形	逆台形	39.0	37.0	48.0	土器破片11点出土。
第8号ピット	G－4	楕円形	U字形	41.0	36.0	61.5	土器破片3点、礫7点出土。
第9号ピット	F－4	楕円形	箱形	48.0	39.0	35.5	土器破片8点、礫1点出土。
第10号ピット	G－3	隅丸方形	U字形	46.0	43.0	36.5	土器破片2点出土。
第11号ピット	F－3	楕円形	U字形	47.0	38.0	42.0	出土遺物なし。
第12号ピット	G－2	隅方形	U字形	43.0	37.0	40.0	土器破片4点出土。
第13号ピット	G－2	円形	U字形	39.0	34.0	43.5	出土遺物なし。
第14号ピット	F－2	楕円形	箱形	65.0	48.0	48.0	土器破片2点、礫1点出土。
第15号ピット	D－1	楕円形	箱形	42.0	35.0	27.0	出土遺物なし。
第16号ピット	D－1	楕円形	U字形	45.0	38.0	56.5	出土遺物なし。
第17号ピット	C－1	楕円形	U字形	55.0	48.0	35.0	出土遺物なし。

第11表　土坑・ピット一覧表

(5) 遺構外出土遺物

遺構との関連が不明な遺物として、土器破片1,714点、石器4点、土製品と石製品各1点が出土した。本項末尾の第17表として、グリッド別の出土遺物点数などを掲げてある。これによると、土器破片および土製品の点数にして旧G-3区が184点(3,022.2g)と最も多く、これに旧I-3区の166点(3,064.2g)が次ぐ。旧G-3区と旧I-3区は、いずれも第1号住居跡の範囲と重複しており、左記2区出土の遺物は、同住居跡の覆土出土遺物に相当する可能性もある。また、破片1点平均の重量では、旧G-4区出土遺物が102.9gと他を圧倒している。同区では第5～8号土坑が検出されているが、これらの遺構となんらかの関連を有するものであろうか。そのほか、旧G-4、旧H-3、旧H-4、旧I-2、旧I-4の各区にて、土器破片およ



第37図　遺構外出土遺物(1)

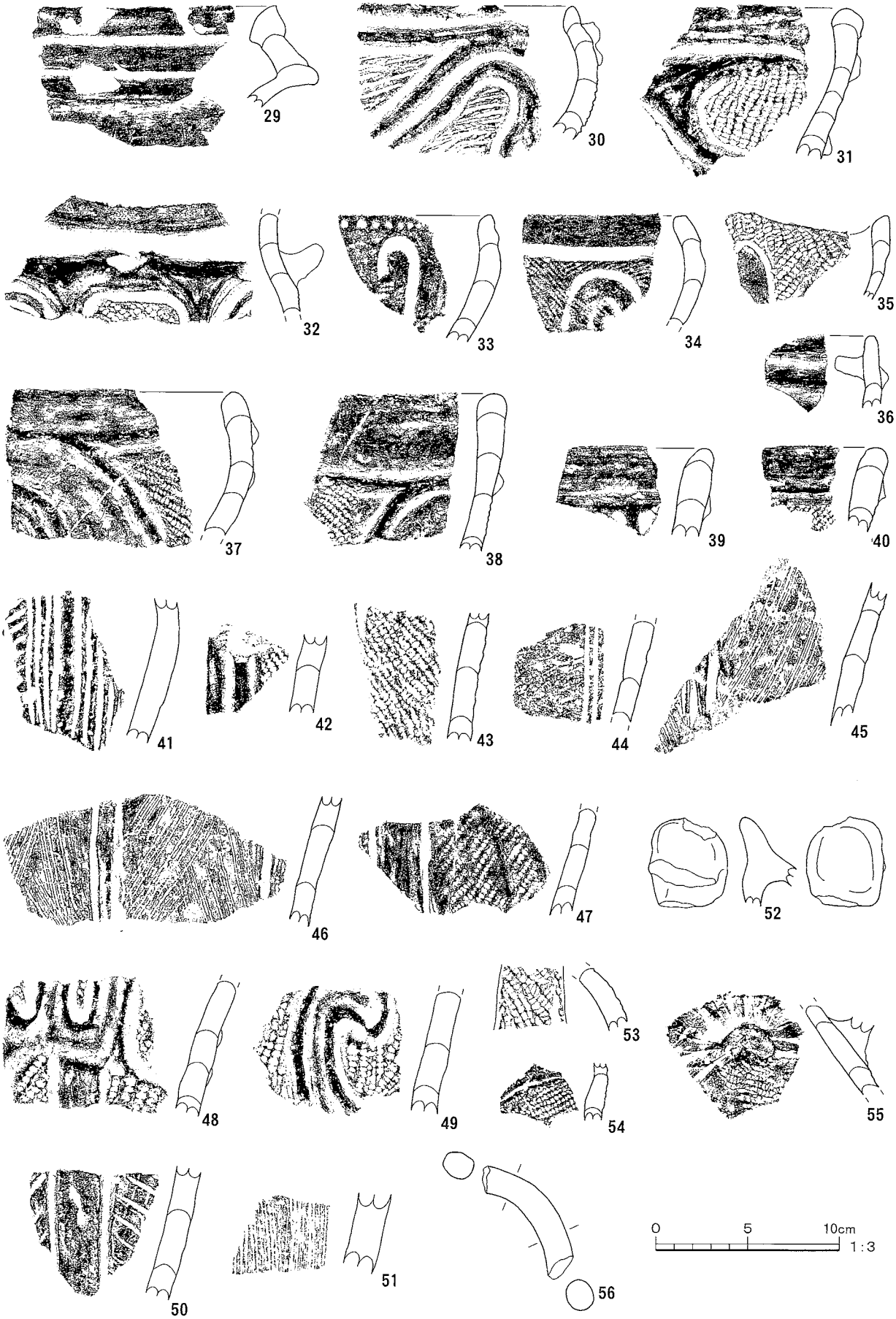
No.	器種	計測値(cm)／残存	器形・文様などの特徴／備考	色調（外）	色調（内）	胎　土	注　記
1	深鉢	／胴部片	縄文後、浮線文に斜位のキザミ。	にぶい黄橙色	黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	前I -3 区
2	深鉢	／口縁部片	突起部左右に円形の深いえぐり。隆帯にキザミ。口縁部と隆帯下側に斜位の短沈線。	にぶい赤褐色	黒褐色	石英・角閃石・白色粒	表土
3	深鉢	底径：10.1／胴部中位～底部	隆帯上側に隆線文および重弧状等の沈線文、刺突文。胴部下位は無文。	にぶい褐色	黒褐色	石英・角閃石・白色粒・砂礫	前F -4 区
4	深鉢	口径：(21.8)／口縁～胴部上位片	口縁部内側が肥厚。口縁部は無文。くびれ部の隆帯に矢羽根状のキザミ。胴部に縄文。	暗褐色	にぶい褐色	石英・黒色粒・白色粒・チャート	前H -1 区・前I -1 区
5	深鉢	／突起片	ねじれた８の字状の突起。	にぶい褐色	にぶい褐色	石英・黒色粒・白色粒	前H -3 区
6	鉢	／口縁部付近片	無文帯下側に、２列の連続刺突文、横位・波状の押引文。	灰褐色	灰褐色	片岩・チャート	前D -1 区
7	深鉢	／口縁部片	波状口縁。押引文。	にぶい赤褐色	にぶい褐色	白色粒・赤褐色粒	前I -4 区
8	深鉢	／口縁部片	口縁部短く外傾し内面に稜。横位の連続刺突文。	にぶい橙色	にぶい褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 H-1 区
9	深鉢	／胴部片	縦位貼付文が欠損。縄文、連続爪形文、平行沈線区画内に縦位沈線。	灰黄褐色	黒褐色	石英・黒色粒・白色粒	前H -3 区
10	深鉢	／口縁部片	口縁部短く外傾し内面に稜。刺突による波状隆帯。横位沈線。	褐色	にぶい褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 B-1 区
11	深鉢	／口縁部片	口唇部は内側に突出。隆線文、平行沈線文。	にぶい黄褐色	明褐色	雲母・石英・黒色粒	1 住 P15・前I -3 区
12	深鉢	／口縁部片	口縁部外面が隆帯状に肥厚。平行沈線、連続爪形文。	暗褐色	にぶい橙色	石英・黒色粒・白色粒	表土
13	深鉢	／胴部片	平行沈線、ヘラ先状工具による連続刺突文。／外面に煤付着。	暗褐色	にぶい黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 G-4 区
14	深鉢	／胴部片	押引文、櫛歯状工具による連続刺突文、隆帯、平行沈線。	にぶい赤褐色	褐灰色	石英・角閃石・白色粒	前 j-4 区
15	深鉢	／胴部片	平行沈線、連続刺突文、押引文。	にぶい褐色	灰黄褐色	石英・角閃石・白色粒	前 H-1 区
16	深鉢	／胴部片	隆帯間にヘラ先状工具による連続刺突文を2列施文後、波状に押引文。	にぶい赤褐色	灰褐色	片岩・角閃石・チャート	前 D-1 区
17	深鉢	／胴部片	隆帯下側にヘラ先状工具による連続刺突文。	赤褐色	暗赤褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 H-4 区
18	深鉢	／胴部片	鋸歯状に沈線、連続刺突文2種2列、隆帯。	明赤褐色	灰黄褐色	石英・角閃石・白色粒	前 F-3 区
19	深鉢	／胴部片	沈線間の低い隆帯上に連続刺突文。渦巻状の沈線。	にぶい褐色	灰黄褐色	片岩・雲母・チャート	前 B-1 区
20	深鉢	／胴部片	沈線文。／外面に煤付着。	暗褐色	にぶい褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 E-4 区
21	深鉢	／胴部片	隆線文、沈線、刺突・短沈線。	にぶい赤褐色	にぶい褐色	石英・チャート	前 B-1 区
22	浅鉢	／胴部片	幅広の無文帯下側に隆帯、隆線文、沈線。	赤褐色	褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 H-1 区
23	深鉢	／胴部片	縦位平行沈線、刺突文。	にぶい赤褐色	灰褐色	石英・黒色粒・白色粒	1 配 82・前 F-3 区
24	深鉢	／胴部片	複数列の横位沈線・連続刺突文。	にぶい赤褐色	黒褐色	雲母・石英・黒色粒	前 G-4 区
25	深鉢	／胴部片	単節縄文。	橙色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	2 住 108
26	深鉢	／突起片	頂部および側面の一部に角押文。	にぶい褐色	灰褐色	石英・チャート	前 H-3 区
27	深鉢	／胴部片	扇状の高い貼付文。粗雑な角押文。	にぶい赤褐色	褐色	雲母・石英・チャート	前 D-2 区
28	深鉢	底径：(7.3)／底部片	胴部下位は無文。	明赤褐色	黒褐色	雲母・石英・チャート	区外

第12表　遺構外出土遺物観察表（1）

び土製品 100 点以上の出土をみている。

なお、今回の調査では、調査進行上の都合により、遺物の位置記録・表示用（4m グリッド：旧グリッド）、遺構用（5m グリッド）と2通りのグリッドを併用しており、第4図にそれぞれの位置割りを明示している。

土器の製作時期は、これまで遺構と関連づけて紹介してきた例に比べ、古い時期へ向けて幅を広げており、上限は前期後葉にまでさかのぼる。一方、新しい時期は後期前葉にとどまり、遺構内出土遺物とほぼ一致している。こうした傾向は、当地が住居跡や配石遺構が構築される以前よりなんらかの形で利用されていたこと、およびそれらの配絶後、長らく人為の及ばない場所となっていたことをあわせて示唆しているように思われる。



第38図　遺構外出土遺物(2)

No.	器種	計測値(cm)／残存	器形・文様などの特徴／備考	色調(外)	色調(内)	胎　土	注　記
29	浅鉢	／口縁部片	口縁部は内側に屈曲。口縁部に2条の沈線。／内外面に赤色塗彩の痕跡あり。内外面ミガキ。	にぶい赤褐色	暗赤褐色	片岩・石英・チャート	前A-1区
30	深鉢	／口縁部片	縄文後、隆帯・隆線文による区画。	褐灰色	にぶい褐色	石英・チャート	前C-1区
31	深鉢	／口縁部片	隆線区画内に縄文。	にぶい褐色	にぶい橙色	石英・黒色粒・白色粒	前H-3区
32	深鉢	／口縁部付近片	隆帯の一部がエラ状に突出。隆線区画内に縄文。	にぶい褐色	黒褐色	石英・黒色粒	3土6
33	深鉢	／口縁部片	口縁部に連続円形刺突。逆「J」字状の沈線。	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	黒色粒・白色粒	前A-1区
34	深鉢	／口縁部片	横位沈線下に縄文施文後、沈線文。	にぶい黄橙色	黄灰色	石英・角閃石・白色粒	前I-2区
35	深鉢	／口縁部片	波頂部欠損。沈線文後、口縁部上端から縄文施文。	褐灰色	褐灰色	石英・チャート	前I-4区
36	深鉢	／口縁部片	内面に鍔状の隆帯。外面に隆帯。／内外面ミガキ。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	前F-2区
37	深鉢	／口縁部片	縄文後、隆帯・隆線区画、縄文磨り消し。	橙色	にぶい橙色	石英・黒色粒・白色粒	H4杭周辺
38	深鉢	／口縁部片	口縁部は無文。隆帯・隆線区画、縄文。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	前H-3区
39	深鉢	／口縁部片	口縁部は無文。隆帯から隆線が下がるが欠損。	黒褐色	にぶい褐色	石英・黒色粒・白色粒	前G-3区
40	深鉢	／口縁部片	隆帯下に縄文施文。	灰黄褐色	灰黄褐色	黒色粒・白色粒	前G-3区
41	深鉢	／胴部片	隆線による懸垂文、縦位沈線、斜位短沈線。	にぶい赤褐色	暗褐色	石英・黒色粒・白色粒	前I-1区
42	深鉢	／胴部片	幅広の沈線、縄文。	にぶい赤褐色	暗褐色	石英・黒色粒・白色粒	1住104
43	深鉢	／胴部片	沈線、LR縄文を縦位施文。	にぶい赤褐色	黒褐色	石英・黒色粒・白色粒	1住105
44	深鉢	／胴部片	不明瞭ながら縄文施文、縦位沈線。	明黄褐色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・白色粒	前F-4区
45	深鉢	／胴部片	沈線懸垂文、条線文。	黒褐色	にぶい褐色	石英・黒色粒・白色粒	2住一括・前H－1区
46	深鉢	／胴部片	沈線懸垂文、条線文。／45と同一個体と思われる。	暗赤褐色	赤褐色	石英・黒色粒・白色粒	2住12・113
47	深鉢	／胴部片	LR縄文、沈線懸垂文。	暗褐色	にぶい褐色	石英・角閃石・白色粒	前I-4区
48	深鉢	／胴部片	縄文、隆線文。	灰黄色	にぶい橙色	石英・角閃石・白色粒	前I-4区
49	深鉢	／胴部片	縄文、隆線文。	灰黄色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・白色粒	前H-4区
50	深鉢	／胴部片	沈線懸垂文、斜位沈線。	黒褐色	灰黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	前A-1区
51	深鉢	／胴部片	条線文。	灰黄褐色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	前J-4区
52	鉢	／把手部片	橋状把手部片。無文。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・チャート	前G-3区
53	鉢	／把手部片	橋状把手部片。縄文施文。	赤褐色	にぶい赤褐色	石英・黒色粒・白色粒	前H-2区
54	深鉢	／胴部片	沈線区画内に縄文。	灰褐色	褐色	石英・黒色粒・白色粒	前F-1区
55	鉢	／胴部片	エラ状の突起端部欠損。胴部に縄文。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・白色粒	前G-3区
56	注口土器	／把手部	棒状の把手。	赤褐色	赤褐色	黒色粒・チャート	前G-1区

第13表　遺構外出土遺物観察表(2)

前期後葉の土器：第37図1は、諸磯b式の深鉢胴部上半の破片である。キャリパー形を呈するもので、大きく開く部位に相当する。粘土紐の貼り足しによる浮線文の上には、鋭いキザミが施されている。

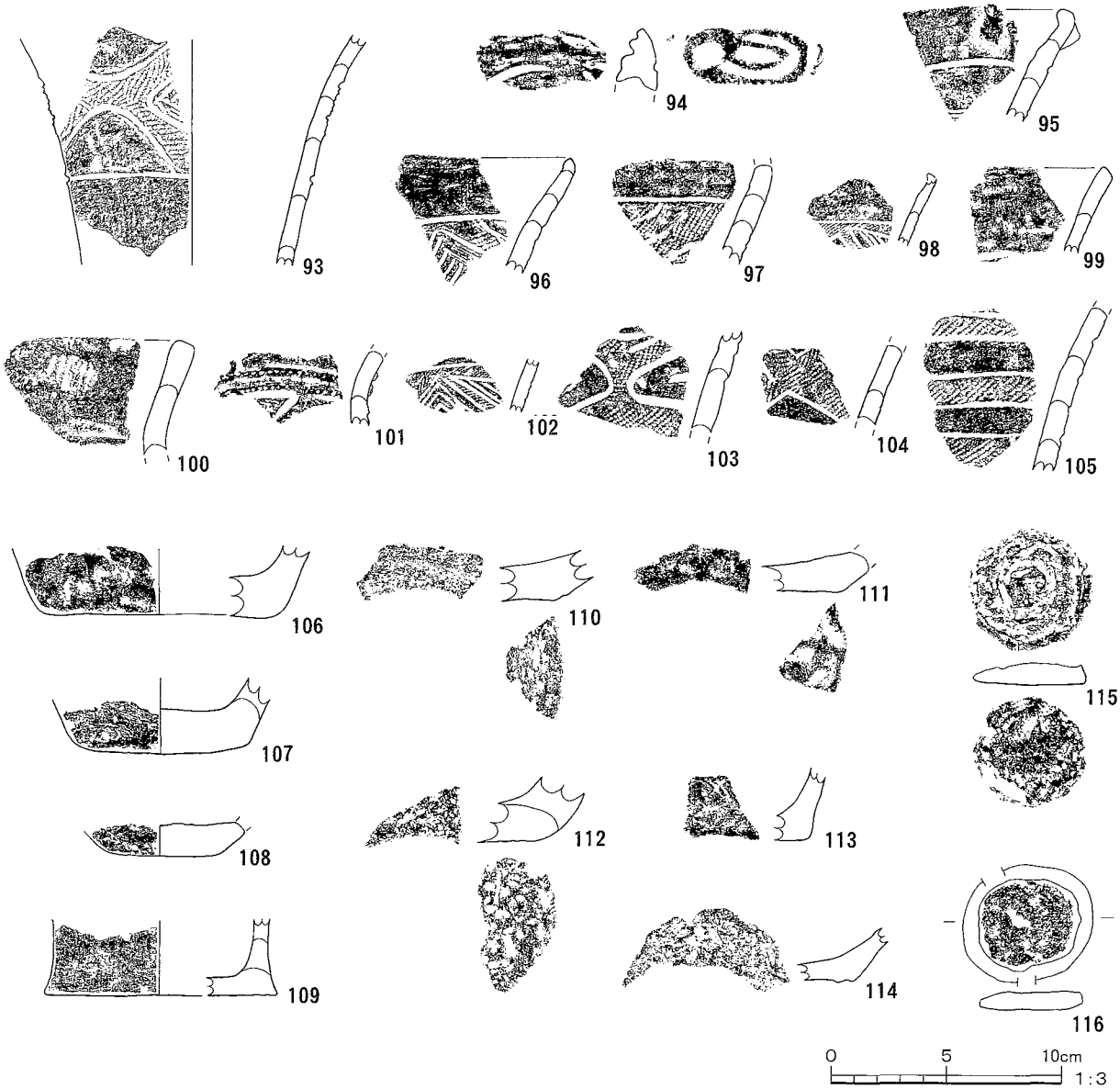
中期中葉の土器：2～25は、勝坂式期の土器破片である。6・7は勝坂Ⅰ式。ペン先文とも呼ばれる細かい押引文が認められる。8、13～18は、勝坂Ⅱ式。押し引きによる波状文または波状沈線紋が用いられる。2～4、9～12、19～25は勝坂Ⅲ式ないし同式併行の土器。2・3は同一個体で、いわゆる焼町類型の深鉢である。5、11、23も同類か。4は樽形を呈する深鉢で、やや下って加曾利ＥⅠ式併行とも見なしうる。12は、三原田式土器の一種である。27・28は、阿玉台Ⅱ式土器で、おおむね勝坂Ⅱ式と同時期と考えられる。胎土に雲母の混入が顕著であるため、識別が容易である。

中期後葉の土器：第38図29は、勝坂Ⅲ式期終末～加曾利ＥⅠ式期初頭の浅鉢。内外面とも、赤色塗彩の痕跡が認められる。30は、加曾利ＥⅠ式、31～34、42・43は、加曾利ＥⅢ式に相当する。41、

第39図　遺構外出土遺物(3)

No.	器種	計測値(cm)／残存	器形・文様などの特徴／備考	色調（外）	色調（内）	胎　土	注　記
57	深鉢	／突起部	上面は切れ込みのある円形で、中央部に円錐状の深いえぐり、周縁部に沈線。外面側に円錐状のえぐりと深い沈線。／煤付着。	褐灰色	褐灰色	石英・黒色粒・白色粒	前H-3区
58	深鉢	／突起部	頂部はねじり紐状。口縁部に円形刺突文。	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・白色粒	前F-1区
59	浅鉢	／突起部	中央部が擂り鉢状にくぼむ円形突起。／赤色塗彩の痕跡あり。	浅黄橙色	にぶい黄橙色	黒色粒・白色粒	前H-4区
60	注口土器か	／把手	上面半楕円形状で中央がくぼむ。側縁に連続円形刺突文。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	黒色粒・白色粒	前G-3区
61	深鉢	／突起部	擂り鉢状にくぼみのある突起。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・白色粒	前G-2区
62	深鉢	／口縁部片	口縁部は内側に屈曲。縄文後、長楕円形に沈線区画。	明褐色	にぶい黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	前G-2区
63	深鉢	／口縁部片	口縁部は内側に屈曲。縄文後、沈線区画。	橙色	橙色	石英・黒色粒・白色粒	前H-3区
64	深鉢	／胴部片	縄文後、沈線文、縄文磨り消し。／内面ミガキ。	灰褐色	褐灰色	石英・黒色粒・白色粒	前J-4区
65	注口土器	／胴部片	渦巻状に隆線文。	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	石英・角閃石・白色粒	前F-4区
66	深鉢	／口縁部片	ゆるやかな波状口縁。口縁部内面が肥厚。波頂部の環状貼付文から2条の微隆起線によるJ字文。内面波頂部に円形文。	灰黄褐色	灰黄褐色	石英・角閃石・白色粒	前H-4区
67	深鉢	／口縁部片	内側に屈曲する波状口縁。波頂部に円形孔。口縁部に円錐状のえぐり、連繋沈線。／内外面ミガキ。	褐灰色	灰黄褐色	石英・角閃石・白色粒	前I-2区
68	深鉢	／口縁部片	波状口縁。波頂部下に円形孔が欠損。口縁部と隆帯間に円錐状のえぐりと深い沈線。／外面に煤付着。	褐灰色	灰黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	前I-3区
69	深鉢	／口縁部片	ゆるやかな波状口縁。波頂部下に指頭大の円形押圧文。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・チャート	前H-1区
70	深鉢	／口縁部片	隆帯・隆線文、環状文、深い沈線。	灰黄色	にぶい橙色	黒色粒・白色粒	前I-3区
71	浅鉢	／口縁部片	口縁部は短く内傾。口縁部に円形竹管文。	浅黄色	浅黄橙色	石英・角閃石・白色粒	前H-2区
72	深鉢	／口縁部片	口縁部は短く内傾。口縁部に沈線。胴部、沈線区画内に縄文。	黒褐色	黒褐色	石英・黒色粒・白色粒	前I-1区
73	深鉢	／口縁部片	口縁部に横位沈線2条。	灰黄褐色	灰黄褐色	チャート・粗砂粒	前G-3区
74	深鉢	／口縁部片	口縁部に削りとりによる楕円形文。胴部に横位沈線。	褐灰色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・白色粒	前G-3区
75	深鉢	／口縁部片	横位沈線下に沈線文、斜位の短沈線。	暗褐色	にぶい褐色	石英・角閃石・白色粒	前H-2区
76	深鉢	／口縁部片	口縁部内面が肥厚。口唇部に沈線めぐる。口縁部無文。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・角閃石・白色粒	前H-1区
77	深鉢	／口縁部片	口唇部は内側に突出。沈線文。	灰褐色	灰褐色	白色粒・チャート	区外
78	深鉢	／口縁部片	波状口縁。口縁部無文。／煤付着。内外面ミガキ。	黒褐色	灰黄褐色	白色粒・チャート	前I-2区
79	深鉢	／口縁部片	鎖状隆帯を粗雑に貼付。	にぶい橙色	橙色	石英・黒色粒・白色粒	前H-3区
80	深鉢	／口縁部片	わずかにくぼむ浅い沈線。	褐灰色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	前H-4区
81	深鉢	／胴部片	沈線文、縄文、刺突文。	にぶい橙色	にぶい橙色	石英・黒色粒・白色粒	前I-1区
82	深鉢	／胴部片	上下に円形刺突のある貼付文。	にぶい黄色	にぶい黄色	石英・角閃石・白色粒	前G-4区
83	深鉢	／胴部片	下位に円形竹管文のある貼付文。刺突のある隆帯、沈線。	褐灰色	褐灰色	石英・白色粒・粗砂粒	前H-3区
84	深鉢	／胴部片	くびれ部に横位沈線2条。／外面に煤付着。	灰黄褐色	にぶい褐色	石英・黒色粒・白色粒	前G-3区
85	深鉢	／胴部片	沈線文後、縄文施文。	灰黄褐色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	前I-4区
86	深鉢	／胴部片	微隆起線による懸垂文の左右に中途が弧状にふくらむ沈線3条、その外側に縄文。	にぶい褐色	灰褐色	石英・黒色粒・白色粒・チャート	前H-2区
87	深鉢	／胴部片	沈線文、縄文。	橙色	明褐色	石英・角閃石・白色粒	前J-4区
88	深鉢	／胴部片	沈線文。	褐灰色	にぶい黄橙色	角閃石・白色粒	前G-3区
89	深鉢	／胴部片	矢羽根状に沈線文。	橙色	にぶい褐色	石英・角閃石・白色粒	前B-1区
90	深鉢	／胴部片	沈線文。／外面に煤付着。	褐灰色	灰黄褐色	石英・角閃石・白色粒	前H-4区
91	深鉢	／胴部片	沈線懸垂文。破片左上に縄文あり。	にぶい赤褐色	にぶい褐色	石英・角閃石・白色粒	前I-4区
92	深鉢	／胴部片	縄文後、横位沈線、さらに条線状の沈線。／外面に煤付着。	灰黄褐色	にぶい橙色	石英・黒色粒・白色粒	前F-1区

第14表　遺構外出土遺物観察表（3）



第40図　遺構外出土遺物(4)

44～46は、曾利式土器とみられる。35～40、47～49、52～55は加曾利EⅣ式。ただし、36、47はEⅢ式に含まれる可能性もある。52・53は鉢の把手。54は小形の個体。壺や瓢(ひさご)形土器など、深鉢以外の器形か。55は鉢である。欠損しているが、本来は52・53のような橋状の把手をもつ。56は注口土器の把手の一種。割れ口の中央には、接合を強固にするための細い芯棒の痕跡が認められる。あるいは後期初頭～前葉に属するかもしれない。50・51は細別時期不詳。

後期初頭～前葉の土器：第39図に、称名寺式および堀之内1式土器を掲載した。57～65は、称名寺式土器。57～61は、把手または突起の破片である。57は、第1号住居跡出土遺物の第9図2よりも新相を示し、典型的な窩紋連繋沈紋が認められる。59は浅鉢、60は注口土器の把手であろう。61は深鉢の一部かとも思われるが、判然としない。また、59の例は後続する堀之内1式期でも認められる。65は、第1号配石遺構の第20図13と同様、称名寺式に特有の注口土器である。

66～92は、堀之内1式土器。66では、単位部分の口縁部から頸部にかけてC字状の隆帯が貼り付けられており、1式でもやや古い段階に属するとみられる。87は、小形の個体。91・92は粗製土器の一種で、

No.	器種	計測値(cm)／残存	器形・文様などの特徴／備考	色調（外）	色調（内）	胎　土	注 記
93	深鉢	／胴部片	沈線区画内に縄文充填。	にぶい褐色	にぶい褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 G-3 区
94	深鉢	／口縁部片	外面に沈線。 内面に円錐状のえぐりと沈線による装飾。	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	白色粒・チャート	前 G-3 区
95	深鉢	／口縁部片	口唇部は内側に突出。 口縁部に小突起を貼付。 横位沈線。	灰黄褐色	にぶい橙色	石英・角閃石・白色粒	前 F-3 区
96	深鉢	／口縁部片	ゆるやかな波状口縁。 口縁部内面が肥厚する。 波頂部下に円形孔。 沈線文後、 縄文。	灰黄褐色	にぶい褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 I-3 区
97	深鉢	／口縁部付近片	沈線文後、 縄文施文。	褐灰色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	区外
98	深鉢	／口縁部付近片	沈線文後、 細縄文を充填。	にぶい褐色	黒褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 G-3 区
99	深鉢	／口縁部片	横位沈線。 口縁部は無文。 ／外面に赤色塗彩の痕跡あり。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	前 F-1 区
100	深鉢	／口縁部片	平坦な口唇部。 口縁部は無文。	にぶい褐色	灰黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 A-1 区
101	深鉢	／胴部片	2条の隆帯にキザミ。 胴部に沈線文。	にぶい橙色	黒褐色	石英・角閃石・白色粒	前 H-3 区
102	深鉢	／胴部片	沈線文後、 細縄文を充填。 ／ 98 と同一個体の可能性あり。	にぶい褐色	黒褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 G-3 区
103	深鉢	／胴部片	沈線文後、 縄文を充填。 縄文を施文しない部分に刺突。	にぶい黄色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	前 E-3 区
104	深鉢	／胴部片	沈線文後、 縄文を充填。	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	前 F-4 区
105	深鉢	／胴部片	帯状に沈線区画後、 縄文を充填。 ／外面に煤付着。	灰褐色	褐色	片岩・チャート	区外
106	深鉢	底径：(9.9)／底部片	胴部下位は無文。	にぶい黄褐色	浅黄色	石英・角閃石・白色粒	前 I-3 区
107	深鉢	底径：(7.6)／底部片	胴部下位は無文。	にぶい橙色	褐灰色	石英・黒色粒・白色粒	前 C-2 区
108	深鉢	底径：4.7 ／底部	胴部下位は無文。	にぶい赤褐色	黒褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 I-2 区
109	深鉢	底径：(10.1)／底部	胴部下位は無文。	にぶい褐色	灰褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 H-4 区
110	浅鉢か	／底部片	胴部下位は無文。 底面網代痕か。	にぶい褐色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	前 I-3 区
111	浅鉢か	／底部片	胴部下位は無文。 底面に指頭押圧痕。	橙色	にぶい黄橙色	石英・黒色粒・白色粒	前 H-2 区
112	深鉢	／底部片	胴部下位は無文。 底面網代痕か。	にぶい橙色	にぶい黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 I-4 区
113	深鉢	／底部片	胴部下位に縄文施文か。	橙色	黒褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 H-2 区
114	深鉢	／底部片	胴部下位は無文。	にぶい褐色	灰黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 I-3 区
115	深鉢	底径：4.8 ／底部	小さめの底部。 内面に調整痕。	にぶい黄橙色	灰黄色	石英・黒色粒・白色粒	前 G-2 区
116	土製円板	3.9 × 4.4	深鉢の無文胴部を再利用。 側面を研磨。	にぶい褐色	明褐色	石英・黒色粒・白色粒	前 H-1 区

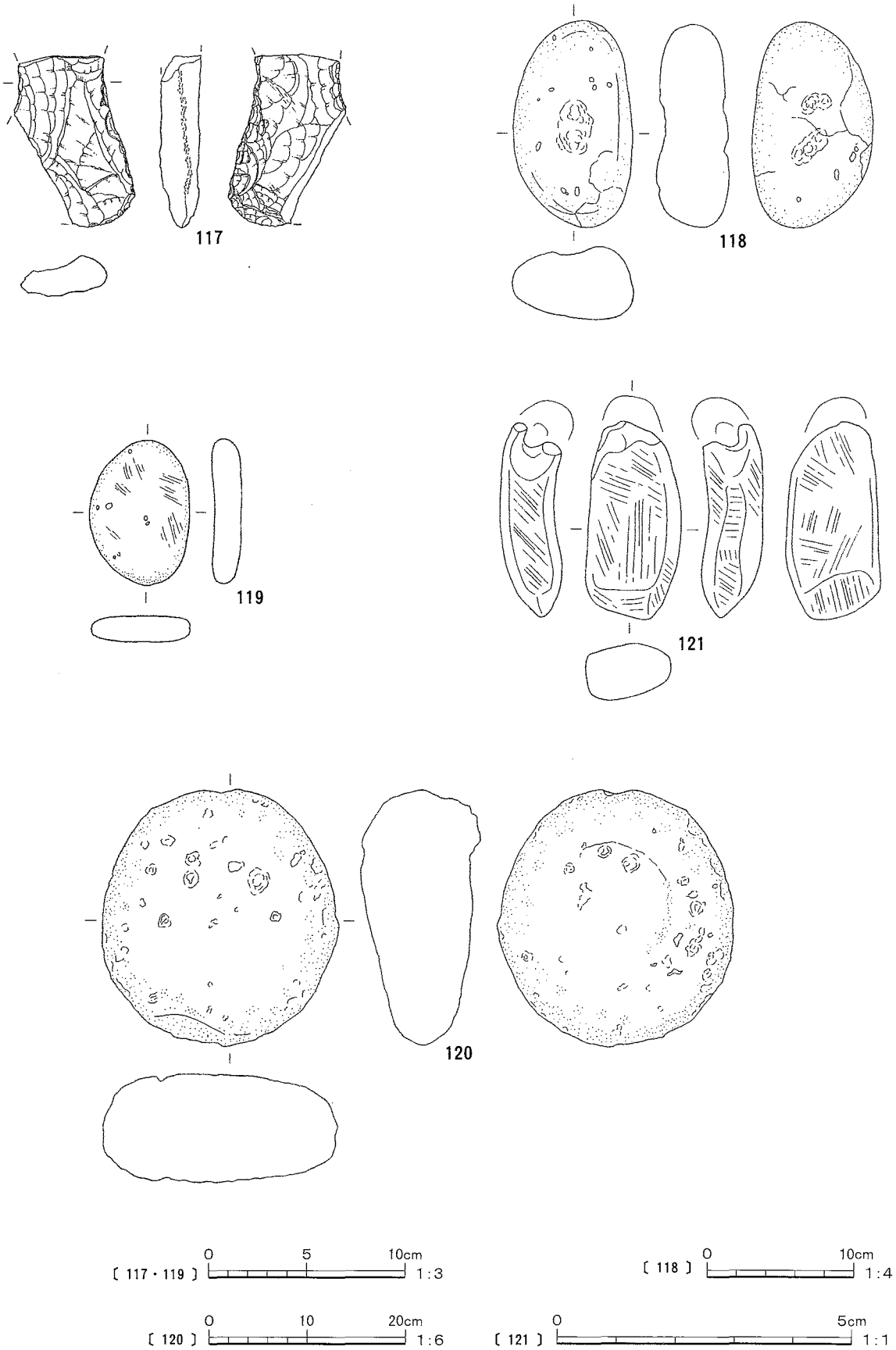
第15表　遺構外出土遺物観察表（4）

2式期との弁別が難しいものの、 便宜上にここにまとめた。

後期前葉の土器： 第 40 図に、 堀之内2式土器、 各時期の底部破片などを一括した。 93 ～ 105 は堀之内2式土器。 アサガオ形の深鉢が大半を占める。 100・101 のみ、 くびれを有する器形である。 106 ～ 115 は底部破片。 時期を明確にできない例が多いが、 109、 115 については、 それぞれ形状が示す特徴、 成形技法の点から、 堀之内2式のものであることが分かる。 また、 110・111 は、 浅鉢の可能性がある。 116 は、 本遺跡で唯一出土した土製円板である。 用いられた土器の製作時期は明らかでない。

ところで、 後期前葉の集落遺跡といえば、 出土土器に占める粗製土器の割合が精製土器のそれを凌駕する例が多いように思われるが、 本遺跡にて出土した当該期の粗製土器は僅少であり、 むしろアサガオ形深鉢が卓越するような印象さえある。 生業のさかんな場所とみるには、 少なからず違和感がある土器の内容といえよう。

石器・石製品： 第 41 図に示した。 内訳は、 打製石斧、 凹石、 研磨具、 多孔石、 垂飾りの各1点である。 118 の凹石は、 磨石を兼ねている。 また、 滑石製の垂飾りが採集されている点は注目される。



第41図　遺構外出土遺物(5)

No.	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石　材	注　記	備　　考
117	打製石斧	[8.6]	[5.95]	2.05	[105.3]	輝石安山岩	前C-3区	
118	磨石・凹石	13.9	8.1	4.9	681.5	輝石安山岩	7ピット	凹石→磨石。片側面も使用。被熱。
119	研磨具	7.2	5.0	1.5	64.1	輝石安山岩	前G-3区	全体的に平滑。
120	多孔石	26.2	24.1	12.3	8430	輝石安山岩	前G-4区	表裏面ややまばらに多孔。
121	垂飾り	[3.4]	[1.6]	1.0	8.5	滑石	前H-3区	側面部に穿孔。

第16表　遺構外出土遺物観察表（5）

位　置	土　器		石　器		土製品		剥片（黒曜石）		剥片（チャート）	
	数（個）	重さ(g)	数（個）	重さ(g)	数（個）	重さ(g)	数（個）	重さ(g)	数（個）	重さ(g)
旧A－1グリッド	13	359.2								
旧B－1グリッド	65	1,339.2							1	10.5
旧B－2グリッド	19	232.0								
旧C－1グリッド	37	810.7								
旧C－2グリッド	16	451.0								
旧C－3グリッド			1	105.3						
旧D－1グリッド	4	107.3								
旧D－2グリッド	2	159.1					2	3.2		
旧D－3グリッド	5	97.0								
旧D－4グリッド	8	278.1								
旧E－1グリッド	4	114.5								
旧E－2グリッド	1	9.8								
旧E－3グリッド	5	92.4								
旧E－4グリッド	2	50.1								
旧F－1グリッド	20	325.4								
旧F－2グリッド	14	183.1								
旧F－3グリッド	41	631.7								
旧F－4グリッド	39	1,472.7								
旧G－1グリッド	16	283.7								
旧G－2グリッド	62	1,062.7								
旧G－3グリッド	184	3,022.2	1	64.1						
旧G－4グリッド	108	11,116.9	1	8430.0						
旧H－1グリッド	79	1,569.9			1	16.0				
旧H－2グリッド	84	1,329.6								
旧H－3グリッド	164	2,745.4	1							
旧H－4グリッド	102	2,023.5	1	681.5			1	0.6		
旧H－4杭周辺	3	217.4								
旧I－1グリッド	69	1,488.8								
旧I－2グリッド	154	2,688.9								
旧I－3グリッド	166	3,064.2								
旧I－4グリッド	159	3,225.5					2	0.5		
旧J－4グリッド	46	694.6								
表土	12	362.3								
調査区外	11	217.1								

第17表　遺構外出土遺物 グリッド別集計表

第5章 まとめ

第2・4章の内容を適宜補足しつつ、今回の調査の成果について概括する。

住 居 跡： 2軒が検出された。主として掘り方レベルから出土した両住居跡の遺物が示す時期幅は、第1号が縄文時代後期初頭の称名寺1式～同前葉の堀之内2式、第2号が称名寺1式～堀之内2式となり、多数を占める遺物の時期は、後者の方が若干新しいような印象を受ける。

検出された2軒の住居跡は、いくつかの点で好対照をなしている。第1に、遺構構築材である礫の残存状況である。第1号では、張り出し部と推測される範囲でわずかに敷石らしき礫が確認されたに過ぎない。これに対し第2号では、主体部の中心付近を除き、敷石ないし配礫が顕著に残されていた。そのようすは、敷石というより、むしろ「積石」「組石」といったおもむきに近い。第2に、遺物の出土状況。出土量の差にもまして、残置された遺物の種類は明らかに第2号の方がまさる。石器の出土数は、前者が0点、後者が11点である。また、第1号は付帯施設を一切残していなかったが、第2号では土器埋設炉が検出されている。そして第3に、配石遺構との関連性である。前者は第1号配石遺構のラインから3mほど北へずれ、後者は連結部において配石遺構と位置的に重複しているのである。

ところで、柄鏡形住居跡について、関東地方全域を俯瞰すれば敷石をほとんどもたないケースは珍しくなく、その解釈として、構築当初から敷石が施されなかったという見方と、住居の廃絶時に敷石が抜去されたという見方とがある（岩井 1998）。どちらかが唯一の正解ということではなく、地域や個別の遺跡によって、一方もしくは双方が当てはまるのであろう。関東地方南部では、敷石が認められない、もしくは敷石を限定的に有する事例の方がむしろ優勢となる。ひるがえって、用材に事欠かない関東山地周辺部では、敷石をよく残す例が主流である。ただし、敷設していた礫を抜去したと見なしうる例も、東京都青梅市K-5遺跡SI-3・4(加藤建設株式会社 2001前掲)、埼玉県荒川村姥原遺跡第11号住（粟島 1988）（いずれも称名寺式期）など、敷石住居が存在した時代の全般を通じてしばしば認められる。群馬県域の西部では、とりわけ敷石が残される割合が高く、構築当初より敷石が低調な住居跡は異例に属する。ここでは、第1号住居跡にて敷石が検出されなかった原因として、上記のような礫の抜去が行われた可能性を指摘しておきたい。

なお、2軒とも埋甕が検出されていないが、これは堀之内1式期に関東地方全域において認められる傾向と符合し、首肯できる現象である。

配石遺構： 第1号配石遺構を中軸とし、近接して小単位の第2～4号が点在している。これらの配石遺構の新旧関係は不明で、おおむね堀之内1式期に構築ないし廃絶されたと推測されるにとどまる。また、堀之内1式期といえば、配石遺構の下部施設として土坑もしくは土壙（墓穴）が検出される例が増加を始める時期であるが、本遺跡では該当する遺構は発見できなかった。

第1号配石遺構について、礫が当時の地表面に単純に据え置かれたのではなく、少なくとも一部では掘り方を設けて礫を埋置していた可能性が、試掘溝の調査によって示されたのはひとつの成果であった。また同試掘溝では、堀之内1式の土器破片の縁辺に加工を施した土製品8点が、密集し、一部は平らに積み重ねられた状態で出土している。配石遺構の掘り方というべき位置から出土したこれらの土製品については、置かれた意図や経緯を詳しく知るすべを見い出せないが、ともあれ同遺構の構築時期との関連が深いばかりでなく、構築の際に行われた行為の一例を示すと考えうるもので、まことに興味深い。なお、第1号配石遺構は、礫の配列が示す弧線が複数の小さな弧線に分節するように見え、それに従うと3つ（第2号住居跡の範

囲を含めると4つ）の小単位に分けて把握することもできる。

第2～4号配石遺構のうち、第3号では立石が折れた状態で検出され、第2号でも立石の可能性がある礫が見つかっている。第4号については、立石の存在が明確でない。

土坑・ピット：　都合 29 基が検出された。配置状況に明確な傾向はうかがえない。このうち第3号土坑は、後期初頭の埋設土器を伴うもので、周辺に住居跡の痕跡がないことから、屋外埋甕と考えられる。本遺跡で時期の推測できるものとしては、最も古い遺構ということになる。

ところで第3号土坑は、上部を除き覆土の特徴が地山と酷似しており、精査のおりにはどの段階で完掘と見なすか判断に苦慮した。この種の覆土は、土坑の掘り込みをつくった際に生じた排土、もしくはそれと同質の土を用いてごく短期間のうちに埋め戻されたものと推測される。住居跡内のピットをはじめ、今回の調査で検出された遺構の大半も、第3号遺構ほどではないものの、プラン確認の際には目視に適した日光となる時間帯（1･2月の午前 10 時～ 12 時）を選び、念入りな観察を行ったうえで把握が可能となったものであった。

本遺跡、ひいては周辺地域に限らず、縄文時代中期後葉から後期中葉にかけて、すなわち敷石（柄鏡形）住居跡が採用される時期には、こうした識別困難な覆土をもつ遺構がしばしば見受けられる。敷石住居跡に平面プランや壁面の立ち上がりが明瞭でない例の多いことはとみに知られているが、付帯施設までもが検出しにくいとなると、それは遺構そのものの有無の判断が難しく、検出には相応の注意と工夫が必要であるということを意味する。たとえばローム台地上の遺跡において、基本層序の黒褐色土～暗褐色土層の面にて遺構確認が困難であれば、いきおい地山の色調が明るくなるローム層付近まで遺構確認面を下げて調査することになる。地山がロームで覆土がロームブロックを主体とする場合、一見遺構は存在しないかのようであるが、よく見ると、暗褐色土など色調の暗い土が覆土の範囲において斑（まだら）状もしくはひび割れ状に入り込んでいることがある。また、ピンポールなどの棒で突くと、地山に比べ覆土の方がブロック単位に崩れやすいというケースもある。肉眼観察にあたっては、前述した太陽光の角度も重要である。さらに、確認面では検出が容易でも、下に向かうほど地山との境界があいまいになる例もあり、ことは一筋縄ではいかない。

今回の調査では、不明瞭な遺構への対応いかんによって、調査の成果が大きく左右されることをあらためて痛感したこともあり、以上蛇足ながら付記した次第である。それにしても、上記の時期において検出しづらい遺構、とりわけ住居跡が散見される現象には、いかなる背景があるのか。ここでは憶測をわずかに挙げることしかできないが、第3号土坑に関する推測と一脈通じ、なんらかの作用によってほぐされた遺構周辺の地山が遺構を埋め、本来の地山と融和したとする見方ができるかもしれない。その作用のひとつとして、敷石（柄鏡形）住居跡が廃絶される際、前述のような礫、あるいは柱の抜去といった損壊を受けているケースが想定される。

住居跡および配石遺構群の構築（廃絶）順序：　当該種の遺構は、おおむね同時期、後期前葉堀之内式期に構築されたものである。先述したように、住居跡に関しては第1号が第2号に先行すると考えられる。第2号住居跡の連結部と第1号配石遺構とが交錯する箇所の配礫は、3段前後を積んで念入りに行われており、かつ石皿や凹石など転用された石器の含有率が高い。詳細は不明であるが、一連の遺構の中で特別な意味をもつ位置であったことは想像に難くない。

一般に、敷石（柄鏡形）住居跡と配石遺構が一組となって検出された遺跡では、住居跡が先行し、次いで配石遺構が構築されるという理解が行われている。本遺跡においてこの見解を明確に肯定するような事象は多くないが、以下に挙げてみる。まず、第2号住居跡の連結部東部の最下部において並べられた礫は、第1号配石遺構の主要な礫よりも下位に位置しており、同住居跡が構築された時点ですでに配石遺構のデザ

インが考慮されていたことを示唆している。

また、敷石（柄鏡形）住居跡の研究成果のひとつに、構築時に設けられた敷石のほか、廃屋儀礼行為の一環として行われる敷石の存在を想定し、廃絶後の敷石に相当する現象として「環礫方形配石」「周堤礫」という配石状況を充てる見解がある（山本 1998）。環礫方形配石は、壁柱穴に沿って、多くはそれらを覆うように小礫が方形に配置されるものである。周堤礫は、連結部付近から主体部の外壁をとり囲むように礫を上積みするもので、そこから派生して列状の配石を伴うことがあるという。構築時期は、いずれも堀之内式期から加曾利B1式期（とくにその前半段階）までに限られる。関東地方南西部の山間地域、中部山地、および伊豆半島域での類例が多く、関東地方北部や埼玉県域といった関東山地寄りの地域での事例増加がかねてより予測されていた。本遺跡の第2号住居跡において環礫方形配石の痕跡を見い出すことはできないが、配礫の状況は周堤礫の形容と整合する。検出直後の段階で配石遺構と誤認しかねないような光景であった点は、周堤礫の多くに共通する特徴でもある。前述した周堤礫の例の分布域からみれば、本遺跡は外縁地域に属するが、列状配石との結びつきにおいて特化した一例として把握することができるかもしれない。

以上検討してきた内容をまとめると、第1号住居跡が廃絶されてまもなく第2号住居跡が構築され、さらにそれが本来の機能を停止したのち、同住居跡付属の周堤礫、および第1号配石遺構がほぼ同時に構築された、というおおまかな経過が想定できる。一連の経過に要した期間は、1型式期に収まる短いものであった。

遺物の分布状況： 調査区北西部にて密度が高く、第1号配石遺構をはさみ、南東へ向かって次第にその密度を減ずる。とくに、南東部のA～D－1区は、無遺物・無遺構地帯とでもいうべき範囲となる。当該区では、念のため他所の遺構確認面より1層下の第Ⅸ層上面までジョレンがけを行ったが、結果は同様であった。

土器の内容： 遺構外出土遺物を含めた時期幅は、縄文時代前期後葉の諸磯b式から後期前葉の堀之内2式までである。このうち内容に欠落のない範囲は、中期末の加曾利EⅣ式から堀之内2式まで。さらに、数量的に主体を占めるのは後期前葉の堀之内1式土器で、同じく堀之内2式、後期初頭の称名寺式が続く。これらが示す幅は、本遺跡全体の土地利用の継続時期、あるいはその最盛期を示唆していると考えられる。

今回の調査で得られた土器破片を概観するに、特筆に値するような個体はほとんどなく、狭義の一括資料も皆無である。ここでは、資料の集合からうかがえる傾向を2点示すにとどまる。まず、加曾利EⅣ～称名寺式土器のうち、深鉢の把手部分が残る破片が、住居跡付近で比較的まとまっていた。第14図2（第2号住居跡）、第9図1・2（第1号住居跡）、第39図57（旧H－3区：遺構外扱いながら第1号住居跡付近）の4点は、称名寺式の型式変化の一端をよく示している。また、堀之内式土器について、粗製土器の比率が高いという通例に反し、精製土器が大半を占める点は注意される。

石器の内容： 19点が出土した。遺跡全体での内訳は、石皿5点、多孔石4点、石皿兼多孔石1点、磨石兼凹石3点、研磨具2点、石鏃1点、打製石斧1点、磨製石斧1点、スクレイパー1点となっている。このうち、石皿と多孔石のほとんどは遺構構築材に組み込まれたものである。また、上記の集計対象外である剥片は、24点（52.0g）と微量にとどまる。上述した堀之内式土器における粗製土器の少なさとあわせ、本遺跡の出土遺物の内容は、生業活動を反映したものとしては貧弱といえる。俗な表現を借りれば、遺跡から日常的な生活臭があまり漂ってこないのである。

その他の遺物： 第1号配石遺構の試掘溝にて出土した土器破片転用の土製品8点と、遺構外出土ながら滑石製の垂飾り1点が特筆される。土製品は、その出土状況から、第1号配石遺構の構築が始まる前後に埋置されたものと考えられる。類例の検索と適切な呼称の付与が、今後の課題となる。垂飾りは旧H－3区からの出土で、平面位置は第1号住居跡の範囲内に収まっており、同住居跡との関連を想定する余地を残している。

近隣遺跡との関係: 本遺跡のほど近く、南東約200mには、坂本北裏遺跡が所在する。本章の最後として、同遺跡の概要を記し、本遺跡との関連について考えてみたい。

坂本北裏遺跡は、松井田町大字坂本字北裏1,225番地他に位置する。1997･1998(平成9･10)年に4,100㎡を対象として調査が行われ、竪穴住居跡と敷石(柄鏡形)住居跡各1軒、配石遺構(報告書中の表現は「環状配石遺構」)4基、集石遺構3基、石囲炉2基、土坑5基の検出が報じられている(松井田町埋蔵文化財調査会 1999)。各遺構の時期については、竪穴住居跡が縄文時代中期中葉(勝坂式期)、敷石住居跡が後期前葉(堀之内式2式期)、配石遺構、石囲炉、土坑はそれぞれ中～後期、集石遺構は不明とされている。このうち敷石住居跡に関しては、時期がやや下って中期後葉～後期初頭の所産となる可能性がある。

調査区北東部の「環状配石遺構2」、北側中央の「環状配石遺構1」、および北西部の敷石住居跡と「環状配石遺構3」を結ぶラインには、わずかながら礫が点在しており、これらの遺構がおおむね横一列に並んで配置されているような印象を受ける。また、調査区中央南西寄りでは、上記のラインとほぼ直交する方向に礫の配列が認められる。

こうした坂本北裏遺跡のあり方と本遺跡とを対照してみると、両遺跡とも地図の等高線に沿うような方向で弧状の配礫が行われ、それと接するように住居跡をはじめとする小単位の遺構が分布している点で、おおむね共通の構成をとっていることが分かる。また、敷石住居跡の時期に関する所見の更新が許されるのであれば、坂本堰下遺跡は同北裏遺跡より遺構の構築時期が新しく、住居跡は巨視的に見て南東から北西へその位置を新たにしていった経緯を推測することができよう。2遺跡の中間区域を考慮に入れると、一帯には合計3～4列ほどの弧状列石が存在していた可能性がある。同様の構成をとるものとしては、安中市野村遺跡例(千田・小野 2001)などが挙げられる。同例では、3列の弧状列石の内側(南部)に隅丸方形の列石が設けられているが、坂本北裏遺跡に見られる弧状の配石と直交する方向の配石は、この種の列石の一部であろうか。

以上のように、坂本堰下と同北裏の両遺跡は、一連の過程によって形成されたひとまとまりの遺跡と考えられる。2度の発掘調査で得られた資料･記録は、縄文時代の配石遺構の構造や歴史的意義を究明するうえで貴重な糧となりうる情報を含んでいる。本編は坂本堰下遺跡の基礎的情報をまとめることでその責を全うするが、周辺遺跡の様相をも視野に入れた二次的な検討によって明らかになる知見もあるように思われる。さらなる追究を期して、結語に代えたい。

〔主要参考文献〕(編著者50音順)

秋田かな子 1995 「柄鏡形住居の一構造―張出部をめぐる空間処遇の理解―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集 帝京大学山梨文化財研究所

阿部伸一郎 1995 「後･晩期社会と集団―住居の分析を中心に―」『奈和』33 奈和同人会

阿部 芳郎 1994 「西ヶ原貝塚出土の堀之内1式土器とその変遷―SK02土坑周辺出土土器の位置づけと1式終末段階の検討―」『西ヶ原貝塚Ⅱ/東谷戸遺跡』 東京都北区教育委員会社会教育課

阿部 芳郎 1998 「堀之内2式土器の構成と地域性―下総台地における堀之内2式土器成立期の様相―」『縄文時代』第9号 縄文時代文化研究会

阿部 芳郎 1999 「精製土器と粗製土器―学史的検討と土器型式による地域認識の問題―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 帝京大学山梨文化財研究所

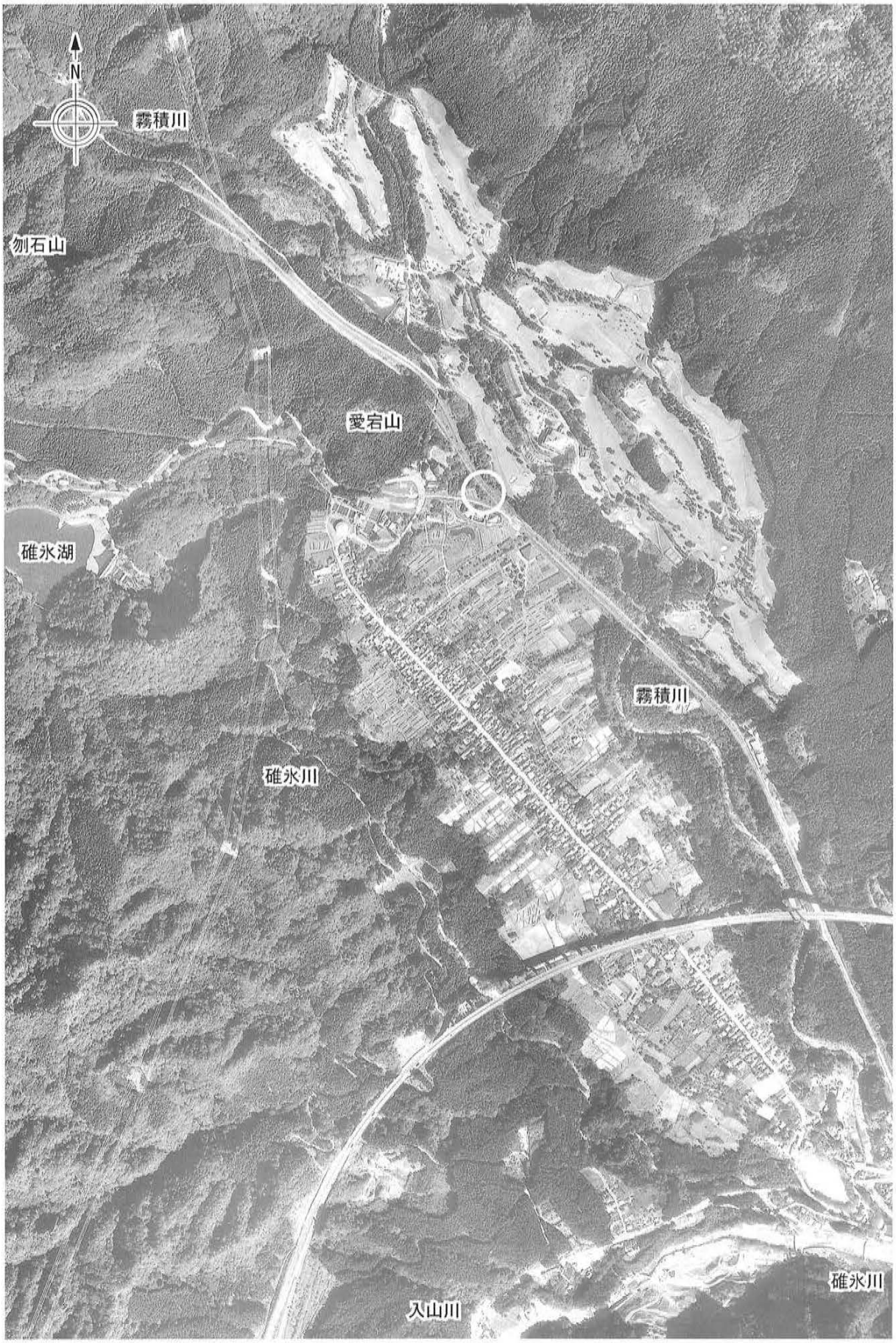
粟島 義明 1988 『姥原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第72集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究(予察)」『調査研究集録』第5冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

石井　寛　1987　「柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察」『縄文時代』第8号　縄文時代文化研究会
石坂　茂　1985　『荒砥二之堰遺跡』　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
石坂　茂　1990　「群馬県内の称名寺式土器」『縄文後期の諸問題』　縄文セミナーの会
石坂　茂　2002　「縄文時代中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現－各時期における拠点的集落形成を視点とした地域的分析－」『研究紀要』第20号　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
今村 啓爾　1977　「称名寺式土器の研究（上・下）」『考古学雑誌』第63巻第1・2号　日本考古学会
岩井 尚子　1998　「敷石住居址の石材敷設状況からみた集団と集落構成」『駿台史学』第103号　駿台史学会
大江正行 ほか　1990　『仁田遺跡・暮井遺跡』　群馬県教育委員会・財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
小川 和博　1984　「堀之内2式土器編年の課題 ― 東関東を中心として ―」『奈和』15年記念論集　奈和同人会
加藤建設株式会社　2001　『東京都青梅市 K-5遺跡』　株式会社新日本建物
金子正人 ほか　1999　『群馬県碓氷郡松井田町 坂本北裏遺跡』松井田町埋蔵文化財調査会報告書(10)　松井田町埋蔵文化財調査会
小林 修 ほか　2003　『溝呂木遺跡群Ⅰ 溝呂木大御堂遺跡』赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書 第21集　赤城村教育委員会
菅谷 通保　2001　「竪穴住居の型式学的研究 ― 縄文時代後・晩期の諸問題 ―」『奈和』23　奈和同人会
鈴木 徳雄　1990　「称名寺・堀之内1式土器の諸問題」『縄文後期の諸問題』　縄文セミナーの会
鈴木 徳雄　1991　「称名寺式の変化と文様帯の系統－「文様帯系統論」と文様帯連続説の再検討－」『土曜考古』第16号　土曜考古学研究会
鈴木 徳雄　1994　「称名寺式の形制と施文域」『東海大学校地内遺跡遺跡調査団報告』4　東海大学校地内遺跡遺跡調査団
鈴木 徳雄　1994　「敷石住居址の連結部石囲施設－群馬県内における敷石住居内施設の一様相－」『群馬県考古学手帳』vol.4　群馬県土器観会
鈴木 徳雄　1995　「称名寺式における充填列点紋の成立－紋様統合方式の複合と変容過程－」『群馬県考古学手帳』5　群馬県土器観会
千田　茂・小野和之　2001　「野村遺跡（中期）」『安中市史』第4巻　安中市
千田 幸生　1997　『新堀東源ヶ原遺跡（行田Ⅲ遺跡）』　日本道路公団・群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会
大工原 豊　2003　「第2章 縄文時代」『安中市史』第2巻　安中市
知久 裕昭　1997　「堀之内1式土器研究序説」『唐澤考古』16　唐沢考古会
中島 庄一　1985　「縄文土器文様の研究－土器文様からみた称名寺様式期の地縁集団の構造－」『東京考古』3　東京考古談話会
中島 庄一　1989　「称名寺式土器様式」『縄文土器大観3 中・後期』　小学館
西田 泰民　1989　「堀之内・加曽利B式土器様式」『縄文土器大観3 中・後期』　小学館
間宮政光 ほか　1997　『行田梅木平遺跡（行田Ⅱ遺跡）』　日本道路公団・群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会
山本 暉久　1986　「縄文時代後期前葉の集落」『神奈川考古』22　神奈川考古学会
山本 暉久　1987　「敷石住居終焉のもつ意味」『古代文化』第39巻1～4号　財団法人 古代学協会
山本 暉久　1996　「敷石住居址研究の現状と課題」『パネルディスカッション「敷石住居の謎に迫る」資料集』　神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人 かながわ考古学財団
山本 暉久　1998　「柄鏡形（敷石）住居と廃屋儀礼 ― 環礫方形配石遺構と周堤礫 ―」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集　渡辺誠先生還暦記念論集刊行会

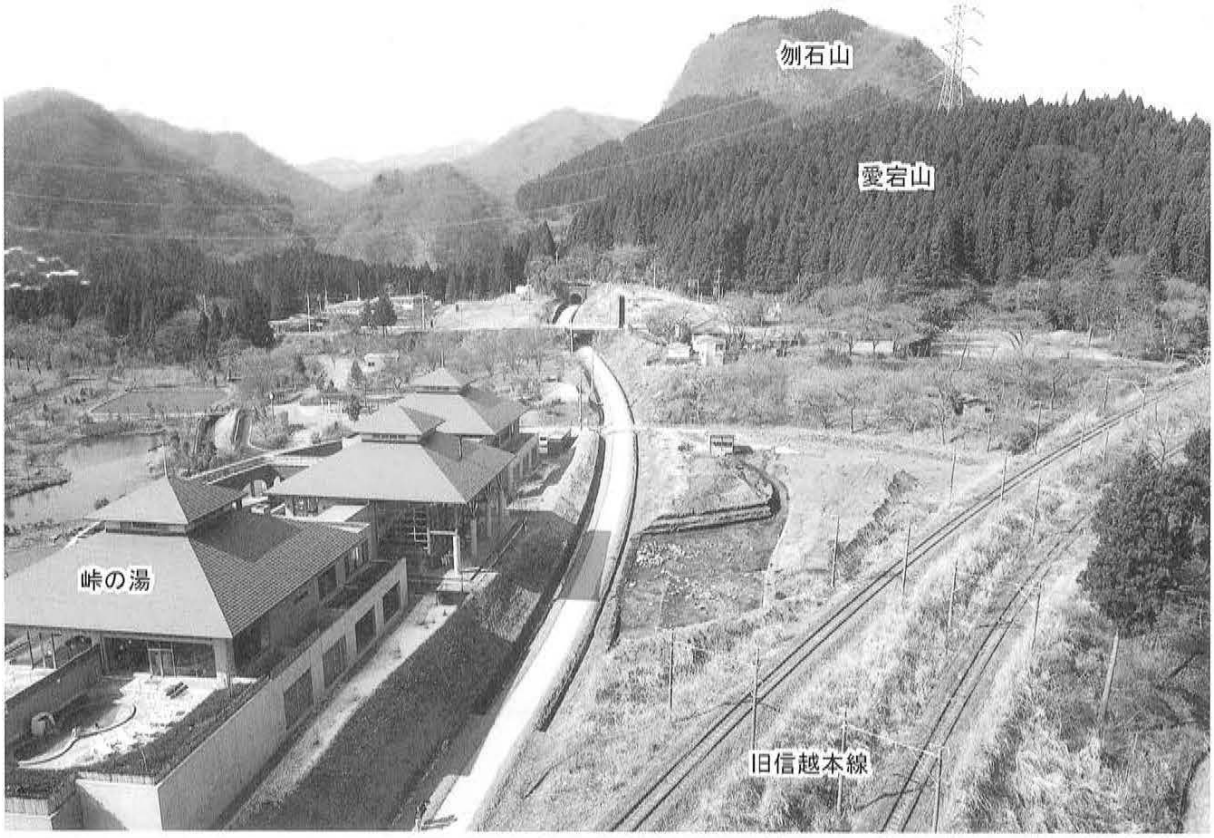
写　真　図　版

調査終了直前の記念撮影より

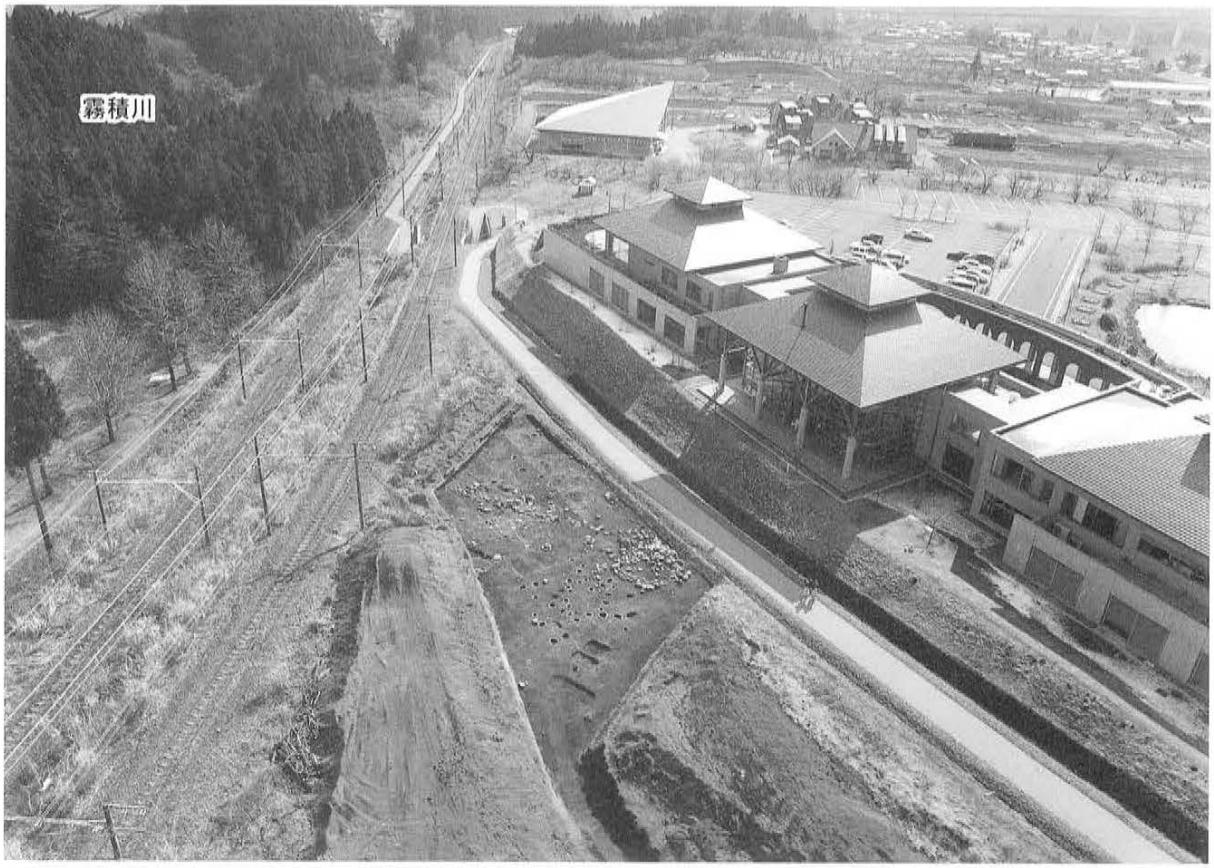


（国土地理院、2001年10月撮影）

遺跡の位置および周辺の地形

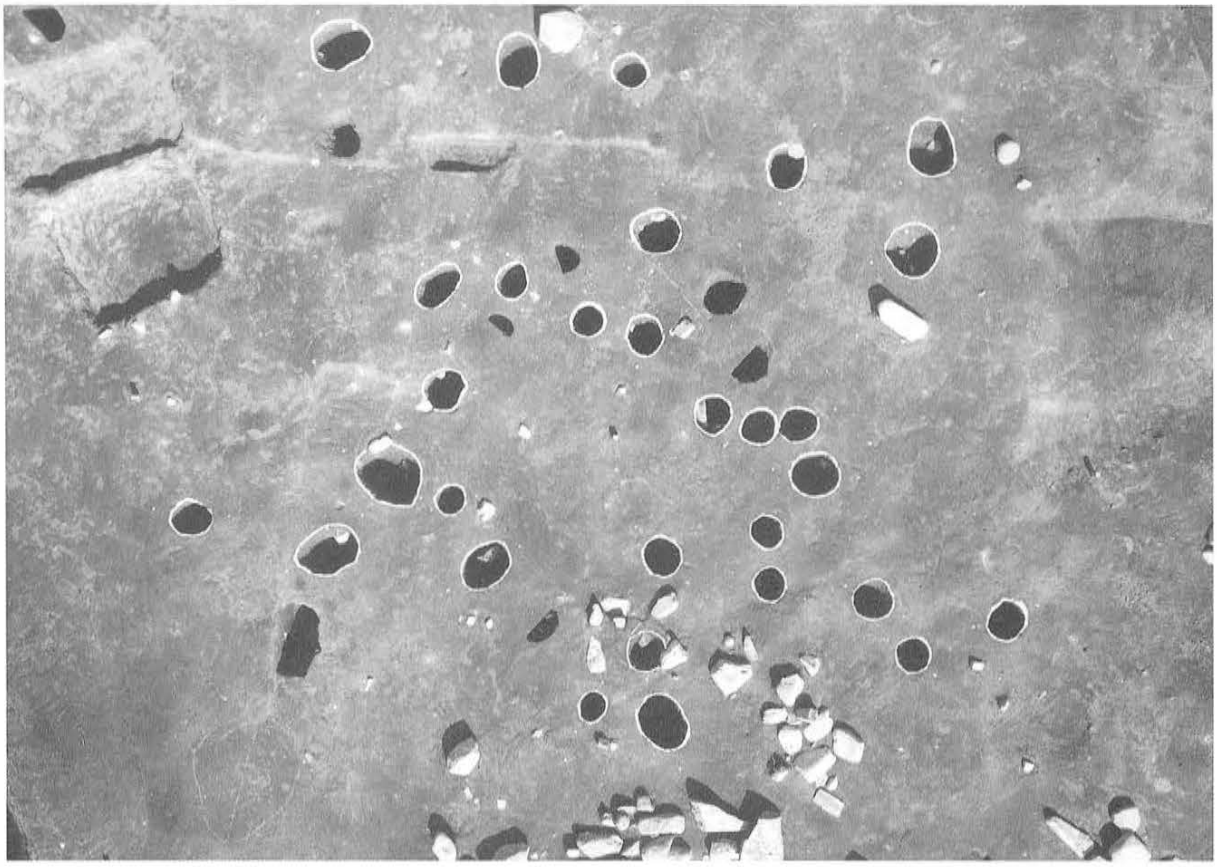


遺跡遠景（東から）



遺跡遠景（西から）

遺跡全景

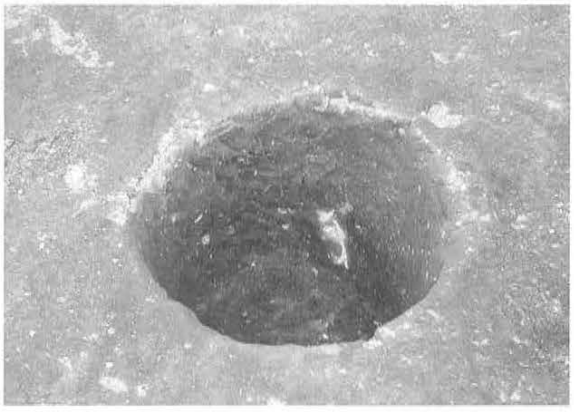


第 1 号 住 居 跡

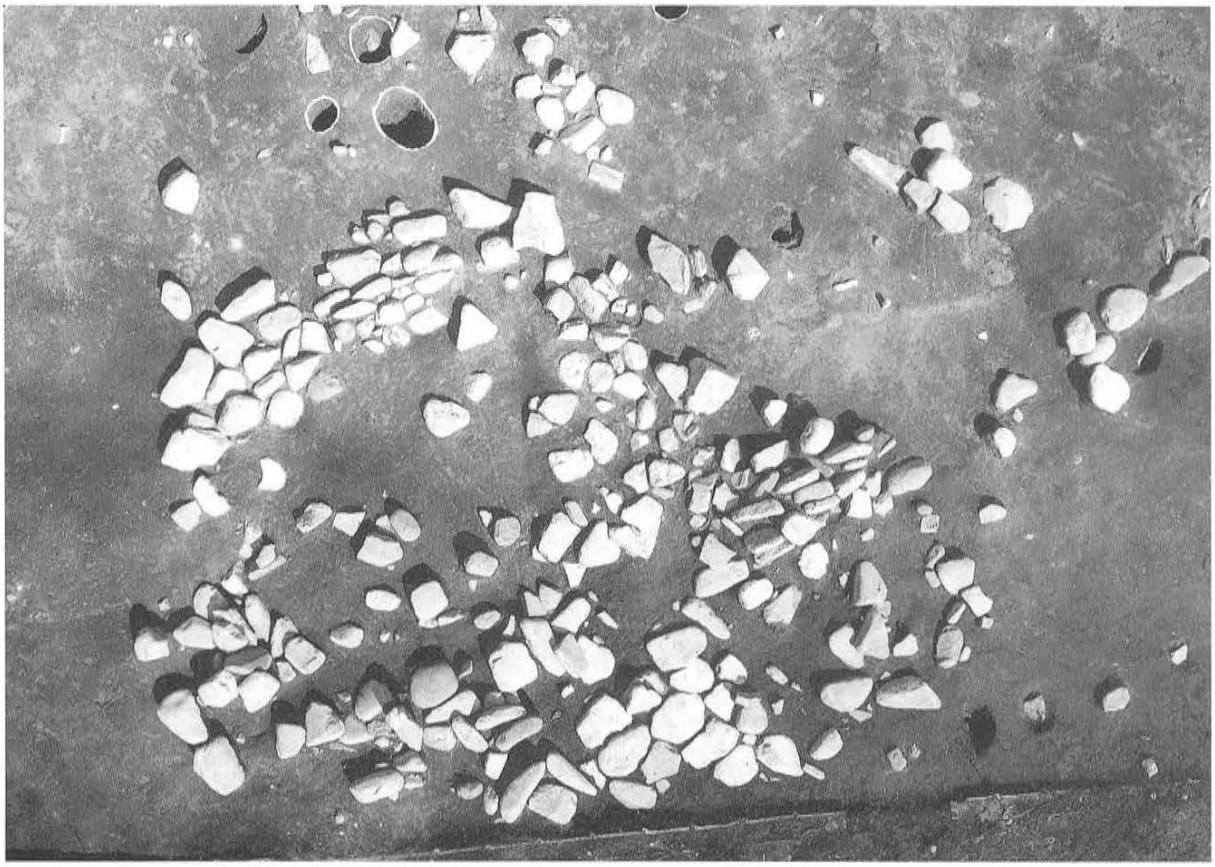
第1号住居跡 P-2

第1号住居跡 P-19

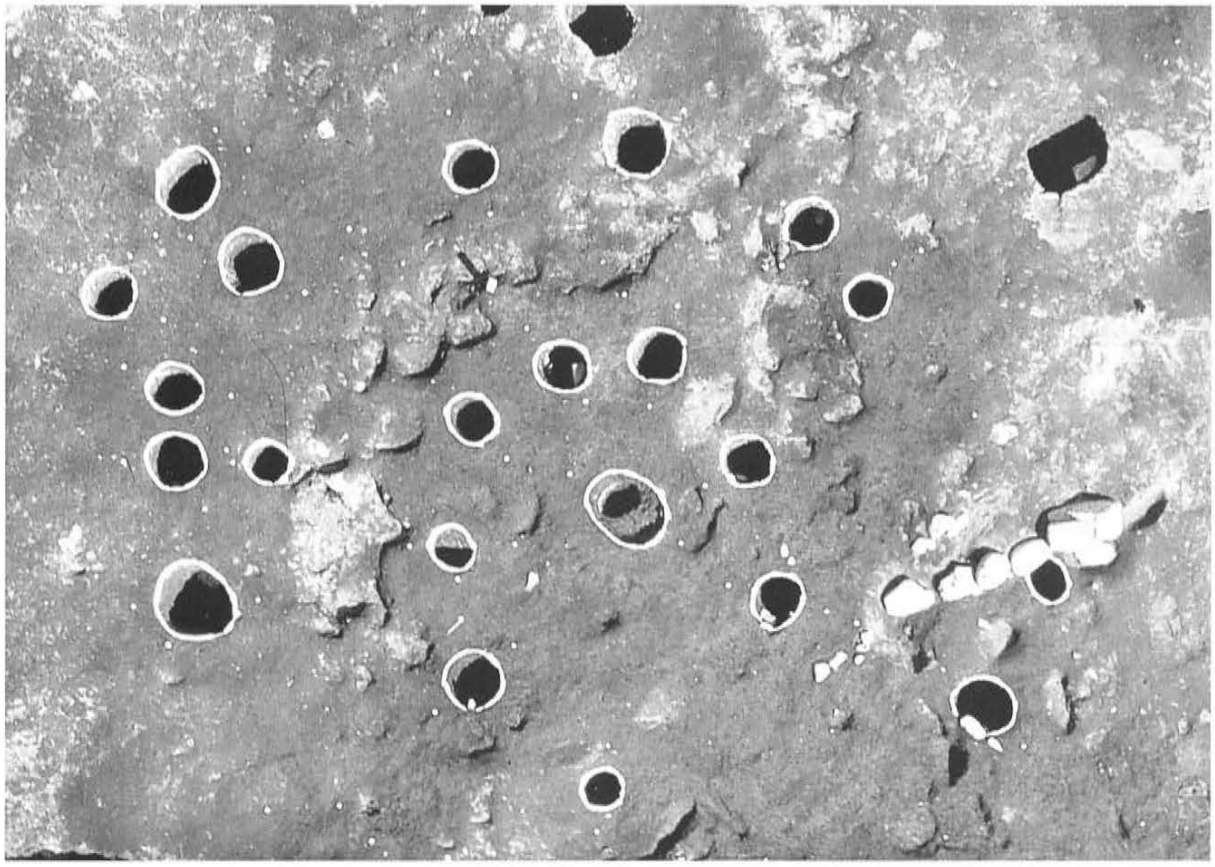
第1号住居跡 P-26



第1号住居跡 P-27

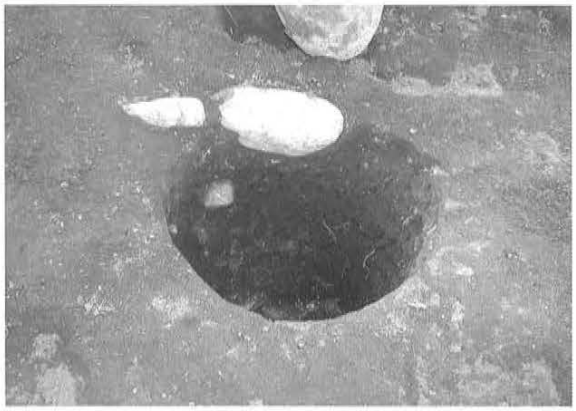


第2号住居跡 敷石検出状況



第2号住居跡 ピット

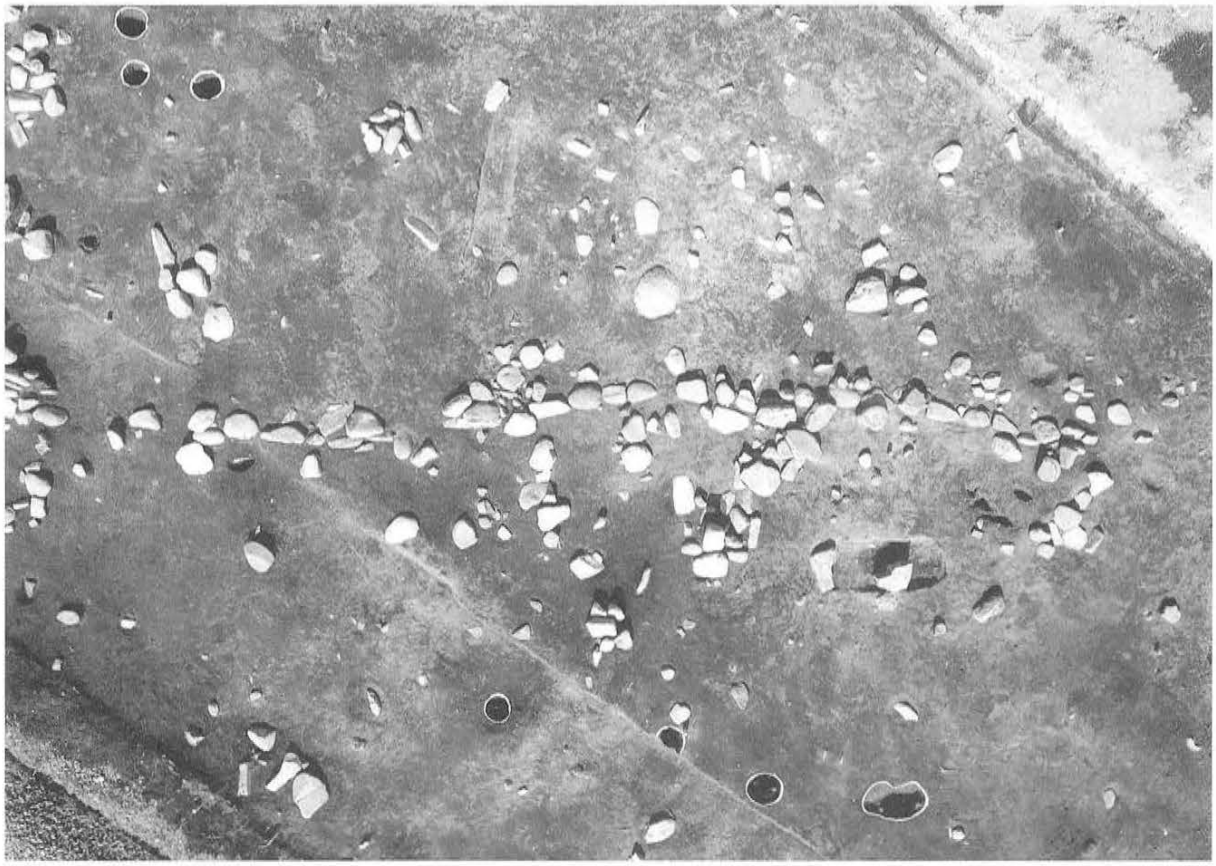
第2号住居跡 炉



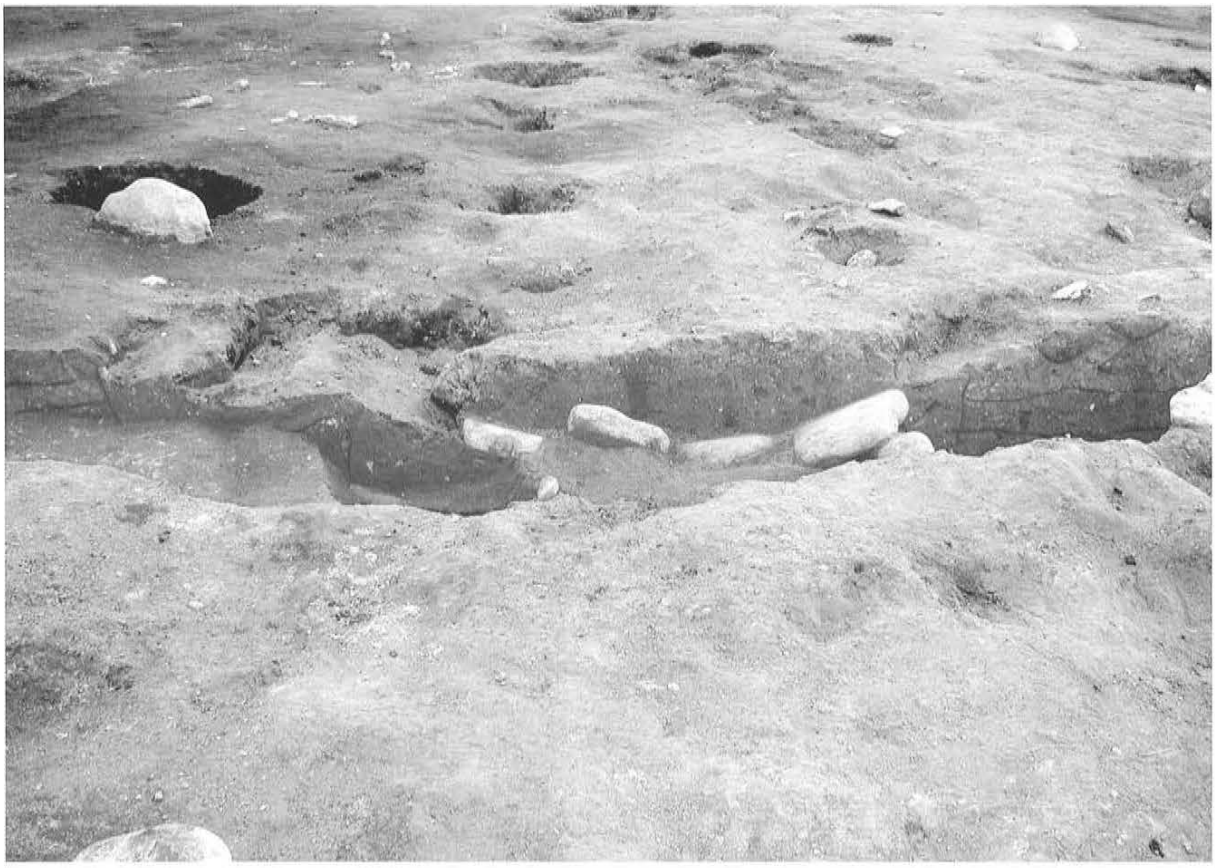
第2号住居跡 P-14

第2号住居跡 P-16

第2号住居跡 凹石出土状況



配石遺構群



第1号配石遺構 サブトレンチ調査状況

第1号配石遺構 サブトレンチ内遺物出土状況

第2号配石遺構

第3号配石遺構 検出状況

第3号配石遺構 立石復元状況

第3号土坑 遺物出土状況

第4号土坑

第9号土坑

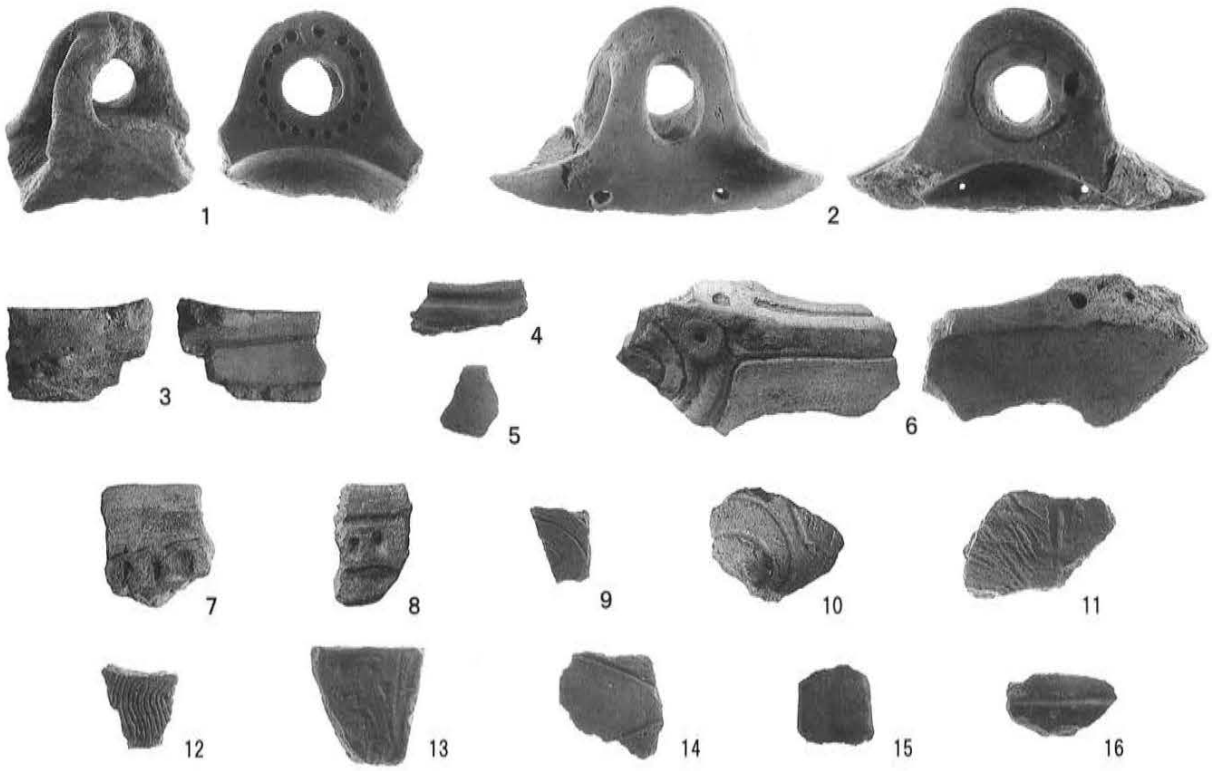
第10号土坑

第1号ピット

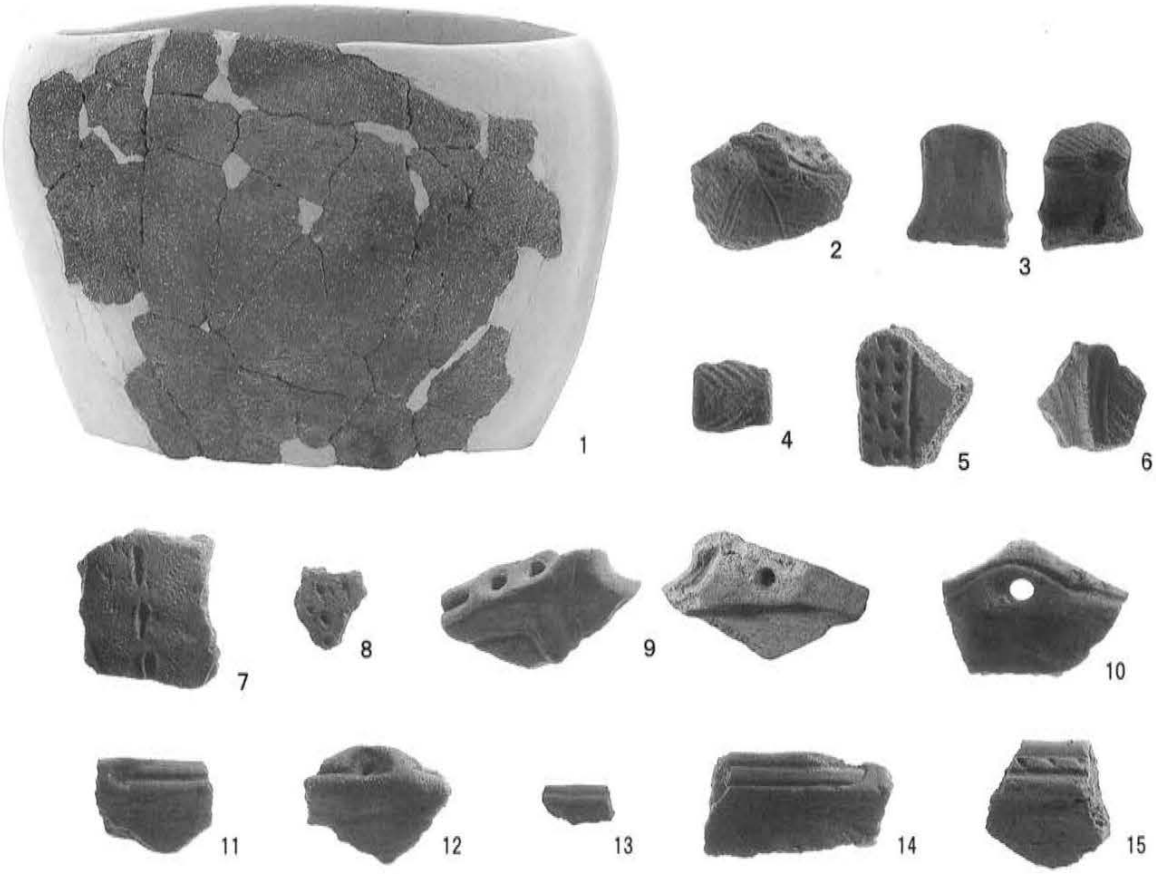
第2号ピット

第3号ピット

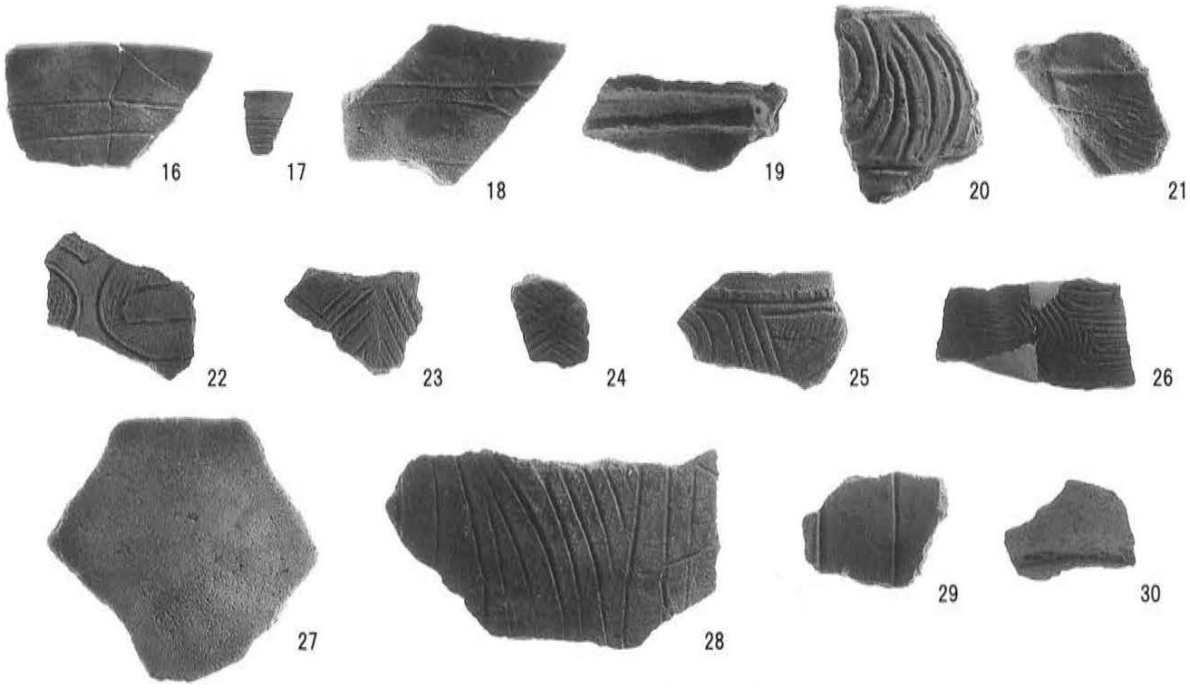
調 査 風 景



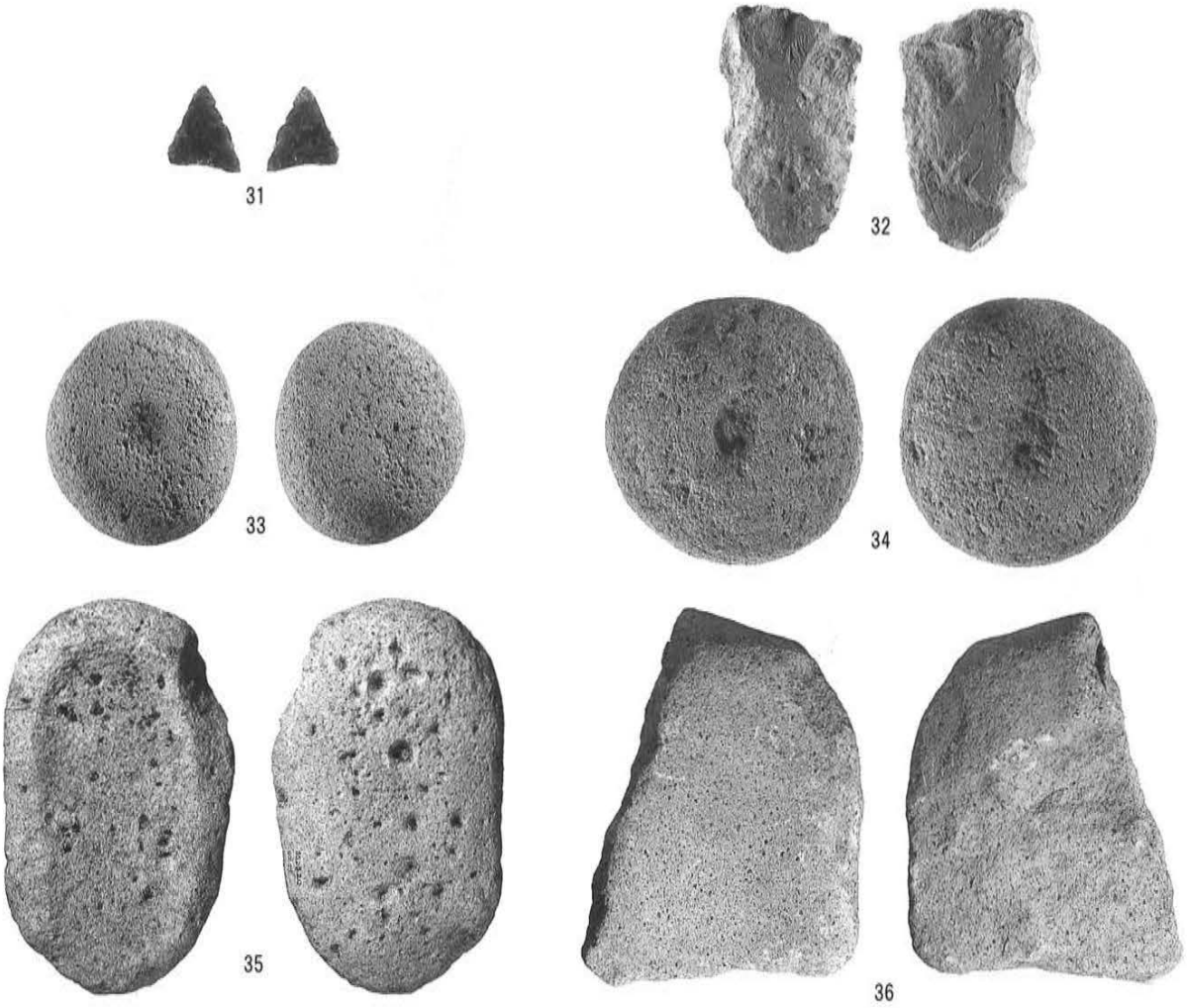
第1号住居跡 出土遺物



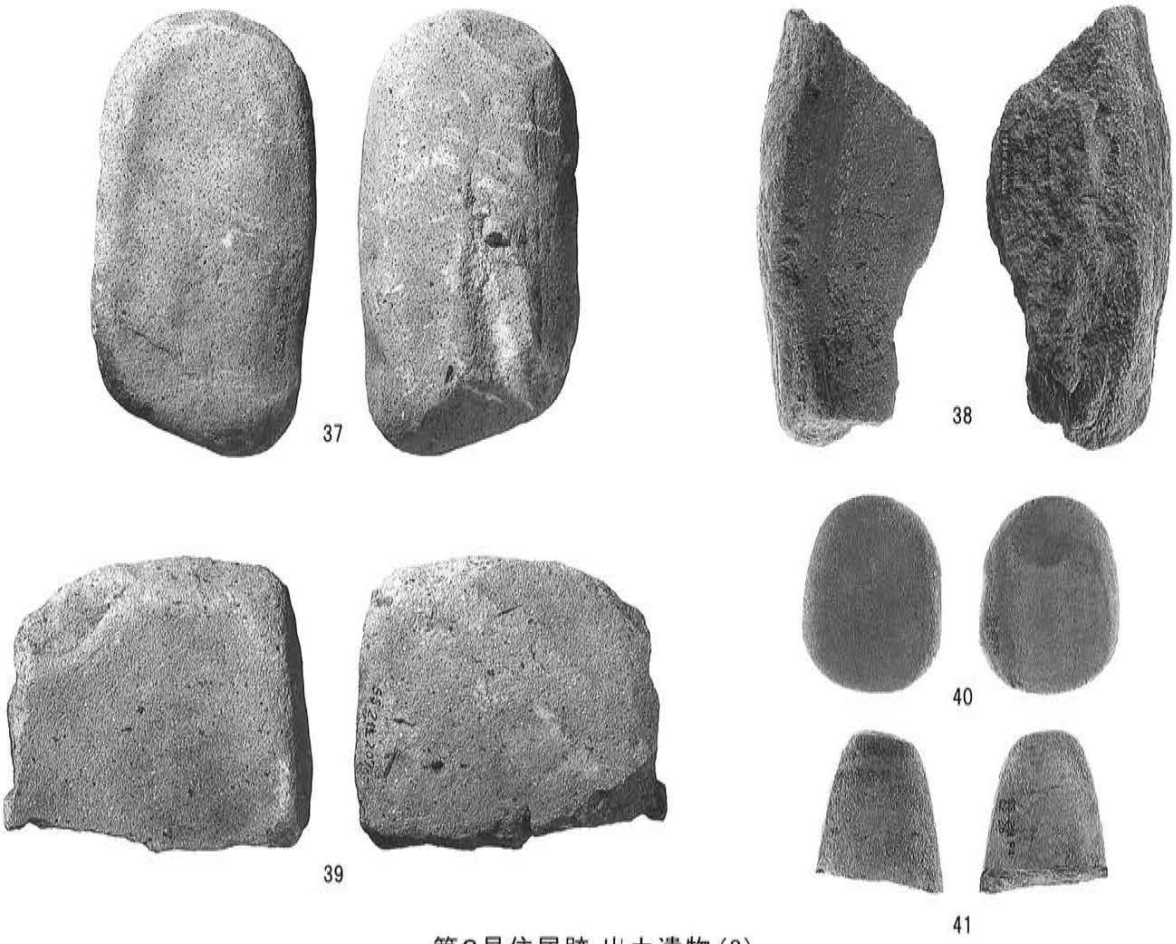
第2号住居跡 出土遺物(1)-①



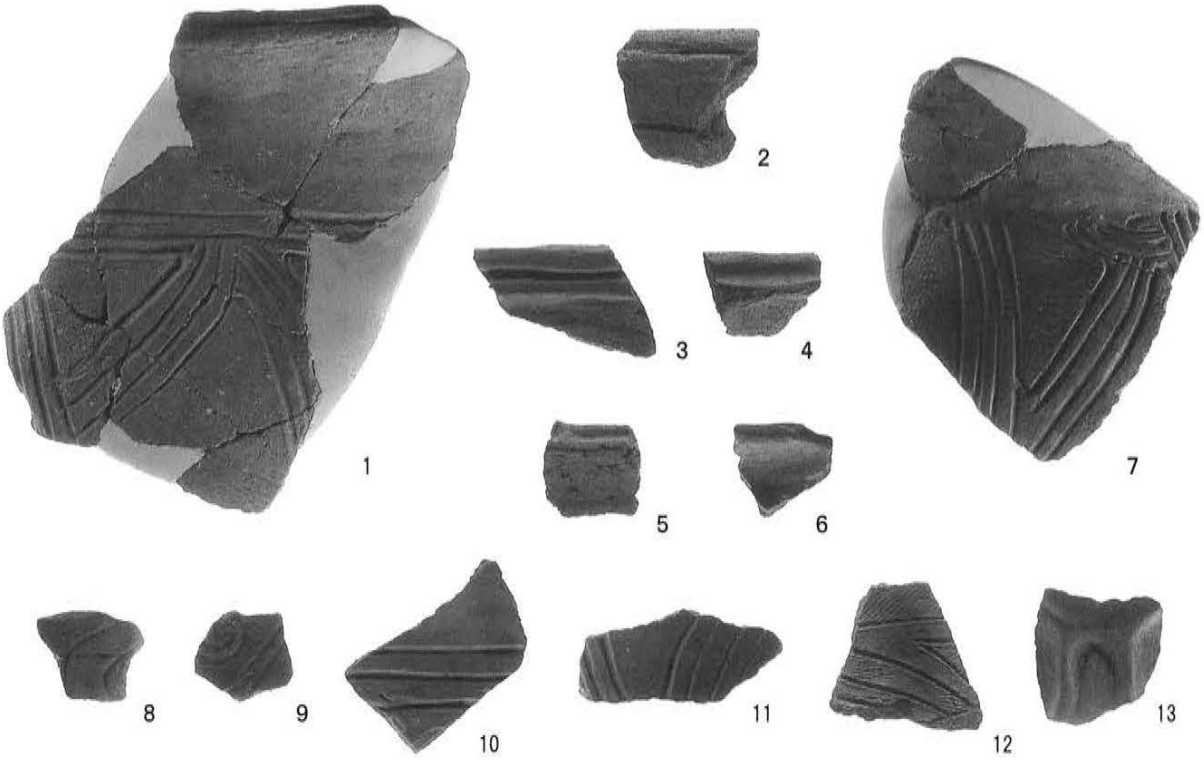
第2号住居跡 出土遺物(1)-②



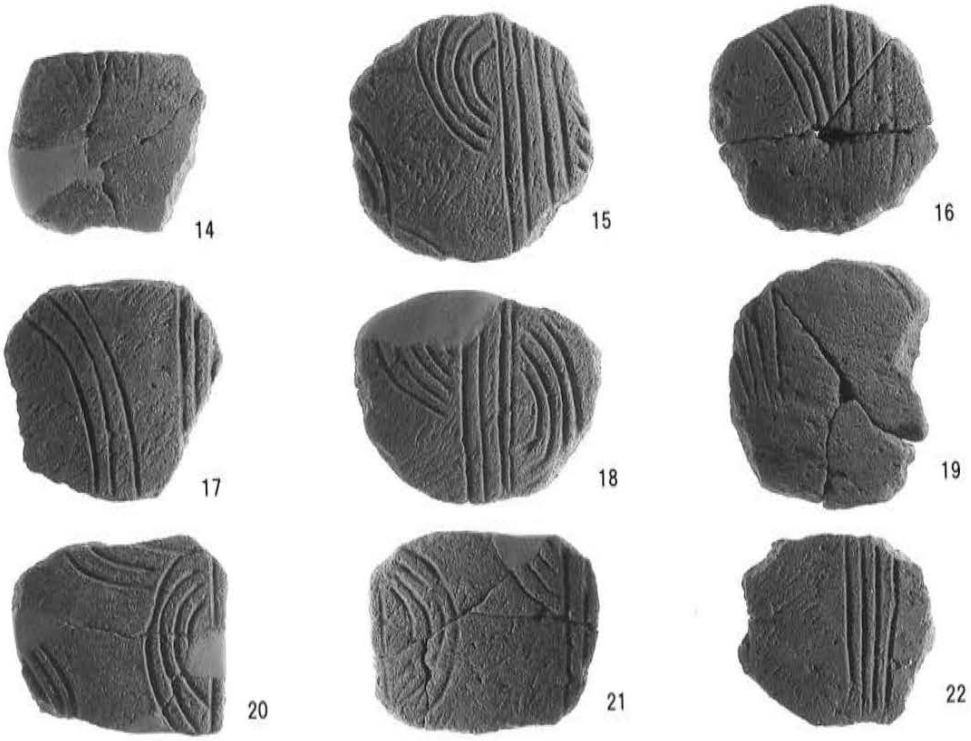
第2号住居跡 出土遺物(2)



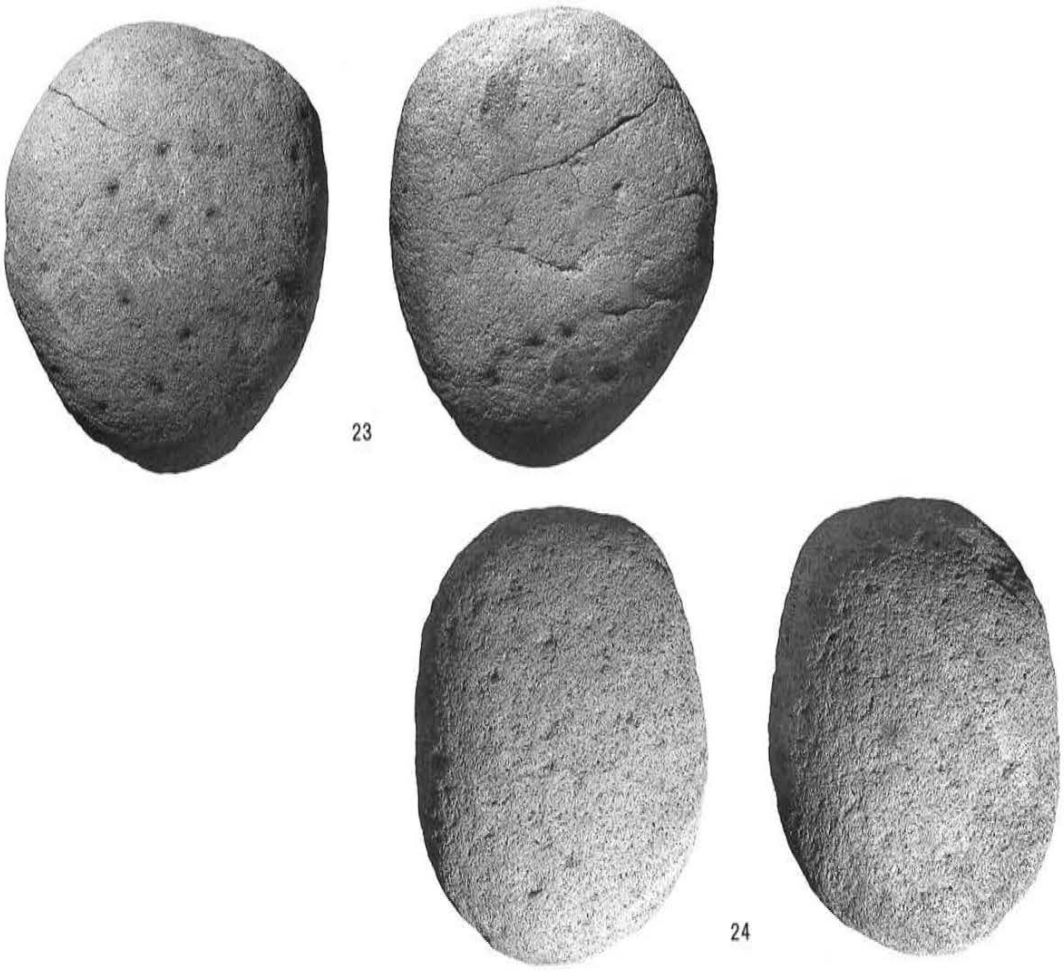
第2号住居跡 出土遺物(3)



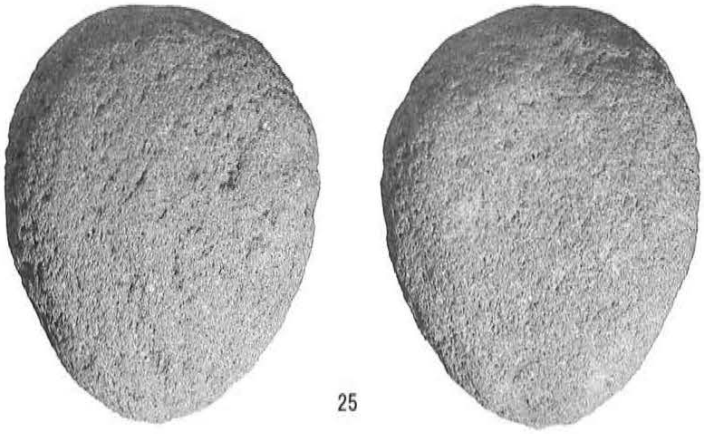
第1号配石遺構 出土遺物(1)



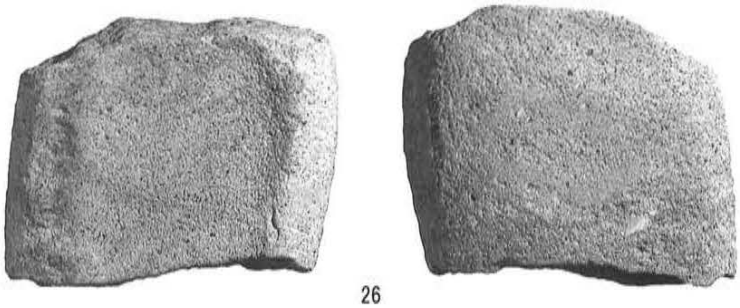
第1号配石遺構 出土遺物(2)



第1号配石遺構 出土遺物(3)



25

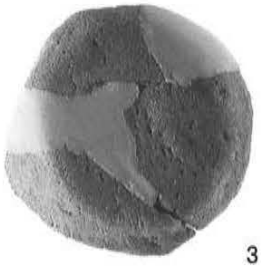


26

第1号配石遺構 出土遺物(4)

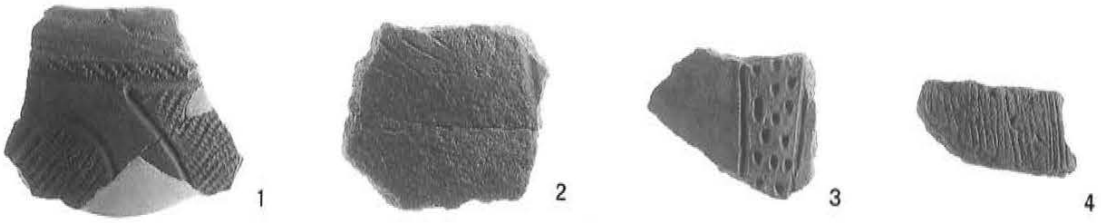
1

2



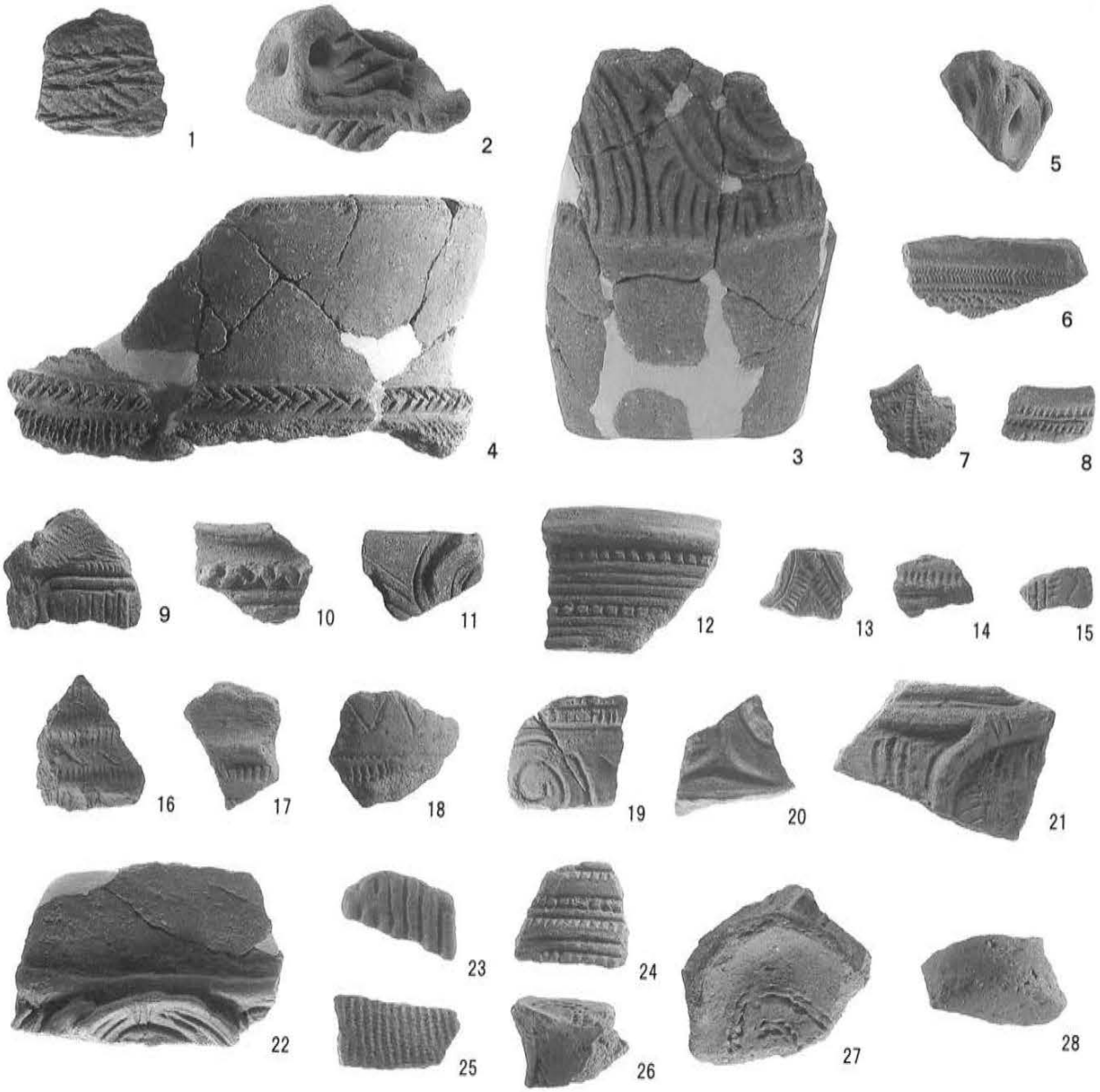
3

第3号土坑 出土遺物

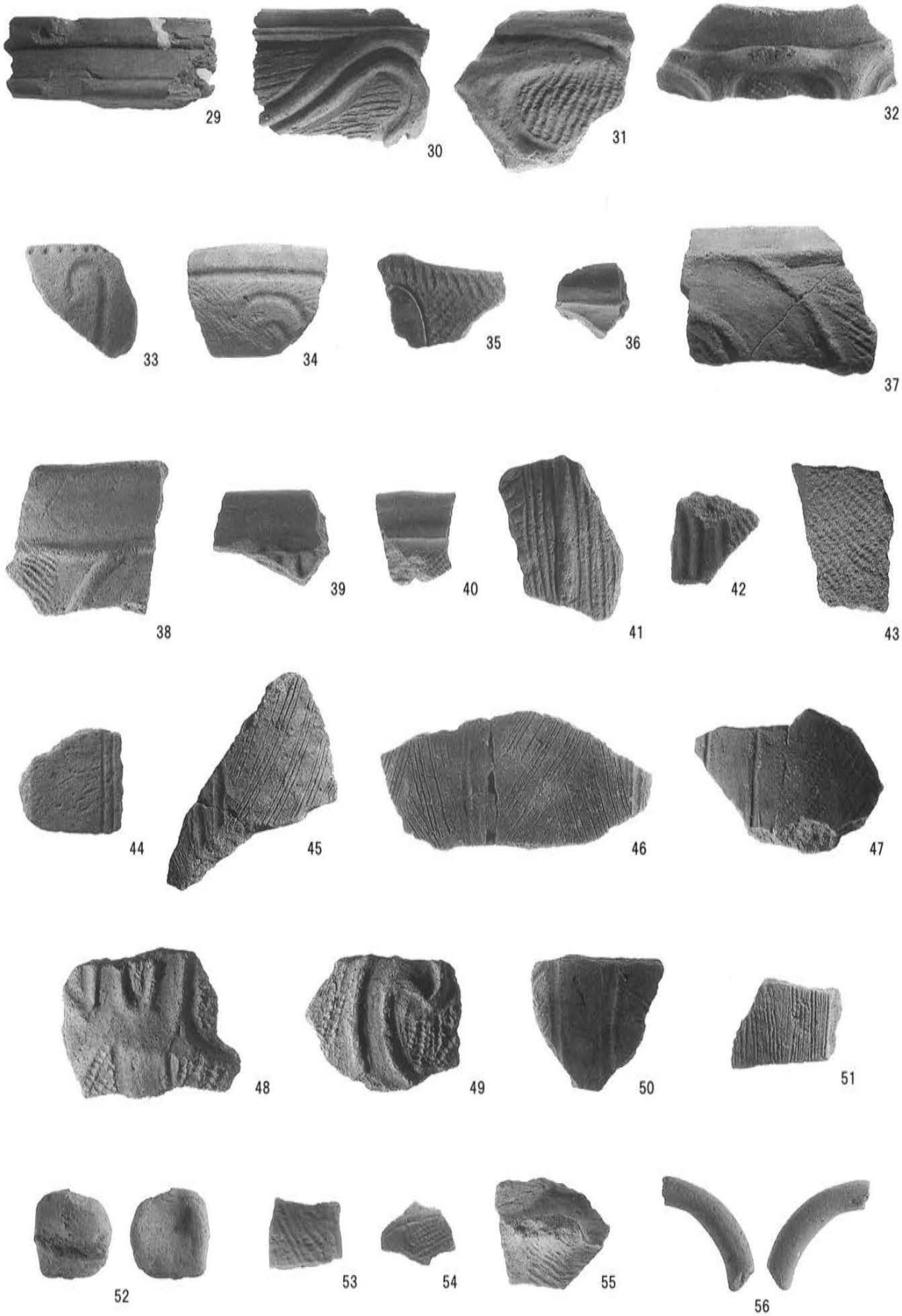


第4号土坑 出土遺物

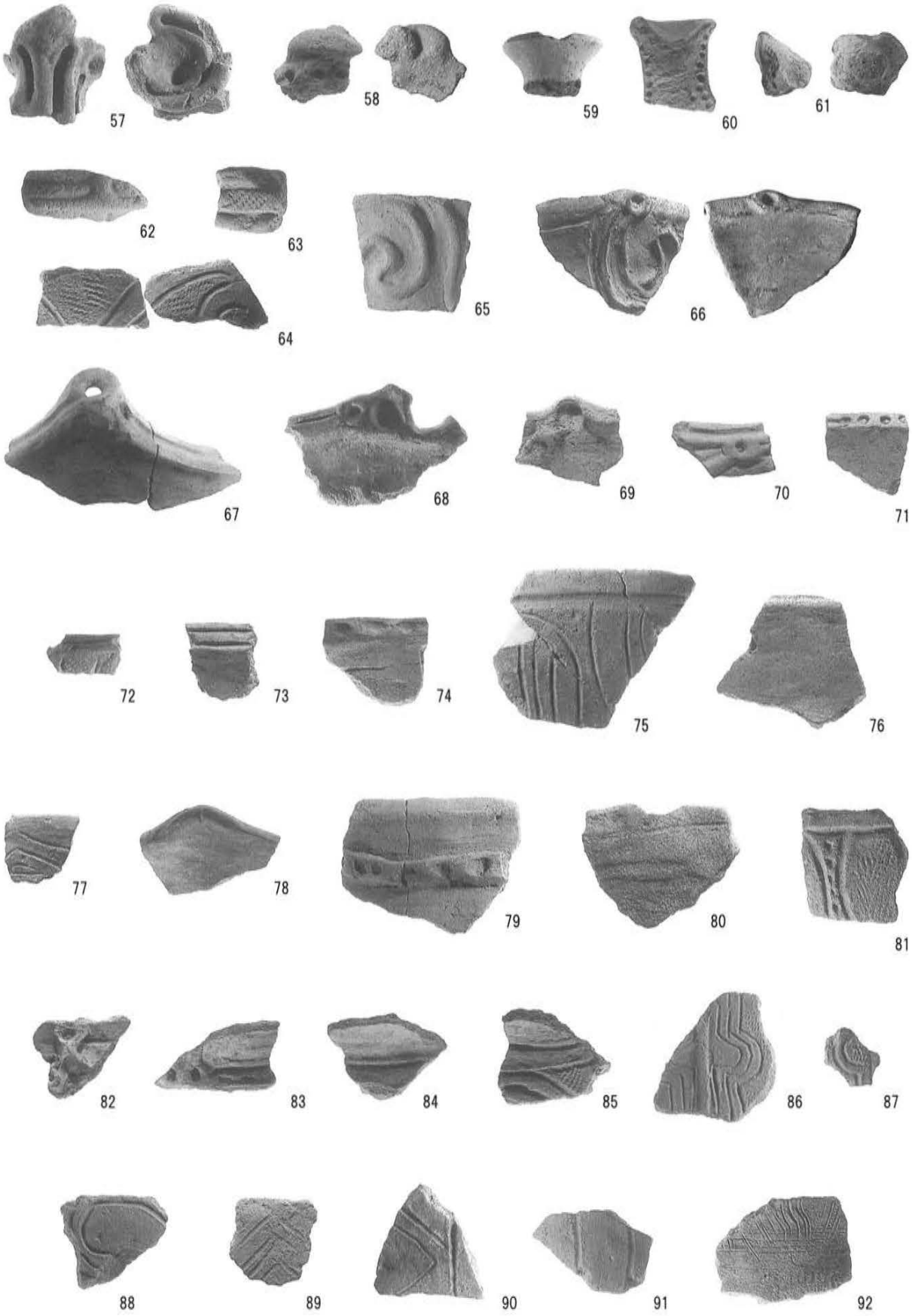
第2号ピット 出土遺物



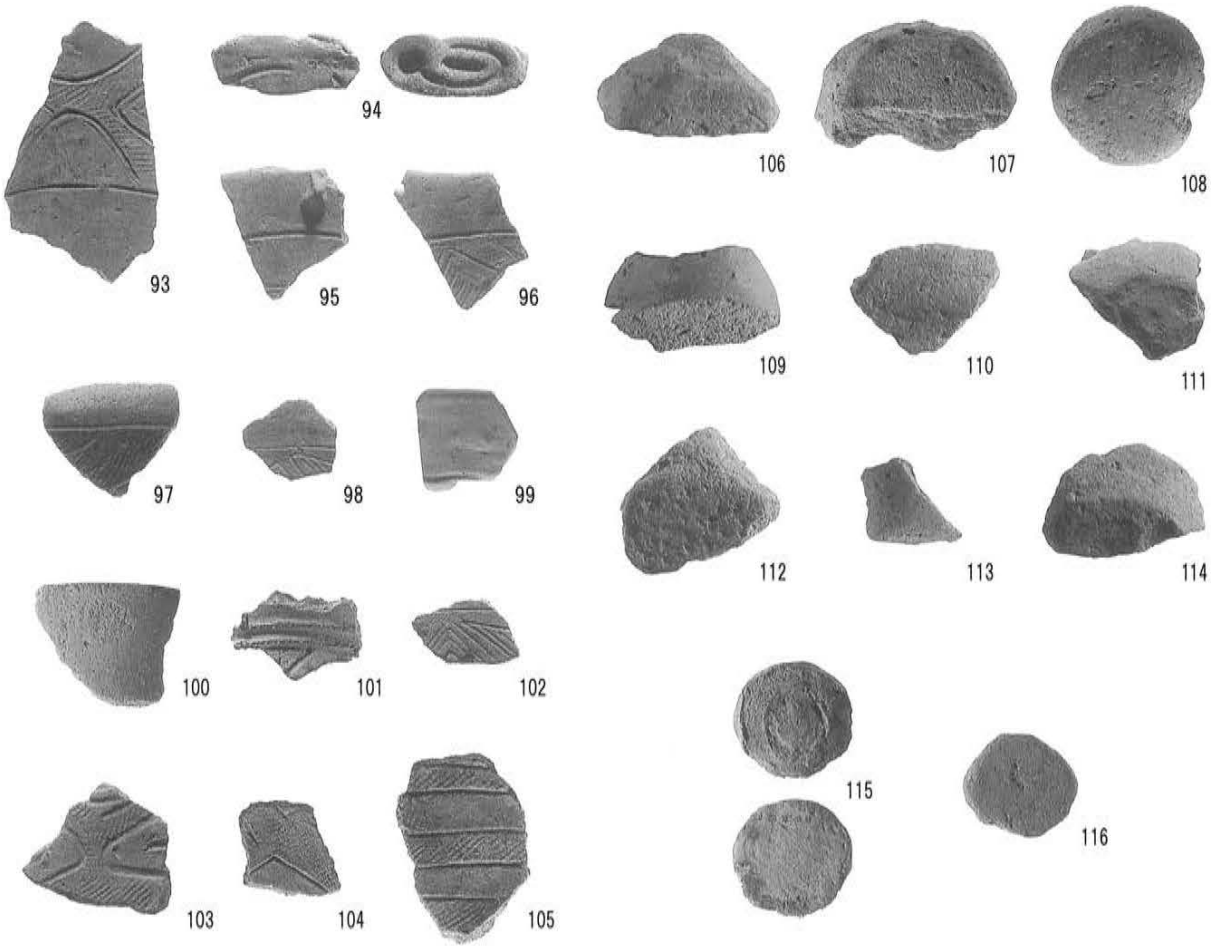
遺構外出土遺物(1)


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56

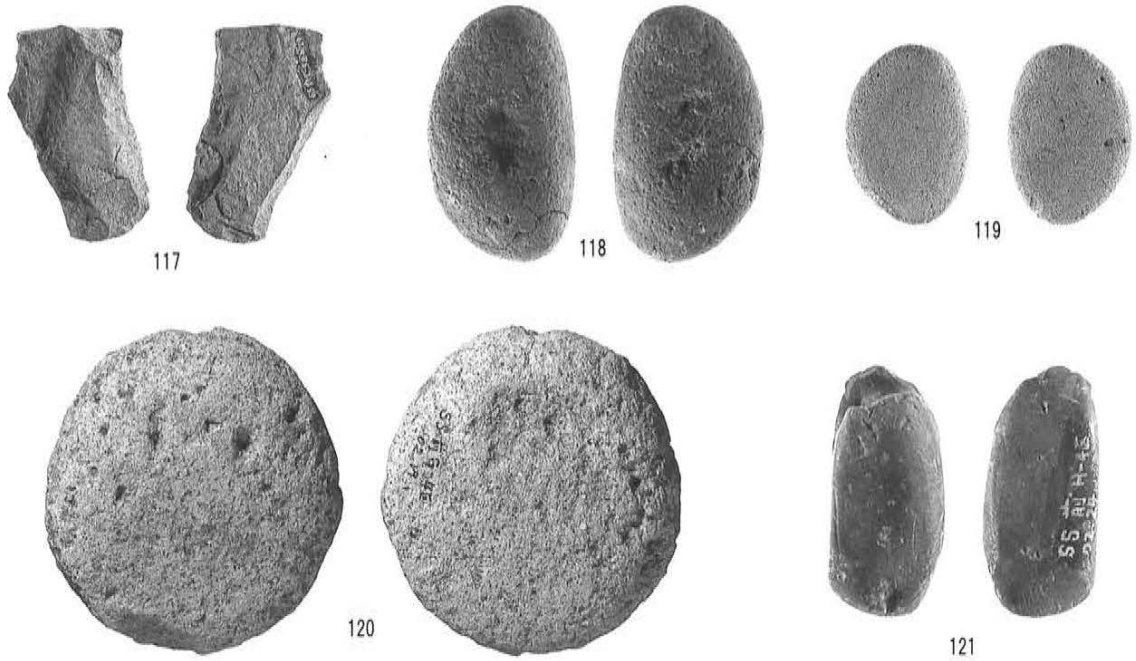
遺構外出土遺物(2)


57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92

遺構外出土遺物(3)



遺構外出土遺物(4)



遺構外出土遺物(5)

報告書抄録

ふりがな	さかもとせきしたいせき
書　名	坂本堰下遺跡
副書名	横川駅周辺地域整備事業（二点間輸送事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	坂本堰下遺跡調査会報告書
シリーズ番号	(1)
編著者名	壁　伸明　和久裕昭　長井正欣
編集機関	松井田町教育委員会・坂本堰下遺跡調査会
編集機関所在地	〒379－0292　群馬県碓氷郡松井田町大字新堀245　TEL 027－393－1111
発行年月日	西暦2004（平成16）年9月30日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
坂本堰下遺跡（さかもとせきしたいせき）	群馬県碓氷郡松井田町大字坂本字堰下1,211－1他（くんまけんうすいぐんまついだまち おおあざさかもとあざせきした）	104019	36°21′05″ 36°20′93″	138°43′20″（新座標・世界測地系） 138°43′32″（旧座標・日本測地系）	2004.01.19 ～ 2004.09.30	約550㎡	鉄道文化むら関連施設建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂本堰下遺跡	集落跡	縄文時代 後期前葉	敷石（柄鏡形）住居跡　2軒 配石遺構　4基 土坑　12基 （うち1基は埋設土器を伴う） ピット　17基	縄文土器　約2,600点 石器　19点 土製品　9点 石製品　1点	配石遺構群を境とし、その外側と内側で遺物の分布密度に格差あり。第1号配石遺構の下部より、土器破片を円板状に整形した土製品が出土。

坂本堰下遺跡調査会報告書(1)

坂本堰下遺跡

— 横川駅周辺地域整備事業(二点間輸送事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2004(平成16)年9月24日　印刷
9月30日　発行

編集・発行　松井田町教育委員会
坂本堰下遺跡調査会
〒379-0292 群馬県碓氷郡松井田町大字新堀245
TEL 027-393-1111

印　刷　日本特急印刷株式会社